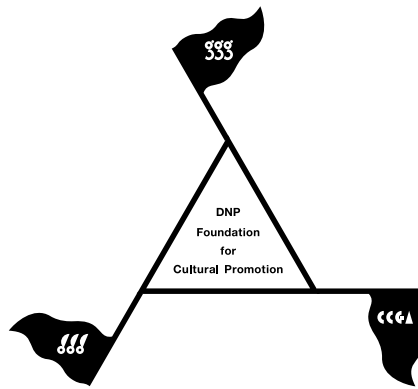


Graphic Art & Design Annual



2021

[表紙デザイン]

なにごともしらぬことの尊さと奇跡を今思う。

それぞれの思い出の中にあるだろう、かつてのあの晴れ晴れとした日がまた来るように…

そんな願いを込めて「夜明け」をテーマにした。

DICの色見本帳からふさわしい色を選んだら、「ベビーピンク」と「ベビーブルー」という名の色だった。

色に染まっていない色、ということになるか。

葛西 薫

[Cover Design]

I realize now how precious it is – how miraculous it is – when nothing occurs.

For this year's cover, I decided on "dawn" as my theme.

I chose this with a wish that a new day will dawn for everyone,

a bright and cloudless day of the kind we all retain in the recesses of our memory.

When I selected the colors appropriate for my idea from the DIC Color Guide,

I discovered what I had chosen are called "baby pink" and "baby blue."

Could their names be meant to suggest newborn innocence, colors not yet colors?

Kaoru Kasai

Graphic Art & Design Annual 2021 ggg ddd CCGA

Publication: DNP Foundation for Cultural Promotion

DNP Ginza Building, 7-7-2 Ginza,

Chuo-ku, Tokyo 104-0061

Phone: +81 3 5568 8224

Planning & Editing: DNP Foundation for Cultural Promotion

Art Direction: Shin Matsunaga

Design: Shinjiro Matsunaga, Moemi Kiyokawa

Cover Design: Kaoru Kasai

Photography: Mitsumasa Fujitsuka (ggg), Akihito Yoshida (ddd)

Translation: Rei Muroji

Printing & Binding: Dai Nippon Printing Co., Ltd.

Contents

目次

はじめに	5
北島 義俊 (公益財団法人DNP文化振興財団理事長)	

序文:

日常の暮らしにひそむノスタルジア。“生活賛歌”としてのデザイン	6
葛西 薫 (アートディレクター)	

1 展示事業

ギンザ・グラフィック・ギャラリー (ggg) 2021-22	16
gggが、世界に「影響を与える場」であり続ける為に……	30
特別寄稿: 矢萩 喜從郎 (建築家・デザイナー)	
京都dddギャラリー (ddd) 2021-22	34
CCGA 現代グラフィックアートセンター 2021	44

2 教育・普及事業

ggg, dddギャラリートーク	54
CCGA 版画工房ワークショップ	58
出版活動 2021-22	59

3 アーカイブ事業

DNPグラフィックデザイン・アーカイブ	62
---------------------	----

4 国際交流事業

動きの感覚 — 日本のスポーツ・ポスター展	68
国際交流基金シドニー日本文化センター	

5 研究助成事業

グラフィック文化に関する学術研究助成	72
2021-22年度 助成実績	75

展覧会概要 2021-22	76
展覧会一覧 1986-2022	80
ギャラリー概要	90

Foreword	5
----------	---

Yoshitoshi Kitajima (Chairman of the board of directors, DNP Foundation for Cultural Promotion)

Introduction:

Nostalgia Lurking in Everyday Life – Design as a Paean to Living	6
Kaoru Kasai (Art Director)	

1 Exhibitions

ginza graphic gallery (ggg) 2021-22	16
How to Sustain ggg's Phenomenon as a "Global Influencer"	30
Special Contribution by Kijuro Yahagi (Architect and Designer)	
kyoto ddd gallery (ddd) 2021-22	34
Center for Contemporary Graphic Art (CCGA) 2021	44

2 Education & Enlightenment

ggg, ddd Gallery Talk	54
CCGA Print Studio Workshops	58
Publications 2021-22	59

3 Archiving

DNP Graphic Design Archives	62
-----------------------------	----

4 International Exchange

A Sense of Movement: Japanese sports posters	68
The Japan Foundation Gallery (Sydney)	

5 Research Grants

Graphic Culture Research Grants	72
2021-22 Financial Support Activities	75

Review of ggg, ddd and CCGA 2021-22	76
List of Exhibitions 1986-2022	80
Galleries' General Information	90

Foreword

はじめに

2021年度、ギンザ・グラフィック・ギャラリー（ggg）では、6回の企画展を開催しました。なかでもオリンピック文化遺産財団との共催で行った「オリンピック・ランゲージ：デザインでみるオリンピック」展では、5つの大会（1964年東京、1968年メキシコシティ、1972年ミュンヘン、1994年リレハンメル、2004年アテネ）に焦点を絞り、各大会のデザインがどのように統一感と個性を表現したかを探りました。東京2020オリンピックにあわせて開催したこともあり大変好評でした。

京都dddギャラリーでは4回の企画展を開催しました。「石岡瑛子 デザインはサバイブできるか」展は、3,691名（1日平均84名）の来館者となり、ギャラリーが太秦へ移転後の一日の平均入場者数の記録を更新しました。

現代グラフィックアートセンター（CCGA）では、3回の企画展を開催しました。東日本大震災から10年目を迎えた2021年3月から6月には、「つながりのデザイン：DNPグラフィックデザイン・アーカイブコレクション」展を実施しました。震災発生直後に広まった「絆」という言葉を、グラフィックデザインという視覚言語の観点から改めて捉えなおす展覧会となりました。

教育・普及事業としては、これまでのホームページに加え、TwitterとInstagramによる情報発信を開始しました。また、YouTubeに当財団の公式チャンネルを開設し、作家やゲストキュレーター、注目クリエイターによる対談映像や音声配信しました。

国際交流事業では、2020年のロンドンのオンライン講演会がきっかけとなり、国際交流基金の海外拠点を巡回する「スポーツ・ポスター展」の企画が始まり、第1回展は、シドニー日本文化センターを会場にして、日本を代表する6人のグラフィックデザイナーの作品24点が展示されました。本展は、今秋パリ日本文化会館への巡回が予定されています。

新型コロナはいまだに終息の兆は見えてきませんが、ようやくいろいろな社会活動の制限が解除されつつあります。こうした時代の中で、当財団としては、グラフィック文化の振興を通じて、社会に貢献できるよう積極的に事業を進めて参ります。

今後とも、皆様のご理解とご支援をお願い申し上げます。

公益財団法人 DNP文化振興財団 理事長
北島義俊

In fiscal 2021 a total of six regular exhibitions were mounted at ginza graphic gallery (ggg). Among them, "Olympic Language: Exploring the Look of the Games," which was co-organized with the Olympic Foundation for Culture and Heritage, focused on five Olympic Games: Tokyo 1964, Mexico City 1968, Munich 1972, Lillehammer 1994, and Athens 2004. The exhibition explored how each of these Games expressed individuality while preserving the unified look of the Olympics. Timed to coincide with the 2020 Olympic Games underway in Tokyo, the show was extremely well received.

Four exhibitions were held at kyoto ddd gallery (ddd) during the year. "Survive - Eiko Ishioka" attracted a total of 3,691 visitors, an average of 84 per day, setting a new attendance record since the gallery relocated to the Uzumasa area of Kyoto.

At the Center for Contemporary Graphic Art (CCGA), three exhibitions took place during fiscal 2021. From March through early June, "Ties and Bonds in Graphic Design: DNP Graphic Design Archives Collection" was held to mark 10 years since the Great East Japan Earthquake and tsunami disaster. The exhibition revisited the ties and bonds so actively formed in the immediate wake of that multifaceted calamity, viewed from the perspective of graphic design as a visual language.

In our Education & Enlightenment activities, this past year we augmented our previously launched website with new accounts on Twitter and Instagram. The Foundation also established its own official channel on YouTube, on which we posted videos or audio presentations featuring designers, guest curators and notable creative artists.

In the area of International Exchange during the year, we inaugurated "A Sense of Movement: Japanese Sports Posters," an exhibition that will tour overseas locations associated with The Japan Foundation. The exhibition, the outgrowth of an online talk program conducted in London in 2020, opened in Australia at The Japan Foundation Gallery in Sydney. It featured a selection of 24 posters by six leading Japanese graphic designers. The exhibition is next scheduled to take place this autumn at Maison de la culture du Japon à Paris in France.

Today, the Covid pandemic still shows no indication of coming to an end, but limitations placed on social activities are finally being gradually eased. In these difficult times, the DNP Foundation for Cultural Promotion will continue its diverse operations aimed at making positive contributions to the global community through the promotion of graphic culture. We sincerely ask for your sustained support and understanding in the years ahead.

Yoshitoshi Kitajima
Chairman of the board of directors, DNP Foundation for Cultural Promotion

日常の暮らしにひそむノスタルジア。“生活賛歌”としてのデザイン

葛西 薫

アートディレクター

—去年はギンザ・グラフィック・ギャラリーで「NOSTALGIA」展を開催されました。ちょうど30年前にも個展を開催されています（葛西薫展“AERO”）。今回の展示には、どういった思いで取り組まれましたか？

葛西薫氏（以下、葛西） 緊張しました。ギンザ・グラフィック・ギャラリーというのは、日本のグラフィックデザインの極地であり、先輩方が素晴らしい仕事を発表してきた憧れの場です。デザイナーになり始めの頃から遠くに見ている感覚がありますからドキドキします。

30年前の展示会のときも「ギンザ・グラフィック・ギャラリーでの個展は一生に一回だろう」と思い、とにかく一生懸命やったのです。それが実現して、自分の中では決着感もありましたので、まさか、もう一回声がかかるとは思ってもいませんでした。

ですから、展示のお話が来たときは、どうしたものだろう？と。正直なところ、なんとしても展示会をしたいという気持ちがあるわけではなく、自分の中に表現欲がたまっているわけでもなかったですから。でも、お話をうかがって観念したというか（笑）。せっかくの機会ですから、過去の仕事を見てもらうというよりも、オリジナルなものを展示しようと決めたわけです。

—当初は2020年に開催の予定が、1年ほど延期になりました。

葛西 そうなんです。お引き受けしようと思心して準備に取りかかった頃、新型コロナウイルスの流行が始まりまして。ステイホームで仕事をするのが多くなりました。しかし、延期になったことで熟考する時間が持てました。夜な夜な「おまえは何をやりたいのだ？」と自問自答する日が続き、過去二十数年ぶりの手帳を見直したりしました。

僕はスケッチブックのような小さな手帳をいつも持っていて、何か思い浮かぶたび、図形や模写、言葉などを記す習慣があるんです。時間が経ってからそれを見直すことで刺激やヒントを得ることがよくあります。そうやって過去の断片から、他人を眺めるような感覚で自分を探し出すとでもいうのでしょうか。

それで展示会のタイトルを決めようと思ったとき、一番最初に出てきたのが「NOSTALGIA」という言葉でした。ほかにも10ぐらいのタイトル案を考えたのですが、「NOSTALGIA」は言葉の響きもいい。過去の思い出に浸るような感じは恥ずかしいという気持ちもありつつ、なんだかかと言ってこの道50年になってしまいましたから。恥ずかしがらずに、自分の中にある何かを形にしてみようとしたのです。

具体的には、子供の頃、何かに夢中になっているときに感じた楽しさみたいなものを表現できればなど。例えば、コンパスで円を描いたり、ハンダゴテで松ヤニを溶かしながらラジオをつくったり。器具を使って工作をするときの楽しさが“主役”なんです。その結果出来上がる形が、僕にとってのデザインになっていきますから。

—「NOSTALGIA」というのは、今回の展示タイトルにとどまらず、葛西さんのデザインのキーワードなのかもしれません。見ていると、どこか遠くの知らない場所に連れて行かれるような感覚があります。たんに懐かしいという意味でのノスタルジーではなく、未知の世界を垣間見せてくれるような。ギャラリートークでも、「虫になって街を見ているかのような視点でデザインを考えていく」というお話が興味深くて。

葛西 僕の中に“往復運動”があるのではないのでしょうか。対象に急にクローズアップしたり離れたり、他人のように自分を眺めてみたかと思うと、また自分に戻ったり。主観と客観がいくたびも入れ替わりながらものづくりをしていく。そういう行いの中から距離感だったり、パースペクティブが出てくるところはあるかもしれませんね。

ただ、僕は好きなものに定見がないんです（笑）。なんでもいいというわけではないけれど、たいていのことなら、この世にあるものは面白いと思います。音楽でも、昔のフォークソングや芹洋子の「四季の歌」みたいなピュアな流行歌を聞くと「うわっ、いいじゃないか」と思ってしまう一方で、浅川マキのあの暗いブルースにも浸れてしまう。道をひとつに決められないところがありますから、これが自分だときっぱり言い切れる何かがないような気もして。

—とはいえ、お好きなものの傾向はあるのでは？

葛西 どうなんですか？ 言ってみれば“真っ当な”ことに惹かれます。でも、“真っ当”ってなんだか恥ずかしいですよ？ 特にデザインをする人間は不良に憧れるというか。この世界に入る人はみんなおしゃれだし、カッコいいことを言えるし、とがっている。そこに僕のデザイナーとしての気後れの原因があり、「この仕事、自分なんかで大丈夫かな？」なんて若い頃から思ってきたわけです。劣等感ではないのですが、萎縮感があるというか。たぶんそれは僕が美術大学に通ったり、アカデミックなデザイン教育を受けるチャンスがなかったことに関わっていて、何とかしたいといつも思っていたところなんです。そうすると何を見ても、「絶対ここから何かを吸収

するぞ」というふうに考えてしまう。それは不安感や恐怖心の裏返しでもありますけど、何が正しいかわからないから何事にも関心が持てるのだと思います。

だから、もし僕が若い人に向けて、何かひとつアドバイスできるとすれば、「デザインに役に立たないものはない」ということかもしれません。例えば野菜を育てたとします。野菜をひとつ育てることで、肥料のことから成長のこと、季節や温度のことから販売・流通にいたるまで、結果的にすべてのことに触れることになります。それは最終的にデザインに関係してくるんです。生活のすべて、日常の行為のすべてがデザインに役立たないわけがないという意識があります。

——いまのお話は詳しくうかがってみたいところです。昨年「NOSTALGIA」展に続いて、今年はCCGA現代アートセンターで「葛西薫 POSTERS since 1973」展が開催されました。2つの展示を拝見して、脳裏に浮かんだ言葉があります。それは「異郷のプロレタリアデザイン」というものなんです。葛西さんが「NOSTALGIA」という言葉でおっしゃっている要素と同時に、ある種の「庶民性」「生活感」というのでしょうか？そういうものを大らかに肯定する力強さが、どの仕事にも宿っていると感じました。

一連の「ウーロン茶」(サントリー)のキャンペーンから「ヒロシマ・アピールズ」のポスター(2013年)など、広告でも作品でも、ビジュアルの向こう側から「生活賛歌」が聞こえてくるというか。強者ではない立ち位置から見た日常の端正でちょっと不思議な風景。ここで言う「プロレタリア」は、いわゆる「労働者階級(ワーキング・クラス)」より広い意味合いなのですが、さっきおっしゃった「生活のすべてがデザインである」というお話と関わってくる気がするんです。

葛西 「異郷のプロレタリアデザイン」というのは、ちょっとびっくりする言葉ですね。ギクッとさせられます。確かになにげない日常の生活や日々の仕事を大事にしたいという思いはずっと抱いてきましたから。なかでも「ワーク」という言葉には思い入れがあって、サン・アドの38周年記念展に際して書籍を出すことになったとき、『SUN-AD at work』というタイトルにしました(2002年)。「ワーク」という言葉には、エンジンがいつも回っているような感じがあって、それでいてホッとするような何かがあるんですね。

なんて言うんでしょう？基本的に僕は、メジャー志向ではないんです。商品でも歌や映画でもみんなそうですが、ヒットさせること、メジャーになることを目標にすることが間違っていると思っていて、「いいね！」ボタン

も好きではない(笑)。なんでもやたらめったら拡大しよう、成長しよう、矢印を上を上げようとするのはおかしいのではないかな？そんな気持ちをずっと抱いてきました。

僕の中では、真実はたぶん少数派、どちらかというともマイナーなほうにあります。マイナーなものから学んだら、世界はもっと平和になるのではないかなと思うのです。

だから大企業の仕事をしたときも、いわゆるメジャーではない方向で提案することが多いです。それで仕事なくなる場合もありますが、いやなものはいやというか、ストレートにそうは言わないまでも「違うのではないですかね？」ということは伝えます。特に広告などは、「はい、笑って」とみんなニコニコ、笑顔になる。歯をむき出して笑うわけですけど、そんなに歯をむき出して笑うことは、日常そんなにならざらうと。

それが幸せか？と言われれば、僕はそうではなく、そんなことばかりやってたら疲れると思います。静かで淡々とした何も起こらないことが大切で、その中に実はすごいものが隠されている。ですから、これ見よがしに「どうだ！」というよりは、一見何も無い日常の中に、何かグッと来るものを感じる人が多いですね。

——クライアントワークと個人的な仕事では、葛西さんの中で向き合い方は同じでしょうか。

葛西 大きいところでは同じだと思います。ただ広告、それもマス媒体の場合は不特定多数の人が目にするわけですから、コマーシャルだったら見たくなくても目に入ります。そのぶん責任のようなものがありますから、もし子どもが見たらどう思うだろう？ 具合の悪い人が見たらどう思うだろう？といったことは、やはり意識しますね。

個展なんかの場合だと、グッと深入りできるぶん、ある意味では自分を丸出しという表現の自由度は高いです。しかし、「見る人全員にわかってもらわなくてもいいのではないかな？」という思いは両者に共通しています。いずれにせよ、人前に出す以上は自分が納得したい気持ちはどこかあります。

つくったものが世に出てから後悔はしたくないですから。それでどんな小さな仕事でも、ついトコトンやってしまうところがある。注目はされなくてもいいのですが、僕として一定のレベルというものがあり、そこに達するまでは手が止められないんですね。

どんな仕事のときも、頼んでくれた相手の思いが100だととして、こちらのつくるものが50や60だと申し訳ない気持ちになります。デザインやコミュ

ニケーションの力で、相手の思う100に近づくにはどうすればいいのか？
そういうことを一生懸命考えるわけです。相手の懐に入るといのか、その人に“なれる”くらいの気持ちで。

——依頼主に同化するくらいまでトコトンやるということですね。

葛西 ええ、まず誘いがあることがうれしいですから。おおむね仕事はうれしいことで、うれしい人から誘いがある。だからその人になれるでしょう。“なれる”というのは互いに共通点があるということ。だから面白いですね。ただ、最初から共通点を見出せているわけではなく、お話を聞いて色々考えたり、手を動かす中で共通点が見つかっていくものなのですが。ただ、いつも思うのは、100の魅力のものを120や150にはできないんです。それは大袈裟といふか、身の丈に合わないものをつくっている気がしてしまって。そのあたりは技術職といふか、僕は職人でありたいなという気持ちはどこかあります。

——いまお話しくださっていることは、葛西さんのデビューから50年の中で最初から備わっていたスタンスなのでしょうか。あるいは仕事を続ける中で気づいたり、身についた部分も多いのですか。

葛西 そうですね。根っこは最初からあったかもしれませんが、始めた頃はもう、どうなるかわからないでいましたから。このように構わずしゃべれるようになったのは、つい最近じゃないですか？

結局、そうせざるを得なかったんだと思います。北海道弁に“ならさる”とか“やらさる”という言い方があります。「このようにしよう」と意識的に行うのではなく、やっているうちに「つい、そうになってしまう自分」といった意味合いなのですが。

ありますよね？ スケートでも真っすぐ滑っているつもりが、知らないうちに左に曲がってしまう——なんてこと。そういうとき「左に曲がらさる」と言うんです。いわば無意識にそうになってしまう癖のようなものですね。たぶんだれにもそれがあつて、それに従わざるを得なくなってしまうでしょう。無理して右に行こうとしても、長い目で見たら、結局左に曲がっていたという。

まあ、そのほうが楽なのでしょうね。デザインしているときいつも思うことですが、分かれ道がいつも目の前にあります。青か赤か、太いか細いか、濃いか薄いかなど、AかBかの選択をずっと続けているわけです。たどり着いた場所が結論ですが、それも“ならさる”自分のなせる技で、結果的に

「ああ、こうなったのだ」と思います。最初ぼんやりイメージしていたものと違う方向性のものでできたりすると、「ああ、こうならさったか」という感じで(笑)。

——アートディレクターは、写真家やイラストレーター、そのほかの職種の方々とのコラボレーションで“ならさる”部分もありますよね？

葛西 まさしくそうです。そのとき組んだ人が大半を決めてしまう場合さえあつたりします。でも、それもやはり面白いんです。予測しないことに出くわすことと、それを認めて「いいね」と感じることはすごく新鮮です。それは自分の発見でもあるし、「人が教えてくれた自分」という感じがどこかにあつて。ある人と組んだおかげで、自分の中の未知なる何かが引き出されるといふか。コラボレーションには、本当に先のわからない面白さがありますね。

——そうやって見出される“異郷”もあるのだと思います。ギャラリートツアーで「デザインには水のようなところがある」とおっしゃってましたが、確かにそういうものなのかも。水は自由自在で、流されるほうにならされていきますから。

葛西 そうだと思います。ただ、「水は低きに流れる」ので危ないですね。だれかが気を抜くと、そのレベルに合ってしまう場合があるから、みんなどこか緊張していなければいけない。あるひと言によってグーッと先に進んだり、高いところの上っていけるときがあるかと思えば、あらぬひと言でダメになってしまうこともある。いくら仲良しで冗談を言い合える関係だったとしても、仕事の上では常に緊張感を持っている必要があります。

——葛西さんはいまという時代、つまり世の中をどうご覧になっていますか。どんな仕事もそうですが、デザイナーも時代によって“ならされて”いく部分があると思うんです。デビューから50年の変化なり、社会について思うことなどいかがなつてみたいのですが。

葛西 正直なところ、まさかこんな未来になるとは思っていませんでした。あまり好ましい未来が来たとは思っていません。自分がデザインを志した頃は、先輩たちのよい仕事を見て、「年配者たちにはこういう理想郷があるのだな。年を取ることはきっといいことだぞ」という漠然とした未来像があつたんですけど……。

言い方は難しいのですが「ゼロ・イチの世界」になってしまったというか、“虚”のほうにどんどん流れていると思います。僕はずっと“虚”より“実”のほうがいいと思ってやってきましたから愕然とさせられますね。

時代という話で言うと、僕は昔からそこに合わせてきたつもりが全然なく、むしろ抵抗心があるというのか、「いや、こちらではなくこちらだろう」と少し距離を置いて眺めてきたのですが、自分の理想とは逆の方向に行っている気がするんです。

「人間は英知があるから、このように変化していくのは当たり前さ。大丈夫」という人もいて、それは若者に対する励ましの気持ちもあるのだと思いますが、僕自身は「どうかな?」と。そろそろ何かを修復していかないとダメじゃないか? という不安を心のどこかで感じています。

— そのような時代にデザイナーにできることは何だと思われませんか？

葛西 まず、大事なのは物事をきちんと伝えることだと思います。具体的に言うと、テレビ番組のテロップでも、インターネットのサービスでも、役所からくる書類でも、何が言いたいのかわからないものが多い気がするんですね。パッケージデザインも表現が大事ですが、その前に表記やタイポグラフィなど様々なルールと秩序があります。

つまり、きちんと文字組みがされていて読みやすく、理解しやすく、必要な情報がちゃんと伝わるのか。そういったグラフィックデザインの根幹をなす部分に、もっと意識を向けたほうがいいと思うのです。どうやれば目立つか? とか、「いいね!」ボタンが増えるか? — といったことに夢中になっているうちに、そうした基本がおざなりになっている気がします。だれかがだれかに物事を伝えるとき、そのあいだをつなぐのがデザイナーですから、“パイプ”としての責任はいつも意識しますね。

もうひとつ大切だと思うのは、喜びを伝えることです。なぜ、デザインが楽しいかという、音楽に近いところがあって、ちょっと夢見心地になれるという、現実をひととき忘れさせてくれるような陶酔感をもたらしてくれるからなんです。形や色、写真・イラストレーションなど様々な要素が、メロディとハーモニー、リズムのように融合する喜びを他者と共有することには、やりがいを感じます。「心の役に立つ仕事」と言えるかもしれません。

— ギンザ・グラフィック・ギャラリーやDNP文化振興財団についてのご意見もうかがってみたいです。この場所や組織は、どのように役に立っていくのがいいでしょう?

葛西 個人的に期待するのは“交差点”としての役割です。出会いを生み出す場ということですね。例えば、デザインを目指している若者たちにとって、ギンザ・グラフィック・ギャラリーは、先輩たちの仕事と交差する場になるでしょうし、デザインの仕事と関わりのない人がフラッと立ち寄ったときには、デザインと生活がどのように交差しているかを知るきっかけになるでしょう。あるいは世界と日本をつなぐ“交差点”でもある。デザインと社会の“結び目”をつくっていると言い換えられるかもしれません。クリエイティブの異業種との“交差点”になるような企画も興味深いですね。デザインというのは、ファッションや建築、映画・演劇、文学など様々な領域に関わってくるからです。

— グラフィックデザインの本質と可能性を深掘りする場とも言えますね。

葛西 ええ、デザインは自分のためではなく、相手のための解決策を編み出す思考過程のことだと思っているんです。昔、田中一光さんの講演を聴きにいったとき、エツレ・ソットサスの言葉を紹介しながら、「デザインとは恋人に花束を贈ることだ」とおっしゃっていたのですが、それを知って「なるほど」と感銘を受けたのです。

だれかに花束を贈るとしたら「何の花にしよう」という選択に始まり、どんな色で包んでどんなりボンにしようとか、それを渡すタイミングからシチュエーションまでいろんなことを考えた上で、相手を喜ばせようとするよね。相手の喜びが自分の喜びにもなるわけで、それがデザインだという。つまり、目的に対する解決策を表現の形にして、「よかったらどうぞ」と差し出す行いなんじゃないかと。とても日常的でさりげない、それゆえに尊いことだと僕は思うのです。

(聞き手・構成: 河尻亨一)

Nostalgia Lurking in Everyday Life – Design as a Paean to Living

Kaoru Kasai

Art Director

— *Last year you held your "NOSTALGIA" exhibition at ginza graphic gallery. Exactly 30 years earlier you had another solo show at the gallery, "AERO." What were your thoughts as you prepared for this latest show?*

Kaoru Kasai I was feeling quite anxious. In Japan, holding a show at ginza graphic gallery is the pinnacle of achievement in the realm of graphic design. It's a venue we aspire to, a place where our predecessors in design have premiered wondrous works. From the time we become designers, mounting a solo show at ggg is a distant goal, so holding a show there is both thrilling and scary.

When I held my solo exhibition "AERO" at ggg 30 years ago, I thought surely it would be a once-in-a-life occurrence, so I poured my entire soul into it. After it was over, I had a sense of finality, a goal achieved. I never imagined I would be invited to hold a second show someday.

So when I was approached about holding a new exhibition, I was somewhat at a loss. To be frank, I wasn't desperately longing to mount another show, nor was I bursting with a desire to express myself creatively at this point in my career. But then I thought, hey, if I'm being offered this opportunity, then rather than holding an exhibition focused on my old works, I decided I would show original works created specially for this occasion.

— *"NOSTALGIA" was originally scheduled for 2020 but was postponed a year.*

Kasai Right. Just after I had decided to accept the offer and started making preparations, Covid began spreading, at which point I mostly stayed home and worked. When the exhibition was postponed, though, that actually gave me time to think about the exhibition at greater length. For days on end, night after night I asked myself just what it was that I wanted to do, and I looked back over my notebooks from the past twenty-odd years.

I always carry around a small notebook which I use like a sketchbook. Whenever some idea pops into my mind, I make a simple sketch, or I copy what gave me the idea, or I jot down words I want to remember. Later, from time to time I look back over what I've recorded, and I'm often inspired or get a hint from these things. In this way, starting from fragments casually collected in the past, I set out on a self-searching journey, inspired as if by the workings of a total stranger.

When I started my hunt for an exhibition title, the first word that came to mind was "nostalgia." I came up with another 10 or so candidates as well, but more than anything I liked the sound of "nostalgia." I felt slightly embarrassed at the notion of indulging in memories from the past. But then I thought how I've been walking this path for 50 years already, so I resolved to set aside any feelings of embarrassment and try to give form to sentiments from the past that remained deep within me.

What I wanted to express, specifically, was the fun and excitement of the kind I felt as a child when I was totally absorbed in something. Making circles with a compass, for example, or using a soldering iron and rosin to make a radio. In every case, my greatest enjoyment would derive from using hand tools to make something. Later on, I derived this same kind of enjoyment from the process of creating a design.

— *The word "nostalgia," more than just being your exhibition title, perhaps is key to your design work itself. When we look at your works, the sensation is like being transported to some unknown, distant place. Your "NOSTALGIA" works, more than just inducing nostalgic feelings, offer us a glimpse into unknown realms. In your Gallery Talk too, I found it very interesting when you spoke of creating a design from the perspective of an insect looking at the world around it.*

Kasai I sometimes have the feeling that some "reciprocating motion" occurs inside me. I find myself suddenly honing in on an object at close range, then pulling back away from it. Or attempting to gaze deep within myself as if I were a stranger, only to then revert to being myself. I create from a continuous alternation of subjective and objective perspectives. Maybe it's this that gives infuses a sense of distance or perspective into my works.

There's no exclusive definition of what I find to my liking, though. Not that I like just anything, but I think that, generally speaking, I find most things in the world interesting. In music, for example, when I listen to folk music or lyrical pop tunes from my younger days, I find myself thinking how great such music is. Then again, I can become completely absorbed in dark, moody blues music, too. In most things, I'm unable to keep strictly to one path or another, feeling that no single path perfectly defines who I am.

— *Still, what you like fits into a certain pattern, wouldn't you say?*

Kasai I wonder. I'd say I find myself attracted to what's "honest" But there's something embarrassing about being honest, isn't there? People who work in design, in particular, aspire to having a "bad boy" streak in them. Everybody who goes into the design field knows what looks good, is able to say cool things, and doesn't pull punches. This is one cause of my diffidence as a designer. Ever since I was young, I've always asked myself, "Am I really good enough for this job?" I don't suffer from an inferiority complex, but I do shrink when I compare myself to others.

It's probably related to the fact that I didn't have the chance to attend an arts college and get an academic education in design, which has always pushed me to succeed despite that. As a result, whenever I look at something, anything, I'm always determined to absorb something

from it. It's my way of compensating for my lack of confidence or outright fear. Even so, I think it's because I don't have any perfect answers that I'm able to find interest in anything and everything.

So, if I have one piece of advice for young people today, perhaps it's that there's nothing in the world that's irrelevant to design. Say you grow vegetables, for example. Growing a vegetable puts you in touch with many things: learning about fertilizers and what makes things grow, the effects of temperature and the seasons, even experience in marketing and distribution. Ultimately, in some way it all relates to design. Everything in our lives, everything we do in our daily lives, serves a purpose in the context of design, without question.

— *This is something I'd like you to discuss in greater detail. After your "NOSTALGIA" exhibition last year, this year you held "KASAI KAORU POSTERS Since 1973" at the Center for Contemporary Graphic Art (CCGA). After I saw both shows, what came to mind were the words "proletarian design of another land." Along with the elements of the word "nostalgia" you mentioned, in your works I also sensed a powerful and magnanimous affirmation of what might be called the "nature of the common man" or a sense of "everyday life."*

In your advertising and other works – everything from your "Oolong Tea" campaign for Suntory to your Hiroshima Appeals poster of 2013 – your visuals give voice to a "paean to life." They portray well-ordered but slightly unusual scenes of everyday life viewed from the perspective of the underdog. When I speak of "proletarian" here, I'm not referring so much to the working class as to proletarian in a broader sense: what you just spoke of with respect to how everything in life relates to design.

Kasai "Proletarian design of another land" – that's a surprising turn of phrase. It gave me a start, because, for a fact, all along I've cherished the ordinary facets of life and everyday work. In particular, I have a special attachment to the word "work," and when a book was published in 2002 to commemorate SUN-AD's 38th anniversary in business, for its title I chose *SUN-AD at work*. The word "work" has the connotation of an engine always in operation, yet at the same time there's something calming about the word.

How to describe it? Basically, I don't aim big. With everything – commercial products as well as music and film – I think it's a mistake to aim for a big hit or becoming big. I also have an aversion to the "like" button! Isn't there something strange about always wanting, by hook or by crook, to make things bigger, to always keep growing, to always aim higher and higher? I've felt so, all along.

To me, truth is probably found in the minority, in the minor aspects of things. If we learn from the minor things, I think the world would be a more peaceful place.

Consequently, when I've done work for large companies, I've often

made proposals outside what might be considered the mainstream. At times I lose a client that way, but when I find something distasteful, I don't compromise my feelings. I may not express my displeasure in direct terms, but I convey my view by suggesting, nicely, that perhaps something isn't quite "right." Especially in the advertising field, for example, if the director of a shoot says "Smile!" everybody breaks into a huge smile, showing their teeth. But in real life, I would point out, how often do people actually smile to the point of revealing their teeth?

Does doing this bring me pleasure? Hardly, and if I always responded that way, I think I'd find myself totally exhausted. What's important is to remain calm and refrain from making a fuss, because acting with restraint can lead to some truly amazing discoveries. So, rather than things that vociferously and boastfully seek to grab people's attention, I'm more often grabbed by the seemingly ordinary things that happen without fanfare in everyday life.

— *Do you take the same approach to your client works and private works?*

Kasai Overall, I think I do. Only, with advertising – especially ads to be placed in the mass media – the work will be seen by large segments of the general public. And with a commercial film, many people will see it even without necessarily wanting to. So to that extent, creating ads comes with a sense of responsibility. What if a child were to see what you make? Or what would a person feeling under the weather think if they saw it? These are considerations I always keep in mind.

With a solo exhibition, I can go really deep and, in a sense, I have greater freedom of expression and can show my true colors. With both client and private works, though, I think it's OK if what I'm trying to convey isn't understood by every person who sees it. Either way, with any work I put out in public, I always try to do the very best I'm capable of.

I don't want to have any regrets after a work I've made has been released in public. So with even the smallest work, I always give it everything I've got. It doesn't matter if nobody takes notice; there's a certain level I set for myself, and I won't cease until I reach that level.

With every job, if what the client wants is 100 on a scale of 100, I would feel bad if what I create accomplished only a 50 or 60. I always strive to the absolute best of my ability to figure out how, through the power of design and communication, to approach the 100 the client is looking for. It takes getting to know and understand the client's wishes thoroughly, like putting yourself in his shoes.

— *So you become one with the client and give every job 100% of yourself?*

Kasai Right. First of all, because it makes me happy to be invited in on a project. Most jobs are joyful jobs, and invitations come from joyful people. That's why I can become one with them: we have something in common, and that's what makes a job interesting. That said, knowing what points you share isn't always obvious from the outset. You have to listen to what the client says and ponder your possibilities. It's in the process of actually designing that you come to realize what points you share.

What I always realize, however, is that even if you reach the 100 the client is looking for, achieving 120 or 150 is impossible. To reach such levels, I think you would have to exceed your innate capabilities. That's why I want to be an artisan – a professional with excellent technical skills.

— *Is this stance something you have maintained throughout the 50 years since your debut as a designer? Or does much of your current stance derive from things you've come to realize or acquire during the course of your career?*

Kasai I think the underlying basis may have been there from the outset, but when I began I had no idea how things would turn out. It's only quite recently that I started speaking like this, without holding back.

In the final analysis, I think this was unavoidable. In my native Hokkaido dialect, rather than saying that we actively intend to do this or that, we tend to speak of doing something passively, in reaction to the external circumstances presented to us.

It's sort of like what happens when you're skating. You think you're going perfectly straight, but at some point you realize you're veering off to the left. In Hokkaido dialect we would say we ended up unconsciously veering to the left. I think everyone experiences things like that, taking a path by default rather than by active intent. Even if you try to go against the grain and veer to the right, ultimately you end up veering to the left after all.

Passively taking the natural course is easier, too. Whenever I'm designing, it occurs to me that there are always two ways forward. As a designer, you're constantly making choices: blue or red? thick or thin? dark or light? A or B? Where you eventually finish is where your choices have taken you, so you reach your end result as the natural outcome of choices you've made along the way. If your final outcome has taken a different direction from the vague image you had at the start, in Hokkaido dialect we say the outcome just fell into place.

— *As an art director, does anything like that occur when you are collaborating with someone from a different profession – a photographer or illustrator, for example?*

Kasai Absolutely. There are even times when the person you're collaborating with decides the bulk of what you create. But I find that interesting, too. It's really exhilarating when you come to something totally unanticipated, and when you admit to yourself that you like the result. It's your own discovery, but somehow you also sense that you have learned from someone else. When you work with someone, the experience brings out some unknown aspect within you. Collaboration is interesting in that you truly don't know where it will lead.

— *This serendipity can take you to the "other land" you mentioned earlier. During the gallery tour you said that design is in some ways like water, and I agree with that. Water flows freely, following its natural course.*

Kasai True. And yet, water always flows downward, to a lower level, and herein lies the danger. If one person loses focus, the other person sometimes descends to the same level; so everyone has to remain alert, with tensions high. Just as there are times when some minor comment by one person can spur your work forward or to new heights, sometimes one ill-advised comment – something best left unsaid – can ruin everything. No matter how close you may be with someone, someone you feel comfortable joking with, when you're working together you always have to maintain a clear degree of tension between you.

— *What is your view of the world as it is today? Like people in all professions, designers are impacted by their times in various ways. With all the changes that have taken place since your debut 50 years ago, how do you look at the world around you today?*

Kasai To be frank, this isn't the future I ever imagined, and it isn't very much to my liking. In the days when I aspired to becoming a designer, I would look at the great work done by earlier designers and think to myself that, for an elderly person, being a designer could be utopian, and I was excited to think that good things awaited me when I got older. That was the vague image I embraced toward the future, but the reality turned out quite different.

The world today seems to have become fixated on creating things that are altogether new and never based on anything that came before them. I always hoped that if it came down to a choice between "false appearance" or "truth," the world would move in the direction of "truth." But it's actually heading swiftly in the opposite direction, which I find shockingly disappointing.

As for the times we live in, all my life I have never tried to go with the flow. On the contrary, I've always had a rebellious spirit, viewing the world from a slight distance and thinking, "That's not the way to go –

this is.” But it seems the world is going in the opposite direction from what I consider ideal.

Some people may say that because humans are intelligent beings, there’s no cause for worry: it’s natural for people to change in the way they are. They say such things, I think, to give encouragement to young people; but personally I have my doubts and am a bit worried. Isn’t it about time to put things back on their proper track, before it’s too late?

— *In times like these, what do you think the designer is capable of doing?*

Kasai First of all, I think it’s important to convey things properly. Specifically, for example, with the on-screen captions of TV programs, services offered over the internet, documents received from government offices and so on, it’s often difficult to understand just what it is they want to say. With package design too, artistic freedom of expression is important, but what’s more important is to follow the various rules and conventions concerning orthography, typography and the like.

In other words, it’s a matter of whether or not the printing format is easy to read, easy to understand, and conveys the necessary information the way it’s supposed to. I think more attention should be focused on these aspects, because they form the basis of graphic design. It seems to me that designers nowadays are too absorbed in looking for ways to catch people’s attention or to get lots of “likes,” that they give short shrift to such basics. When somebody conveys something to someone else, it’s the designer who connects them, so I always keep in mind my responsibility in that regard.

Another thing I think is important, is to convey joy. What’s enjoyable about design is, somewhat like music, it puts people in a dreamy state of mind, giving birth to intoxicating feelings that enable you to escape from reality for a time. A variety of elements – shape, color, choice of photo, illustration, etc. – enable you to share joy that’s integrated in the same way as melody, harmony and rhythm come together, and it’s for this reason that I take satisfaction in being a designer. It’s kind of a job that does good for the heart and soul.

— *I’d also like to ask your views concerning ginza graphic gallery and the DNP Foundation for Cultural Promotion. In what ways do you think this venue and organization can be useful in the future?*

Kasai Personally, I look for ggg to function like an intersection, a place that gives birth to encounters. For example, for young people aspiring to become designers, ggg serves as a place where they can intersect with the work performed by earlier designers. And for people with no professional connection to design, ggg is a place where they can casually drop in, giving them with an occasion to learn how design

intersects with everyday life. Or the gallery can also be an “intersection” connecting Japan and the world. Put another way, it forms a “tie” between design and society.

Exhibitions that serve as an “intersection” between different creative professions are also of great interest. That’s because design is related to various areas: fashion, architecture, film, theater, literature and so on.

— *ggg is a place for probing the essence and possibilities of graphic design too, isn’t it.*

Kasai It is. I believe that design is a thought process that devises solutions not for the designer’s own benefit but for the benefit of others. A long time ago I went to hear a talk given by Ikko Tanaka, and he introduced something Ettore Sottsass had said, to the effect that design is like giving a bouquet of flowers to the one you love. It made a deep impression on me.

When you think about giving a bouquet of flowers to someone, you begin by selecting which flowers to include, then considering what color of paper to wrap them in, and what kind of ribbon to use to tie it all together. You also consider a number of other things – when would be the best time to give the bouquet, what setting would be best, and so on – all with the desire to make the other person happy. And making someone happy makes the giver happy too. This is the role performed by design. Design is the act of offering, through creative expression, a solution to a specific goal. It’s very ordinary and unpretentious, and that’s what makes design so precious.

Interview and editing: Koichi Kawajiri

展示事業

Exhibitions

ginza graphic gallery 2021-22

April 1 – May 29, 2021

Tokyo Type Directors Club Exhibition 2021

June 8 – July 7, 2021

Sports Graphic Exhibition

July 20 – August 28, 2021

Olympic Language: Exploring the Look of the Games

September 8 – October 23, 2021

Kasai Kaoru Exhibition: NOSTALGIA

November 1 – 30, 2021

Art Direction Japan 2020-2021 Exhibition

December 10, 2021 – March 12, 2022

Saul Steinberg: Lines that Transform the Real World

ggg
333

葛西薫展

NOSTALGIA

KASAI KAORU EXHIBITION

8 September – 23 October 2021

ギンザ・グラフィック・ギャラリー 第384回企画展

Tokyo Type Directors Club Exhibition 2021

April 1 – May 29, 2021

TDC 2021



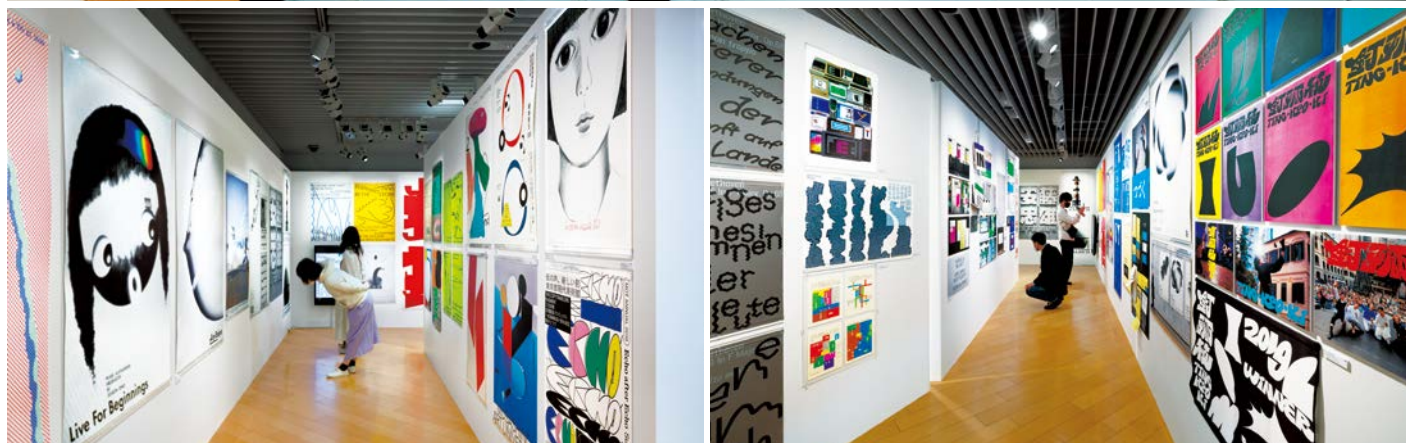
TDC賞2021の受賞12を含む122作品が展覧された。展示台に置かれた布張りのアーカイブボックスから何枚もの大型ポスターが天井に向けて飛び出している。M/M (Paris) による「Loewe show SS21」、中止を余儀なくされたランウェイショーに代えて着想から舞台までコレクション全体が表現されている。いっぽう岡崎智弘の実験動画「STUDY」はこれと対照的に見えるが、コロナ禍でスピードダウンした生活の中で作り始めた。「日々移り変わる生活を、全方位から補ったり増幅したり挑発したりするのがデザインだ」一戦後日本美術と『日本国憲法』を組み合わせさせた編集とデザインでグランプリを受賞した松本弦人の言葉が立ち上がる。

東京TDC 照沼太佳子

The exhibition featured a total of 122 works, including the 12 winners of the 2021 TDC Awards. A great number of large-size posters leaped toward the ceiling from a cloth-covered archive box placed on one of the display stands. “Loewe show SS21” by M/M (Paris) replaced the canceled runway show and portrayed the complete collection, from the initial inspiration to the show setting. Contrastingly, “STUDY,” Tomohiro Okazaki’s experimental video, was created as life began to slow during the pandemic. “Design captures life’s daily changes from every direction, amplifies them, and incites them.” So said Gento Matsumoto, who won the Grand Prize for his editorial and design work combining

postwar Japanese art and *The Constitution of Japan*.

Takako Terunuma, Tokyo TDC



Sports Graphic Exhibition

June 8 – July 7, 2021

SPORTS GRAPHIC スポーツ・グラフィック



学生たちに気になる言葉として、気に入っているカゴ文字書で①コロナ禍。②地震。③戦争。④核。を渡している。頭の痛いニュースばかりだが、スポーツになると気持ちが急に明るくなる。財団のアーカイブにスポーツグラフィック作品が沢山残っていて助かった。会場構成は浅葉克己・浅葉球。浅葉球が組んでいるデザインユニットGOO CHOKI PARのパラリンピックのポスターも全作展示した。「スポーツとは何か」が大きなテーマだった。タイトルコピーは俳句にした。榎本バソン了菴さんの「走れ跳べ泳げ蹴れ漕げ投げろ打て」。ビジョンとしては一乗ひかるさんのパラリンピックの陸上選手を選んだ。

浅葉克己

Dark and depressing words weigh heavily on young minds today: "pandemic," "earthquake," "war," "nuclear." But change the topic to sports, and immediately everyone's eyes light up. Luckily, many graphic works relating to sports and sporting events are included in the DNP Graphic Design Archives. Art direction for the exhibition was performed by Katsumi Asaba and Q Asaba. Included among the exhibits were all the Paralympic posters made by GOO CHOKI PAR, the design unit in which Q Asaba is a member. A major theme of the show was to probe the meaning of sports. The promotional material featured a haiku specially penned by Ryoichi Bason Enomoto: "Hashire tobe / Oyoge kere koge / Nagero ute" ("Run! Jump! Swim!

Kick! Row! Throw! Hit!"). An illustration of a Paralympian athlete created by Hikaru Ichijo was chosen as the visual.

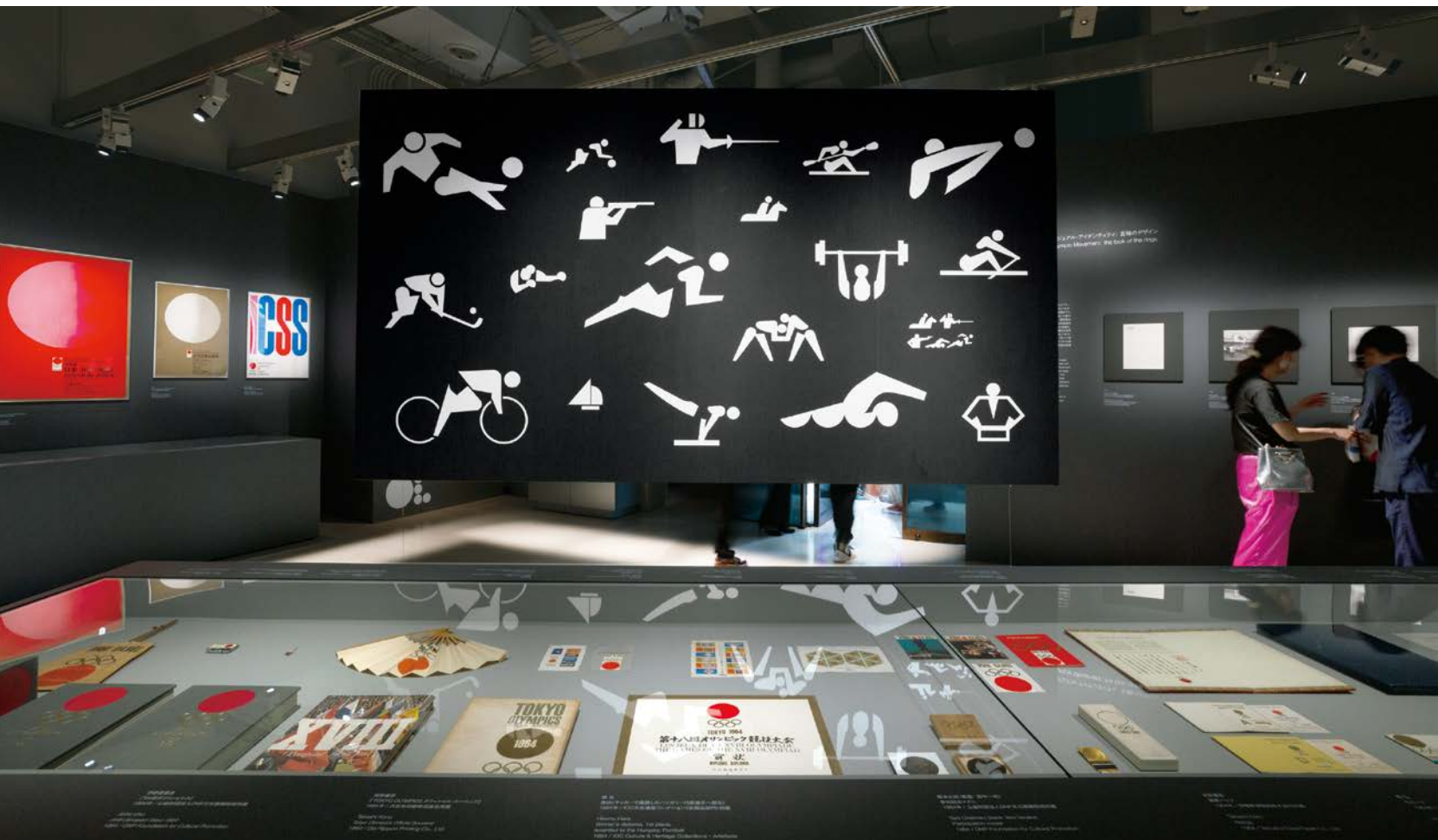
Katsumi Asaba



Olympic Language: Exploring the Look of the Games

July 20 – August 28, 2021

オリンピック・ランゲージ：デザインでみるオリンピック



オリンピックデザインは世界最大のデザインプロジェクトです。1896年の第1回大会以来、オリンピックは開催国・都市の人々、文化、歴史、政治を映し出しながら、それぞれに独特色を出してきました。オリンピック文化遺産財団との共催展である本展では、1913年以降のオリンピック・リング（五輪）のデザインと変遷、近代グラフィックデザインの始まりとなった1964年東京大会、表情豊かな大会ルックが展開された1968年メキシコシティ大会、厳格なカラーコードとコンパクトなデザインが特徴的な1972年ミュンヘン大会、デザインを通じて自国の歴史を伝えた1994年リレハンメル冬季大会、そして、古代ギリシャの歴史を現代の視点で解釈した2004年アテネ大会に焦点を当て、ご紹介しました。

マルクス・オスターヴァルター / グラフィックデザイナー、
オリンピック歴史家、オリンピック・コレクター

The corporate design of the Olympic Games is the largest design project in the world. All Olympic Games have their own character - shaped by the people, culture, history and politics of the host country since 1896. In cooperation with the Olympic Foundation for Culture and Heritage, the exhibition accompanies the viewer through the creation and development of the Olympic Rings since 1913, the beginnings of modern graphic design in Tokyo in 1964, the expressive look of the Games in Mexico 1968, the compact design with the strong color coding of the 1972 Munich Games, the reference to one's own history in the design of the Lillehammer Winter Games 1994 and finally a modern interpretation of ancient Greek history at the Athens 2004 Olympic Games.

Markus Osterwalder / Graphic Designer,
Olympic Historian and Olympic Collector





Copyright © International Olympic Committee - All rights reserved – for the sole use of editorial illustration by media

Kasai Kaoru Exhibition: NOSTALGIA

September 8 – October 23, 2021

葛西 薫展 NOSTALGIA



個展の話を読んだものの、今自分は何をしたいのか、かなりの長い間自問自答したが、イメージが散り散りになっていくばかりで、なかなか具体像が見えてこなかった。そこで、まずはタイトルから考えてみようかとペンをとったら、真っ先に浮かんできた言葉がNOSTALGIAだった。不思議なことに、このタイトルで行こうと決心したら、我に返ったように止まった手が動き出し、この言葉の持つ許容量の大きさなのか、出来上がった作品群はひとつに定まらない、思いもよらぬものの集合となった。これらは頭というより身体が憶えていたことのものであり、NOSTALGIAに導かれて、沈殿していたものが浮かび上がってきたような感覚だった。

葛西 薫

When I was invited to have a solo show, for a long time I kept asking myself what I wanted to do at this point in time, but nothing came together in my mind and I couldn't come up with a concrete image. So I decided to begin by thinking up a title, and taking pen in hand the word that immediately came to mind was "NOSTALGIA." And odd enough, as soon as I decided to go with this title, my mind regained its focus and my hand began to move. Perhaps because of the broad connotations the word "NOSTALGIA" encompasses, the works I produced didn't fit into a single mold, and I ended up with a grouping of items I hadn't anticipated. More than nostalgic memories, they seemed to be things my physical being

remembered. The sensation was like being guided by nostalgia and having things long dormant suddenly come to life.

Kaoru Kasai



Art Direction Japan 2020–2021 Exhibition

November 1 – 30, 2021

日本のアートディレクション展 2020–2021



2021年度のADC展の開催は、2年振りであった。コロナウイルスにより、ADC年鑑の審査が1年空いて、それにつれて発刊も1年空いてしまったためだ。ADC展で実感したのは、やはりポスターやその他印刷物の実物の持つ迫力だった。大きさ、質感、そしてその存在感であった。ひしめく数の作品を押えて、2年振りのADCグランプリに輝いたのは、国立新美術館で行われた「佐藤可士和展」の作品。氏の手がける数々の企業のブランディングに伴う、圧倒的量和質のデザイン群に対してだった。シンプルで洗練された多くのデザインが、美術館というスペースで行われたことも画期的なできごとである。そして、社会の役割としてのデザインの可能性を強く示す可士和氏の仕事ぶりに喝采をおくる。 ADC展委員 副田高行

This was the first ADC Exhibition in two years. Because of the pandemic, a year's gap occurred in judging for the *Tokyo ADC Annual*, resulting in a one-year hiatus in the yearbook's publication. The sensation I felt from this ADC Exhibition was the tremendous power exuded by real posters and other printed works: their size, their texture, their physical presence. Among the many vying works, the recipient of the first ADC Grand Prize in two years was Kashiwa Sato's exhibition held at The National Art Center, Tokyo. The award was given in recognition of his designs of overwhelming number and quality created in conjunction with his branding work for numerous business corporations. It was also epoch-making how

many of his designs, simple and refined, had been made within the spatial confines of an art museum. I applaud Kashiwa Sato's work for the way it powerfully indicates the possibilities of design serving in a social role.

Takayuki Soeda,
ADC Exhibition Committee Member



Saul Steinberg: Lines that Transform the Real World

December 10, 2021 – March 12, 2022

ソール・スタインバーグ シニカルな現実世界の変換の試み



スタインバーグの顔を示す線描のドローイングに、鼻の上下でスパッと切り離れたものがあり、そのドローイングを見せられた人は必ずや度肝を抜かれる筈。けれども、あらためて「ところで、外形とは?」、と考えざるを得なくなり、不思議な気持ちを味わうことになる。スタインバーグの作品は、全てこの構図に通じるのだろう。地球上に存在する事物、あるいは言語、概念、数字、記号、メタ・メッセージ等、目に見える見えないに関わらず、人間世界の中で暗黙に認識、了解しているものの、意味変換、概念変換に挑戦し、あらためて原初となる意味を確認し、世界に対してどの様に眼差しを注ぎ再考すべきかを、我々、見る側に迫っているのだから……。

矢萩喜従郎

Among the line drawings of faces made by Saul Steinberg, there is one in which the nose is cut completely off, creating an image that startles whoever sees it. At the same time, though, it makes us ponder the meaning of physical appearances, leaving us with strange feelings. Steinberg's works all fit this pattern. They challenge our notions about all things extant on Earth – as well as our languages, concepts, numbers, codes, metamessages, etc., whether visible or not – everything we implicitly recognize and understand in our human world, and transform their meanings and concepts, making us confirm anew their original meanings and forcing us who view them to reconsider how we should look at our world.

Kijuro Yahagi



gggが、世界に「影響を与える場」であり続ける為に……

特別寄稿：矢萩 喜從郎

建築家・デザイナー

ggg (ギンザ・グラフィック・ギャラリー)は、グラフィックデザイナー・田中一光 (1930-2002年)が、「グラフィックのギャラリーをつくってみては」(ginza graphic gallery '95/以後*印)と大日本印刷に提案する機会があり、それが受け入れられて1986年に創設されたギャラリーである。1991年に現在の建物が新築され、2004年1月から、永井一正(1929-)に監修者が引き継がれ、今に至っている。

これ迄、gggBooksは、1992年に『gggBooks1 ヘンリック・トマシェフスキ』が刊行されたことを皮切りに、最新号の133号が出版された。そのgggBooksに登場したデザイナー達を俯瞰すると、最初から自国のデザイナーだけに執着することなく、刺激的な活動を展開してきた才能溢れる世界と日本のクリエイター達を柔軟に積極的に取り上げてきたことが一目瞭然である。

日本には、ある出来事が全く関係ない意外な所に派生する喩えとして、「風が吹けば桶屋が儲かる」ということわざがある。最初、風が吹くことに始まる話は、土ぼこりが目に入って目が見えない人が増える話につながり、そうなった人達が就く定番の三味線奏者が増えることで、三味線の増産を余儀なくされ、三味線に使用される材料の猫が捕獲される。そうなると、天敵がいなくなったねずみの天下となり、大胆に桶がかけられることで桶が売れるようになった、と徐々に物語が展開する内容。

「風」はキーワードに成り易いのだろうか。gggが創設してから1年後に、田中もそのことわざの始まりとして登場する「風」を用いて書いた文章がある。「ギャラリーは企業と市民との風穴だと思っている。小さな窓でも開けていると、思わぬ風が入ってくる」、「この小さな窓から、この時代の地球の風が入ってくる」* gggの活動の内容が、ことわざの様に「小さな窓」から「思わぬ風」が入ってくることに始まったものが、堅固で揺らぐ筈もない世界の壁を打ち破る「風穴」となり、その風自体を「この時代の地球の風」にも匹敵すると予測しているのである。先述した日本のことわざは、英語で言う「butterfly effect」(バタフライ効果/1972年、気象学者エドワード・ローレンツ [1917-2008年]の講演タイトル「ブラジルの一匹の蝶の羽ばたきが、テキサスで竜巻を引き起こすか?」(由来)に類似しているらしい。「butterfly effect」とは?もし意識的にわずかな変化を与えたとしたら、それが無かった場合と較べると、その後の状態が大きく異なってしまうことになるという、その現象を語る言葉。可能性の低い因果関係を、こじつけた理論とネガティブではなく、ポジティブに捉えると、この「butterfly effect」が意味深に聞こえ始める。

「butterfly effect」を持ち出し、gggの世界的な派生を考えれば、極東の日本で創設された、ささやかにも捉えられた世界への関与が、とてつもなく重要な引き金になったと思う人が出るまでになったことと言っていい。ggg創設という契機から、これ程迄に世界的に知られるようになると予測した人がどれくらいいたのだろうか、とあらためて思う。

gggが美術館ではないとしても、現代の内外のデザイナーの作品のコレクションにおいては、世界の美術館と比較しても引けを取らない。しかも、決して貸し画廊に陥ることがなく、積極的に企画展を次々に取り組んできたことを捉えても、

gggの存在そのものを「ggg現象」と置き換えられるとさえ感じる。

この様に語ってきたgggだとしても、長い間続いていることで生じる死角がないのだろうか。集団、団体、組織において、常日頃から陥ってはいけない、とわたしなりに考えていることを俎上に載せるとわかり易い。それは、創設時に暗黙に了解していたと思う「果敢に」という言葉が、消え入るようになること。チャレンジ精神が遠退き、誰からも揶揄されることがないように現状の維持が暗黙の目標になり、そうなれば必ずや「失速」する。別の言葉を引き上げれば、「死に体」になっているのに、情性で維持することに腐心している状況とも表現できるだろう。その状況に陥った時、わたしは、集団、団体、組織は、解体も視野に入れて考えた方がいいと思っている一人。

わたしが、gggに望むのは「果敢に」の精神をいつまでも忘れずに、まさしく「風」の様に動き続けること。停止した「死に体」になることを避ける為に、いつも自分達が直面している状況に逃げず向き合って自己批判し鍛え上げることが重要になる。その考え方を核にすることで、未来を誘引することができるのではないだろうか。

今日、日本だけの問題でなく世界的にも問題になる、時代を区切るクレヴァス(裂け目)に差し掛かっている気がする。

文字に関する変遷に触れると、活字を組んだものを使用して印刷したもの、次に印画紙に文字を写す写植が一世を風靡し印刷されたもの、今はコンピューターで文字を自在に操作できるデジタル世界に入り、そこで制作されたデータをもとに印刷される時代になっている。そして、出力さえ必要としないことが普通に見られるようになって、まさしく、写真の世界と同じ様に、フィルムが一部を残して販売中止となり、デジタルカメラに代わったことと同じ構図になっているのである。

これ迄、コレクションしてきたものは紙を使用した作品がほとんど。ところが、近い将来も、グラフィックデザインの作品が今迄の様に紙を主体とする媒体であり続けられるのか。活版印刷が興隆していた状況が衰退して、シルクスクリーン印刷、オフセット印刷へと移行し、更に、データから印刷機器を通して媒体にインクを塗布する出力の割合も増している現実がある。この様な「時代を区切るクレヴァス」に向き合わされ、デザイン界の未来がどの様に推移していくかが問われているのである。実際、国際コンペティション等の一次審査が、現物ではなく、モニター上の映像で行なわれている現実がある。この様に、触覚、皮膚感覚と言った身体感覚が重宝されない状況があることが、将来、審査員、出品者双方の首を絞めることにならなければと危惧している。

わたしは長い間、公益財団法人DNP文化振興財団(2012年設立/2008年財団法人DNP文化振興財団設立)のメンバー、北沢永志、田中文、伊藤紗知代等と共にgggが「影響を与える場」であり続けなければと言う観点から、敏感なリトマス紙を用意し、静止する、萎えると言った「死に体」につながる雰囲気を感じた時、その状況から這い上がる道を探る為に、幾度となく話し合いの場に参

加させていただいた。gggがこれ迄、「果敢に」世界が驚く企画を実現できたのも、この様な話し合いの時間を共有できたからだとあらためて思える。

gggの使命とは？世界に向けてアンテナを張り巡らし、今、gggで展覧会を開いてもらうべきと思う著名な人に「果敢に」アプローチして展覧会を現実のものへと導くこともそうだが、たとえエスタブリッシュされていない若者だとしても、もしその人が才能豊かな感性を持っていると判断できれば、それをgggは身体全体で敏感に感じとってフィーチャーすることができるかが問われる。わたしも、純粋な気持ちで「口角泡を飛ばす」ぐらいの勢いで、自分が表現したものを説明するような、世の中を打ち震わすような創造者の出現を期待している一人で在り続けたいと思っている。

gggから展覧会を依頼された側からの感想を、わたしの経験を通して語ることで、gggを違った側面から紹介できるのではないだろうか。

1989年と1999年に「矢萩喜徳展」、2009年に「矢萩喜徳展 [Magnetic Vision/新作100点]」と3回のgggでの個展を行い、CCGA (gggと同じ公益財団法人DNP文化振興財団の一つ)では2002年に「矢萩喜徳展：視触、視弾、そして眼差しの記憶」と個展を開かせていただいた。わたしがそれ等の展覧会を通しての感想は、gggを例にすると、gggの存在そのものに鍛えられ、自分が進むべき道がおぼろげにも見えてきた気がする。この経験をもとに推測すれば、緊張を強いられることが自分を後押しし、自分だけでも気付けなかったことに肉薄できたのではないかと思う。つまり、わたしだけの経験でなく、多くのデザイナー達の才能を切り拓く手助けをしてくれたのが、「影響を与える場」としてのgggだと言えるのである。

更に、わたしが関わらせていただいた、他者のgggの展覧会の関わりに触れると……。

わたしが幸運だったと思ったのは、逃げ場のない状況に立たされた時に、デザイナーがどの様に対処したかという裸形のデザイナーの生き様に触れられたことである。

日本人で手掛けたのは、早川良雄 (「早川良雄：日本のデザイン黎明期の証人」/ggg/2006年)、福田繁雄 (「DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵作品展Ⅲ 福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング」/ggg/ポスターを除く/2010年)、仲條正義 (「DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵作品展Ⅷ：蔵出し 仲條正義」/CCGA/ポスター、カタログデザイン/2019年)、細谷巖 (「細谷巖 突き抜ける気配」/ggg/2022年)等。

海外の人では、レイモン・サヴィニャック (「レイモン・サヴィニャック展—41歳、『牛乳石鹸モンサヴォン』のポスターで生まれた巨匠」/ggg/2011年)、アレクサンドル・ロトチェンコ (「ロトチェンコ—彗星のごとく、ロシア・アヴァンギャルドの寵児—」/ggg/2012年)、ヘンリク・トマシェフスキ (「トマシェフスキ展 世界を震わす詩学」/ggg/2013年)、ロマン・チェシレヴィチ (「ロマン・チェシレヴィチ 鏡像への狂気」/ggg/2017年)、ポーラ・シェア (「ポーラ・シェア：Serious Play」/ggg/ポスターを除く/2019年)、カール・ゲルストナー (「動きの中の思索 カー

ル・ゲルストナー」/ggg/2019–2020年)、ソール・スタインバーグ (「ソール・スタインバーグ シニカルな現実世界の変換の試み」/ggg/2021–2022年)等。

それ等の他に、ggg30周年記念展 (「ggg30周年記念展 明日に架ける橋 gggポスター 1986–2016」/ggg/2016年)も加わる。

これ等の経験の多くが、当人、あるいは当地にある財団の人達と監修者として会って交渉し、そこでgggの会場にふさわしい数の作品構成になるように、実際の作品を粗上に載せて選び、それから出品許可を取る作業に入ることが常だった。以後、評論を書き、ポスター、チラシ等の広報関係デザイン、それに会場構成を行っている。

数ある交渉の中で、二つ思い出深い例を挙げると……。一つは、北沢と一緒にモスクワに行って、アレクサンドル・ロトチェンコ (1891–1956年)の自宅にロトチェンコの孫のアレクサンドル・ラヴレンチェフ (1954–)に会いに行ったこと。当時のまま残されていたロトチェンコの暗室を見た時のことが、今も強く記憶に残っている。それを見られた時、ロシア・アヴァンギャルドと後年呼ばれるようになったロトチェンコやウラジーミル・マヤコフスキー (1893–1930年)の活動そのものに、手で触れられた気がした。もう一つの思い出は、北沢と田仲とわたしの3人で、ソール・スタインバーグの展覧会の準備の為にニューヨークに行った時のこと。倉庫で次から次にスタインバーグの作品を見せてもらって展覧会の展示用に作品を選んでいけたことは至福の時間そのものだった。歴史的人物を追っていると、同時期に活躍していた人達の存在がより身近に感じられ、創造行為に邁進していた人達の夢を追う姿が、溢れるようにわたしの現前に甦ってきたのだった。

How to Sustain ggg's Phenomenon as a "Global Influencer"

Special Contribution by Kijuro Yahagi

Architect and Designer

ggg (ginza graphic gallery) was established in 1986. According to the recollection of graphic designer Ikko Tanaka (1930-2002), he had suggested to Dai Nippon Printing that the company launch a gallery specializing in works of graphic design, and the proposal was accepted. ggg has been in its current location since 1991, when the DNP Ginza Bldg. was completed. The gallery's current supervisor is Kazumasa Nagai (b.1929), who took over the role in January 2004.

To date ggg has published a total of 133 volumes in its *gggBooks* series, starting with the inaugural volume on Henryk Tomaszewski in 1992. A retrospective overview of the publication list demonstrates clearly that from the outset *gggBooks* has shunned focusing on Japanese designers alone, instead opting proactively and flexibly to feature supremely talented artists from all over the world who have made exciting contributions to the field.

There is an old proverb in Japan that says, "When the wind blows, bucket makers prosper." It is used to describe how one occurrence can eventually produce altogether unpredictable results. When the wind blows, it kicks up dust; the dust gets in people's eyes; an increasing number of people go blind; as more people become blind, the number who become storytellers accompanying themselves on the *shamisen*, a profession traditionally adopted by the visually impaired, increases; more *shamisen* players results in the need to produce more of these three-stringed instruments; since *shamisen* bodies are constructed from cat skins, more cats need to be killed; with fewer cats around, their natural enemy the mouse thrives; more mice results in more gnawing of the wooden buckets commonly found in the home; so more people need to buy new buckets, making bucket makers prosper.

"Wind" seems to be a keyword around ggg. A year after the gallery opened, Ikko Tanaka wrote an essay referencing the wind. "I think of the gallery as a small window. Even a small window, when left open, allows unknown winds to enter." He added that through the small window of ggg would enter winds of the world conveying the air of the times. Like the proverb, ggg's activities began with unknown winds blowing through its window. Before long those winds became strong enough to penetrate walls once thought to be impregnable, walls of global scale.

Our Japanese proverb appears similar to what is described in English as the "butterfly effect." The term was first used in 1972 by meteorologist Edward Norton Lorenz (1917-2008) in a lecture in which he posited that the fluttering of a butterfly's wings in Brazil could eventually cause a tornado in Texas. According to the butterfly effect, if even a minor change is effected consciously in something, it ultimately produces an end result different from what the situation would be had the initial change not been induced. If this seemingly improbable cause-and-effect relationship is interpreted in a positive light, rather than negatively viewing it as strained logic, the notion of a "butterfly effect" begins to sound pregnant with deep meaning.

Like the butterfly effect, the founding of ggg in Japan, way off in the "Far East," and the inauguration of its activities – its modest involvement in the world of graphic design – can be said to have triggered subsequent events of enormous importance. When ggg was established in 1986, how many people could have predicted that the gallery would one day become so well-known around the world as it is today?

ggg isn't an art museum, yet the selection of works it has featured by

contemporary designers from all over the world can compare favorably with many of the world's great art museums. Moreover, the way ggg has actively organized a robust ongoing program of original exhibitions, without ever resorting to merely offering its premises as a rental gallery space, even suggests that ggg's very existence qualifies as nothing less than a phenomenon.

After singing its praises, I wonder whether ggg, having sustained its operations for so many years, has fallen into any "pitfalls." One of the pitfalls into which an organization or group should never fall is gradually losing the dauntless approach which it embraced, albeit unspoken, at the time of its founding. In a quest to maintain its achieved status and avoid ridicule from any quarter, the organization retreats from its spirit of aggressively challenging conventions and adopts a silent goal of maintaining the status quo. This inevitably results in a loss of velocity, a withering of zeal. In this way, the organization becomes like a body in its death throes still struggling to stay alive. If and when that happens, I personally think it's time for the organization or group to begin considering disbanding.

What I hope for ggg is that the gallery will never lose its spirit of dauntless challenge, that it will continue its role as "wind" constantly blowing exciting new ideas. To prevent it from becoming a body in its death throes, it's important for ggg to always stay alert to the challenges it faces, to criticize where it may have gone wrong, and to build up renewed strength to continue forward. If an attitude of this kind is embraced to the core, I believe ggg's future looks bright.

Today, a problem faced not only by Japan but by the entire world is the approach of a "crevice" – a break with one era and the start of another.

Looking back over the changes that have affected the printed word, first there was printing using movable type set by hand; next came the overwhelming predominance of typesetting relying on photographic production of lettering on special photographic printing paper; now, digital processing enables us to manipulate lettering freely by computer, with printing performed based on such computerized data. Today, moreover, it has become the norm not to need printed output at all: a situation just like what has taken place in the realm of photography, where, with the exception of a minimal quantity of film cameras and photo film still in production, a near-total shift has taken place to digital cameras.

Up until now, collections have consisted nearly entirely of works created on paper. The question is whether or not, in the very near future, works of graphic design will continue being created mainly on the medium of paper. After the decline of letterpress printing, a shift took place to silkscreen printing and offset printing, and now we see an increasing proportion of printed output from data passed through a printer, with ink applied to a medium. In the face of the approaching "crevice" marking a new temporal shift, today we must think about how the realm of design will trend going forward. Indeed, today the first round of screening in international competitions is typically performed using images shown on a screen, and not by viewing actual physical works. In this way, the tactile sense – the sense we get from physically touching works – is no longer cherished, and I fear that in the future this situation could strangle the artistic sensibility of both the designer and the judge alike.

For many years, together with the members of the DNP Foundation for Cultural Promotion (established in 2008, transformed to a public interest incorporated foundation in 2012), Eishi Kitazawa, Aya Tanaka, Sachiyo Ito and others, I have taken part in discussions on what must be done to maintain ggg's position as an influencing venue. Every time we sensed that the gallery was stagnating or withering, becoming like a body in the throes of death, we would gather to discuss what to do to bring ggg back to life. I believe that it's thanks to having engaged in these discussions that the gallery has been able to boldly mount its many exhibitions that have amazed the world with their content.

What should ggg's mission be? Keeping a sharp eye out worldwide, dauntlessly approaching well-known artists that the gallery wishes to feature in its exhibitions, and making those exhibitions a reality, is surely one mission. But the question arises, what about the young designer who has yet to become an established presence in the design realm? If ggg believes such young designers are abundantly talented, does the gallery have the ability to embrace such individuals wholeheartedly and feature them in its exhibitions? I for one want to continue to welcome the appearance of creative artists who can shake up the world, artists who can explain what they aim to express in their works with the same zeal needed to engage in a heated debate.

Based on my experience as someone who has been invited to exhibit at ggg, I think I can speak of ggg from a different perspective.

I have held three exhibitions at ggg: in 1989, 1999 and 2009. I also held a solo show at the Center for Contemporary Graphic Art (CCGA) (another gallery operated by the DNP Foundation for Cultural Promotion) in 2002. Based on my experience, especially as concerns ggg, I feel the existence of the gallery itself forced me to build up strength, enabling me to see, if only faintly, the path I should take forward. I think the experience taught me that the nervous tension it generated gave me a push forward, enabling me to realize things I had never realized before on my own. Where ggg acts as an "influencing venue" is in helping not just me, but many designers, to burnish our skills and talents.

I would also like to touch on what I experienced being involved in other designers' exhibitions at ggg. I was fortunate, I believe, in observing how other designers coped when faced with situations pressing on them.

Among the Japanese designers whose exhibitions I was involved in are Yoshio Hayakawa ("Witness to the Dawn of Japanese Design" / ggg, 2006), Shigeo Fukuda (DNP Graphic Design Archives Collection III "Shigeo Fukuda's Visual Jumping" / ggg, 2010 / excluding poster), Masayoshi Nakajo (DNP Graphic Design Archives Collection VIII: "Masayoshi Nakajo Posters Freshly Picked from the Archives" / CCGA, 2019 / poster and catalog design) and Gan Hosoya ("Beyond G" / ggg, 2022).

Of overseas designers, I have been involved in the exhibitions featuring Raymond Savnac (ggg / 2011), Aleksandr Rodchenko ("Innovator of Russian avant-garde" / ggg, 2012), Henryk Tomaszewski ("The Poetic Spirit" / ggg, 2013), Roman Ciešlewicz ("Melting Mirage" / ggg, 2017), Paula Scher ("Serious Play" / ggg, 2019 / excluding poster), Karl Gerstner ("What's Karl Gerstner? Thinking in Motion" / ggg, 2019-2020), and Saul Steinberg ("Lines that Transform the Real World" / ggg, 2021-2022).

In addition, I also had a role in mounting ggg's 30th anniversary exhibition: "Bridge Over Troubled Water: ggg Exhibition Posters 1986-2016" (ggg, 2016).

In most of the foregoing instances, as exhibition supervisor I met with the featured designer or with people affiliated with the local foundation. Negotiations focused on putting together a collection of works appropriate in number to the ggg venue, and the selections were made from among the actual works. The next step was to go through the process of acquiring permission to show the chosen works. Subsequently I also undertook the writing of critical commentary for each show, designing the poster, leaflet and other publicity materials, and working up the layout for the gallery.

Among the many shows I negotiated for, two cases stand out in my memory. One was traveling to Moscow together with Eishi Kitazawa, where we met with Aleksandr Lavrentiev (b.1954), Rodchenko's grandson, at the family home of the great master (1891-1956). I still have extremely vivid memories of seeing Rodchenko's darkroom, left just as when he used it. When I saw it, I felt palpably in touch with what later came to be known as the Russian avant-garde: the activities of Rodchenko as well as Vladimir Mayakovsky (1893-1930). My other profound memory relates to my trip to New York, together with Eishi Kitazawa and Aya Tanaka, in preparation for the exhibition on Saul Steinberg. Being able to see Steinberg's works taken out of storage before my eyes and choosing among them for the exhibition was a time of sheer bliss.

When you undertake work relating to historical figures, the existence of those who were active at the same time makes you feel even closer to them. Through my experiences, visions of the artists who devoted themselves to creativity and the dreams they pursued came flooding back to me.

kyoto ddd gallery 2021-22

April 3 – July 10, 2021

try try try: helmut schmid typography

July 24 – September 25, 2021

Takeshi Kojima: One Dream

October 16 – December 18, 2021

Survive – Eiko Ishioka

January 15 – March 19, 2022

Osamu Torinoumi Making Type: Like Water, Like Air



try
try
try

hel
mutypo
schgra
midphy

京都dddギャラリー
第228回企画展
ヘルムート シュミット タイポグラフィ:
トライ トライ トライ

4月3日 - 7月10日
april 03 to july 10, 2021

try try try: helmut schmid typography

April 3 – July 10, 2021

ヘルムート シュミット タイポグラフィ：トライ トライ トライ



2018年に急逝したヘルムート・シュミットの初の回顧展の機会を得た。残された仕事の資料に目を通す中で、展示の方向性は自然と固まった。クライアントワークと個人的な制作に垣根を設けることなく、形態・視覚言語、そして東洋と西洋の文化についての探求を、時系列を追って淡々と展示するというのだ。手書きの原画、スケッチ類は解説以上に制作過程や背景を知るうえで大切であり、そうした資料を眼前にできることこそ展覧会の醍醐味であるので、できるだけ実物をそのまま展示した。

パーゼル時代の師の一人 クルト・ハウエルトがシュミットに語った「響く形」を、制作を通して追い求めた足跡を辿った。

阿部宏史 ニコール・シュミット

This was the very first retrospective of works by Helmut Schmid, who passed away in 2018. The orientation of the exhibition took shape quite naturally as we pored over the materials he left behind. Without separating his commercial work from his private work, we decided on a straightforward chronological display of Schmid's explorations relative to form and visual language, and both Eastern and Western cultures. Even more than the explanatory commentary, his original freehand drawings and sketches are important for knowing the processes and backgrounds of his works, and being able to view those materials firsthand is what makes this retrospective so special. We made every effort to show such materials just

as they are.

Kurt Hauert, one of Helmut Schmid's mentors during his years in Basel, taught him the importance of "form that resonates." This exhibition traced the trajectory of Schmid's pursuit of that aim through his works.

Hirofumi Abe, Nicole Schmid



Takeshi Kojima: One Dream

July 24 – September 25, 2021

小島 武展 夢ひとつ



小島のイラスト展を開催するにあたり、大いに悩んだのは、多岐にわたる膨大な仕事の中から、限られたスペースに、どう展示したら良いのか、という点でした。確かに年代順にはアートシアター新宿文化のポスター、ミュージシャンたちとの仕事、そして沢木耕太郎をはじめとしたノンフィクションライターとの本の仕事、リトグラフ、シルクスクリーンの作品群と展示するのが順当であるということとは重々承知の上で、あえて原画に絞った展示にと考えました。原画は段ボール4、5箱ありました。

小島武の場合、原画というのはコピー紙に鉛筆で描いたものが大半です。それを壁一面にピンナップしました。ピンナップできないものはファイルに収め自由にめくる、それでもまだまだある、小さな絵は会場で手動式スライド機で見ることができるようになりました。いつか小島武の全仕事を展示できることを夢みながら。

平野公子



In planning this exhibition of illustrations by Takeshi Kojima, the greatest challenge we faced was deciding how to choose among his vast and diverse body of works and display them within the spatial limitations of the gallery. While we knew all too well that the sensible method would be to display Kojima's works in groups chronologically – his posters for Art Theatre Shinjuku Bunka, works for musicians, book illustrations for Kotaro Sawaki and other nonfiction writers, lithographs, silkscreens – we decided to show his works intermingled among his original drawings. Drawings of this kind filled four or five cartons.

The bulk of Kojima's original drawings were drawn in pencil on standard printer paper. These we pinned up on the gallery walls, except for those which couldn't be pinned – which we placed in files for visitors to thumb through freely. Even so, this still left Kojima's smaller drawings, and these we set up so visitors could view them using a hand-operated slide viewer. I dream of the day when Takeshi Kojima's works could be shown together in their entirety.

Kimiko Hirano



Survive – Eiko Ishioka

October 16 – December 18, 2021

石岡瑛子 デザインはサバイブできるか



銀座gggから巡回する京都dddの「サバイブ 石岡瑛子展」は、新たな課題に直面していた。東京と同じでは意味がない。京都で何をすべきか？ という難題だ。石岡瑛子氏を中心とする「Team Eiko」は議論を重ねたが、決定的な解は見つからなかった。

突破口になったのは、永井裕明氏が冗談のように口にした「伏見稲荷はどうだろう？」のひと言。巨大な赤短冊にプリントしたEIKO語録を鳥居のように並べるアイデアである。その刹那、すべてが動き始めた。ギャラリーは会期中、EIKOの熱量を凝縮するパワースポットと化した。来場者記録も更新したという。私が密かに温めていた「三十三間堂案」は没となったが、結果オーライ。EIKO展はつづく。

河尻亨一

The exhibition "SURVIVE – EIKO ISHIOKA" had already been mounted at ginza graphic gallery in Tokyo, and in planning for the show at kyoto ddd gallery we confronted a new challenge. Believing it would be meaningless if the Kyoto show were no different from the one in Tokyo, what then should we do in Kyoto? The subject was debated extensively by Ryoko Ishioka and her "Team Eiko," but no definitive answer was found.

The breakthrough came after Hiroaki Nagai casually said half-jokingly, "How about Fushimi Inari Shrine?" His idea was to print quotes from things Eiko said onto giant strips of red paper and arrange them like the famous vermilion torii gates of Kyoto's Fushimi Inari Shrine. Mr.

Nagai's comment immediately set things in motion. During the show, the gallery became a spiritually vibrant "pilgrimage site" resonating with the energy generated by Eiko and her works. A new record was set for visitors to one of the gallery's exhibitions. Personally, I had been harboring an idea along the lines of Kyoto's Sanjusangen-do. That was rejected, but in the end everything turned out brilliantly. "SURVIVE – EIKO ISHIOKA" today continues on its journey.

Koichi Kawajiri



Osamu Torinoumi Making Type: Like Water, Like Air

January 15 – March 19, 2022

鳥海修「もじのうみ: 水のような、空気のような活字」



個展「もじのうみ」の企画段階で、文字は作品ではないし、書体はひとりで作らないという考えから「個展」とすることに戸惑いがありました。ところがアートディレクションは、私個人に焦点をあてることで、活字は人の手によって作られていることを誰にでも分かりやすく表現することに成功したようです。おかげでこの展覧会を観覧した方々からは、膨大な文字を作ることの果てしなさと、水や空気のような文字が生まれる背景を汲み取り、活字を見る目が変わったといった感想を頂戴しました。予想を超える多くの好意的な反応に、はじめに抱いた戸惑いはなく、この仕事を多くの人々に知っていただいたことに心から開催して良かったと思います。

鳥海修

During the planning stage for this exhibition, I was in a quandary about its being called a "solo show." In my view, type isn't a "work" as such, and typefaces aren't created working in isolation. But by having the art direction focus on me as an individual, I think the exhibition succeeded in demonstrating to everyone, in an easily understandable way, that type is created by hand. Visitors to the gallery voiced how their view of type had changed after seeing the limitless potential for creating the written word and the background that gives birth to lettering "like water, like air." Receiving far greater positive reaction than I had imagined, my initial concerns dissolved, and I am truly happy to have had the opportunity for so many people to

become familiar with my work.

Osamu Torinoumi



Center for Contemporary Graphic Art and Tyler Graphics Archive Collection 2021

March 2 – June 6, 2021

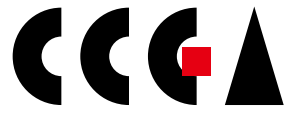
Ties and Bonds in Graphic Design:
DNP Graphic Design Archives Collection

June 12 – September 5, 2021

Wanderlust in Graphics

September 11 – December 19, 2021

Drawing Lines:
34th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection



Ties and Bonds in Graphic Design: DNP Graphic Design Archives Collection

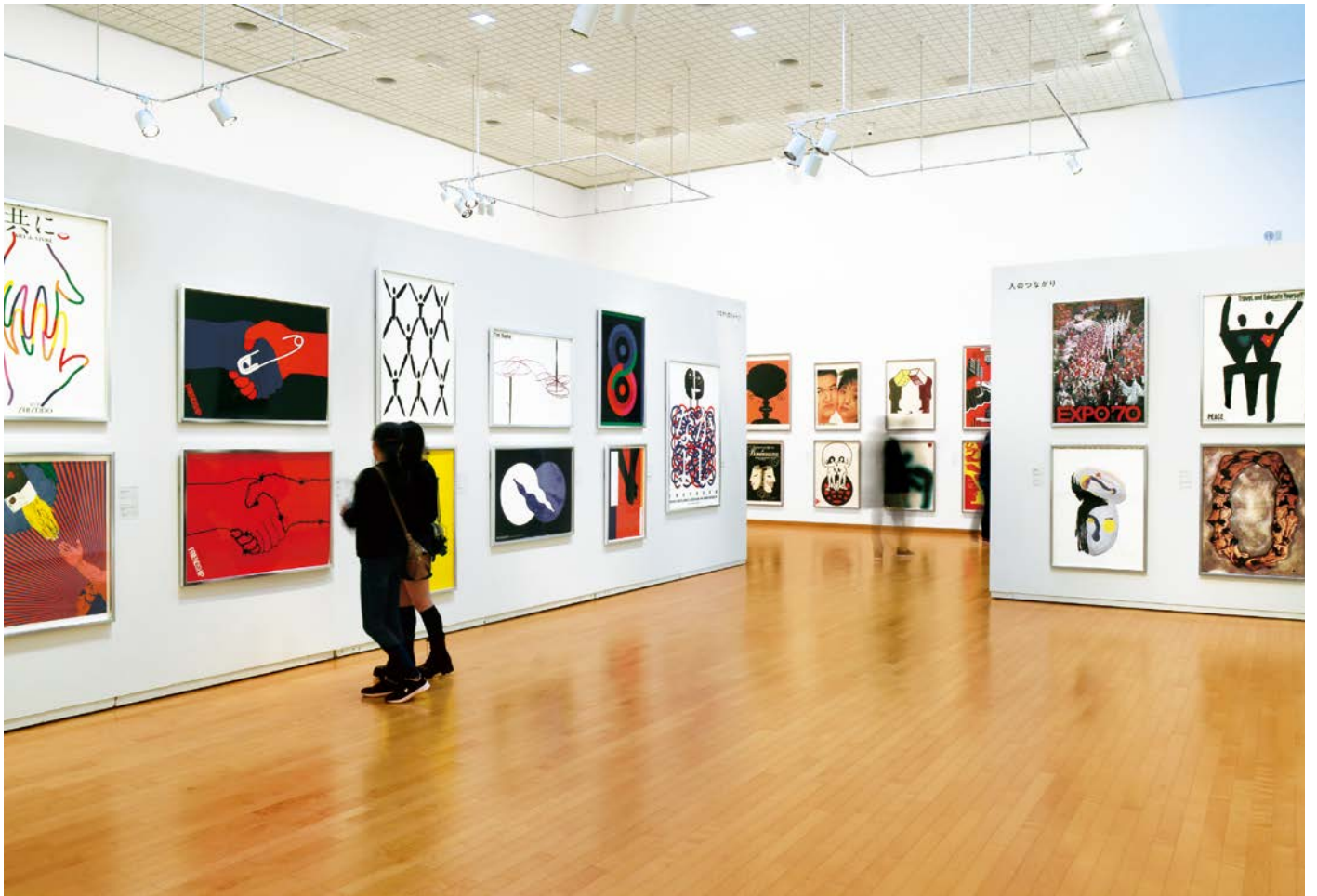
March 2 – June 6, 2021

つながりのデザイン：DNPグラフィックデザイン・アーカイブコレクション



本展ではCCGA収蔵のDNPグラフィックデザイン・アーカイブより、つながりや絆をキーワードにポスター作品を選び展示した。東日本大震災の発生直後に頻繁に語られた言葉が「絆」だが、10年が経過し記憶が人々から薄れるに従い、その言葉を見かけることも少なくなった。コミュニケーションがつねに介在するグラフィックデザイン自身がどのようにつながりを表現しているかに目を向け、そこに見られる表現をいま改めて見直すことで、それがどうあらわされてきたのかを探った。

This exhibition focused on posters in CCGA's DNP Graphic Design Archives Collection that in some way deal with ties and bonds of various kinds. The word "kizuna" (絆), meaning "bond," was often heard in the days immediately after the Great East Japan Earthquake and tsunami disaster of 2011. But with the subsequent passage of 10 years, memories of the disaster have faded and the word "kizuna" is now heard less often. This exhibition looked at how graphic design, a medium of communication, has expressed ties and bonds through the years, and probed how such expression has evolved.



Wanderlust in Graphics

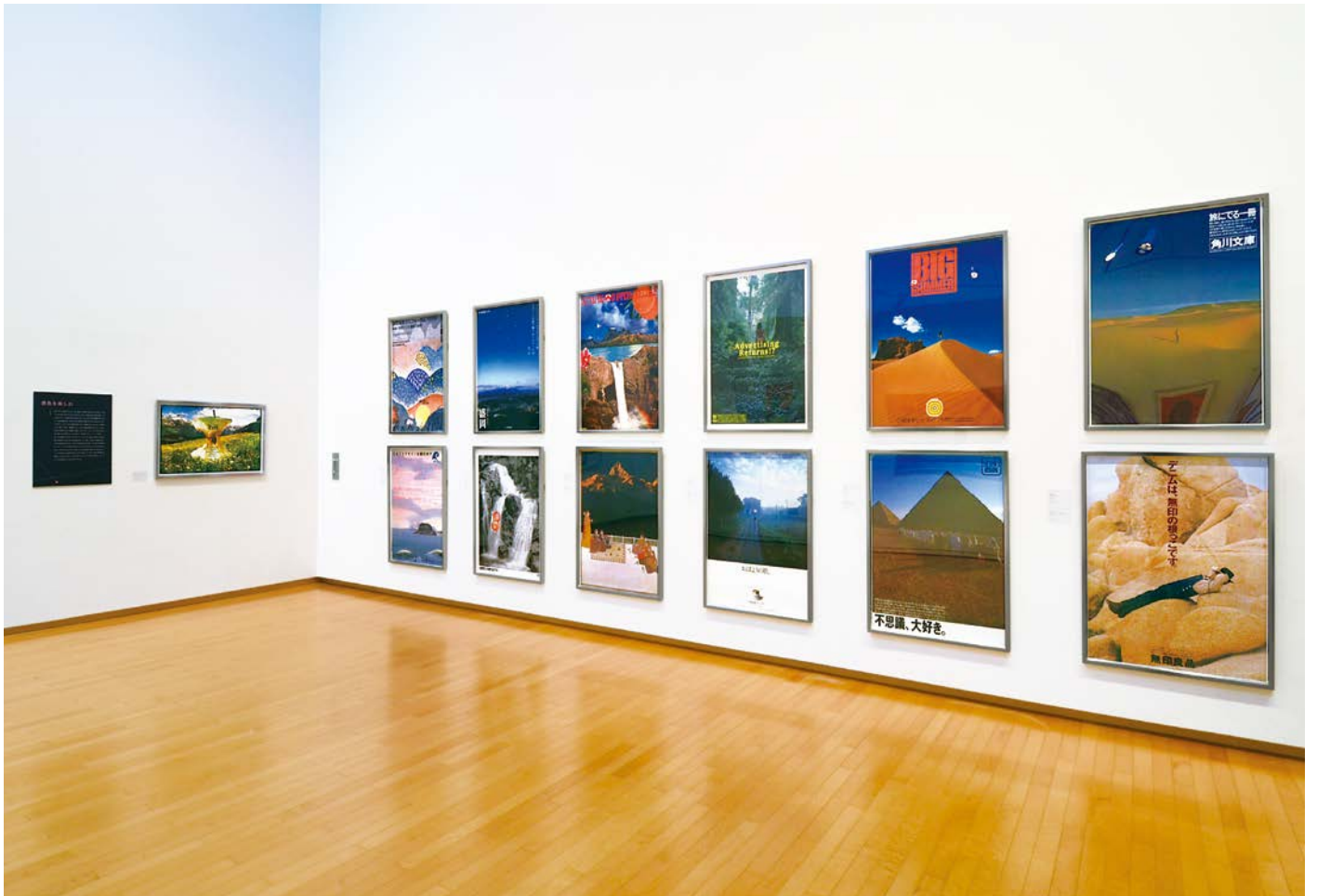
June 12 – September 5, 2021

どこか遠くへ：グラフィックにみる旅のかたち



CCGA収蔵のDNPグラフィックデザイン・アーカイブコレクションのポスターの中から、広い意味での旅に関する作品を選び展示した。旅には移動手段や目的地、旅先での体験など多くの要素が含まれる。広告市場において交通や観光誘致などに関するものは多く、それらはポスターが少なくなった現在でもなお広く目にする事ができる。グラフィックデザインであらわされた旅の表現によって人々の尽きせぬ移動の欲求に触れることを通して、非日常へのひとときの小さな「旅」へと誘った。

This exhibition brought together posters in the DNP Graphic Design Archives collection at CCGA that relate to travel in the broadest sense. Travel encompasses numerous elements, including modes of transportation, destinations, and our experiences acquired where we travel. In the advertising field, many works deal with transportation or promote specific tourist attractions; and even today, when fewer posters are created than earlier, we can still find graphics of these kinds. By giving visitors a chance to sense man's endless wanderlust as expressed through graphic design, this exhibition invited them on a small "journey" into realms outside their everyday life.



Drawing Lines: 34th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

September 11 – December 19, 2021

線を引く：タイラーグラフィックス・アーカイブコレクション展 Vol.34



グラフィックアートとは、古典的には線的な表現を用いた視覚芸術を意味する。そこに含まれる版画もまた、かつては線によってイメージを描き出すメディアだった。表現や技法の幅が広がり「線で描く」ことの意味もまた変わってきた中で、いまでも線を主体とした魅力的な版画作品が数多く生み出されている。本展はCCGA所蔵のタイラーグラフィックス・アーカイブコレクションから、フランク・ステラやナンシー・グレイヴスによる線の表現が印象的な作品を展覧した。

“Graphic art” in the classical sense refers to visual art expressing a line-generated image on a flat surface. Prints, one form of graphic art, were originally a medium that used lines to depict images. Today, even as expressive methods and techniques have broadened in scope, giving new meanings to the act of “drawing lines,” many highly attractive prints are created in which lines play the central role. This exhibition featured impressive prints of “linear” interest by artists including Frank Stella and Nancy Graves, gleaned from CCGA’s Tyler Graphics Archive Collection.



教育・普及事業

Education & Enlightenment

ギャラリートーク概要

オリンピック・ランゲージ：デザインでみるオリンピック 記念講演会 (Microsoft Teams Live Event)

出演者：マルクス・オスターヴァルダ

グラフィックデザイナーであり、約30年にわたりオリンピックを研究しているオリンピック歴史家、オリンピック・コレクターでもあるオスターヴァルダ氏による記念講演。まずは6万点を超える自身のコレクションや、今回の展覧会の元となったローザンヌでの展覧会の紹介、日本版で1,500ページを超える大著『オリンピックデザイン全史1896-2020』の制作についての話をした後、メインテーマであるオリンピックデザインの歴史について解説した。1896年にアテネで開催された第1回の近代オリンピックから最新の東京大会まで、ロゴやエンブレムの起源や変遷、5大陸を表す五輪マークの誕生、ピクトグラムやポスターについてなど。特に気鋭のデザイナーが総動員され、初めてデザインガイドラインが印刷物としてまとめられた1964年の東京大会、オブ・アートなどの影響を受けたグラフィックが特徴的な1968年のメキシコシティ大会など、著名デザイナーが関わりデザイン表現がさらに重要視されるようになった60年代以降については多数の画像を見せながら詳細に説明を行った。



葛西薫展 NOSTALGIA① ギャラリートーク (YouTube 配信)

出演者：葛西薫+上田義彦(写真家)+
皆川明(ファッションデザイナー)

一緒に組んだ仕事も数多く、付き合いの深い二氏がゲスト。展覧会タイトル「ノスタルジア」が葛西氏にぴったりだという上田氏は、葛西氏の作品全体を見て、思いと温度で手を動かして、自然に出来てしまうものが常に生まれている感じがあるという。皆川氏の、それぞれ葛西氏が手がけた自分の本と上田氏の本では全く空気が違うという指摘に、葛西氏は自分が作ったというより作家である皆川氏や上田氏が作ったものがそこにあるようにしたい、自分のものでなくなるのが楽しいのだと答えた。自分のものだけ自分のものではないという。そのような創作についての姿勢は、ゲストの二氏の仕事についても感じているようで、葛西氏は二氏と話したいと思った理由の中には、古いとか新しいとか、流行っているとか、こうだと強いからとかではなく、どう思われても構わないからこれといんじやないかということ、おそらく二人とも表現しているということがある。自然に出てきてしまうものに素直に従うようになるというやり方に共通項があると思ったからと語った。



ヘルムート シュミット タイポグラフィ：トライ トライ トライ① 展覧会紹介 (YouTube 配信)

出演者：阿部宏史+ニコール シュミット+長谷川哲也

今回の展示企画を担当した阿部氏、ニコール氏と展示デザインを担当した長谷川氏が、それぞれの立場から、どのように回顧展としての展覧会を具体化していったかについて語る。阿部氏は最初に膨大なシュミット氏の作品の調査を行い、才能ではなく努力の人であったと語る。ニコール氏からは、彼がよく口にした言葉から展覧会タイトルが決まったと言う。長谷川氏は、時系列に多くの作品、そして制作の試行錯誤の痕跡を辿る様にスケッチなども含めて展示し、世界各国で活躍した時代時代をオーバーラップさせて展示する為、軽量なバンチングメタルのパネルを採用した経緯を説明。またシュミット氏が様々な人との繋がりの中で作品を制作したことが伝わる様、スナップ写真や書簡も適宜配置した。ニコール氏は、展覧会がシュミット氏を巡る一つの物語となったと締め括った。



ヘルムート シュミット タイポグラフィ：トライ トライ トライ② 「ヘルムートシュミットについて」(YouTube 配信)

出演者：原研哉、白井敬尚、室賀清徳、フィヨドル・ゲイコ、
ヴィクター・マルシー、ラース・ミュラー、
フィリップ・トイフェル、阿部宏史、ニコール・シュミット

生前交流のあった著名な関係者が語る。白井氏は、シュミット氏の著作は自分への道標と語る。ラース氏はシュミット氏の著作「パーゼルへの道」は「ルーダーへの道」だと言う。トイフェル氏は『タイポグラフィ・トゥデイ』を全てコピーしたエピソードを披露。阿部氏は展覧会企画を通じ、シュミット氏は「筋」のある人と評す。ゲイコ氏はシュミット氏の評価はミニマリズムと「目で見える音楽」を作曲した事だとする。室賀氏は、1980年代の「タイポグラフィ・トゥデイ」が未だカッコいいのはなぜ?という疑問がタイポグラフィへの興味の入口と語る。ヴィクター氏は、シュミット氏が理解されていないから知られる為のプロジェクトを大学で開始。ニコール氏は、ルーダーの「タイポグラフィ」日本語版デザイン制作途中で父が亡くなったが、最初にステップを示してくれたので最後まで取組めたと言う。原氏は、真っ白な紙にインクを置く事の緊張感を教えてくれたのがシュミット氏の仕事だと語る。



小島武展 夢ひとつ 展覧会紹介 (YouTube 配信)

出演者：平野公子

今回の展覧会の企画監修者である平野公子氏が小島武氏の魅力について語る。69歳で亡くなるまで膨大な量の絵を描き続けたイラストレーター。但し、その作風はこれが小島武だという固まったモノはなく、多様性が広がっている。風の流れの様に、点が線となり面となっていく「サヨナラシリーズ」は、劇作家の別役実氏の本に使われていた。表紙では鮮やかな、これが小島武の「赤」という色が使われている。またPC以前の時代に鉛筆とコピー用紙を多用したのも小島武の特徴的技法。1992年から雑誌「エスクワイヤ」に連載された「武蔵野アマルコルド」にはこの手法が用いられたカットが使われている。また、沢木耕太郎氏の小説は、装丁：平野甲賀、イラスト：小島武による本が多数存在。その中で1点だけ飛行機が飛び立つ後ろ姿が使われた原画が見つかっておらず、是非とも見つけ出したいと語る。是非、過去にない規模の作品を目の当たりにする事ができる展覧会を見に来て、小島武の魅力に触れて欲しい、と締め括った。



葛西薫展 NOSTALGIA ②
ギャラリートーク (YouTube 配信)

出演者：葛西薫 + 西川美和 (映画監督)

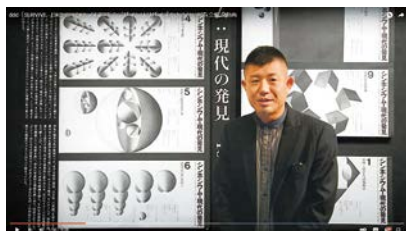
ゲストは映画監督であり、小説家、脚本家としても活躍する西川美和氏。「ノスタルジア」という展覧会タイトルについて西川氏は「とても葛西さんらしいな」という感想。葛西氏の作品から、いつも懐かしさや過去に対するこだわりを感じてきたという。葛西氏自身も、いい歳になっても、幼少時代、中学生になるあたりまでの記憶にずっと縛られているような気がする。デザインの仕事は、何が新しいとか、流行りかとか、これからのデザインはとか、そういうことが重要かもしれないけどそれが一番苦手だと。また一方で、たしかに古風な部分もたくさんあるけど、それが古くさいのかというと、決してそうじゃない、やはりどこかで一番新しい気もする、と展示を見て思いましたと西川氏。そして話はユニテッドアローズや日産シーマのCM、ヒロシマ・アピールスのポスターなど、西川氏が気になっていた作品のことや、映画や脚本など西川氏の仕事のことへ。さらに映像、視覚表現や、装丁のこと、言葉と文字の問題など、1時間半があっという間の話題の尽きないトークとなった。



石岡瑛子 デザインはサバイブできるか①
展覧会解説 (YouTube 配信)

出演者：河尻亨一

今回の展覧会の監修者であり、評伝『TIMELESS 石岡瑛子とその時代』を執筆した河尻亨一氏が展覧会の見所について語る。数多くの展示作品の中から、石岡氏が日本で初めて女性として日宣美賞を受賞した「シンポジウム 現代の発見」について、様々な形の模型を切って作った造形をアングルを変えて撮影したプリントを構成してできた事が近年発見された版下から分かったと言う。また、1970年代に10年に亘って担当したパルコのキャンペーンのひとつ、1977年の「あゝ原点。」は、最も撮影が困難であった。インドのある部族の女性の撮影交渉に1か月。許可が下りた際に砂漠の向こうから大挙して現れた女性達をモチーフに撮影されたと言う。モダンジャズ界の帝王マイルス・デイヴィスのアルバム「TUTU」のジャケットには、アーヴィング・ベンをカメラマンに起用し、マイルスの手や顔のモノクロー写真を使用。同アルバムはグラミー賞を受賞。最後に石岡の言葉の札を持ち帰ることができる展覧会場のスペシャルコーナーを紹介。



葛西薫展 NOSTALGIA ③
ギャラリートーク (YouTube 配信)

出演者：葛西薫

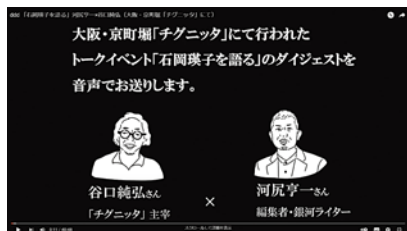
葛西氏自らが展覧会場で解説を行うギャラリートーク。コロナ禍のため無観客で収録したものをNo.1 (一階会場) とNo.2 (地階会場) に分けて配信を行った。まずは30年ぶりとなるgggでの展覧会について、条件を与えられてそれに応える仕事とは違い、白い器を与えられてゼロから作る展覧会は、何をすればいいか、最初は難しかったという。しかし20年以上にわたり思いついたことなどを言葉や絵で記録しているノートを見ているうちに、自分でも忘れていた過去のことが次々に浮かび上がり、ノスタルジアというタイトルを付けることで、自然に手が動き始めたという。前から自分の中にあつたものを写真やイラスト、抽象的な形など、さまざまな方法で形にしてみたものが今回の新作だと語る葛西氏。一点一点の作品へのこだわりや考えだけでなく、手を動かして作る過程の楽しさや面白さが、その話から伝わってきた。大変だったけれど、今回の展示は今の自分のこれ以上でも以下でもない、やれることはやった、今はからっぽになったような爽快感がある、と締めくくった。



石岡瑛子 デザインはサバイブできるか②
「石岡瑛子を語る」(YouTube 配信)

出演者：河尻亨一 + 谷口純弘

谷口氏が主宰する大阪・京町堀の「チグニッタ」で行われたトークイベント「石岡瑛子を語る」の音源から、ダイジェストで配信できる様、編集。河尻氏は、第1章ではエコさんがいかに凄いなであったかの数々のエピソードを披露。第2章では、北京オリンピックの衣装デザインについてインタビューし、気に入られた事。NYでインタビューした後、「ニューヨーク・タイムズ」で社説を聞いた事を語る。第3章では、dddの展示の中からパルコの「あゝ原点。」や製版ディレクターモクリエイティブチームのメンバーとして扱った姿勢等を紹介。谷口氏からは、エコさんが活躍したB1ポスター全盛期の時代から、今ではSNS等に広告やコミュニケーションが変わったと語る。また最終章で河尻氏は、パワフルさで圧倒的熱量を持つエコさんとは、底知れぬ矛盾を抱えつつ脆さも合わせ持つ、ラプリーな人でもあったと言う。そして今の悩める日本人にとって、エコさんを知ることは役に立つはずだと締め括った。



日本のアートディレクション展2020-2021
ギャラリートーク (YouTube 配信)

出演者：佐藤可士和 + 服部一成

国立新美術館で開催された「佐藤可士和展」の環境空間で本年度のグランプリを受賞した佐藤可士和氏を迎えてのトーク。ゲストは佐藤氏と同学年の服部一成氏。大学は違うが同じアルバイト先で学生時代から顔見知りであったという両氏、就職後も博報堂の佐藤氏とライトパブリシティの服部氏が一緒に仕事をしたことも。そんなことから可士和展について語ってもらうには同時代を併走してきた服部氏がふさわしいと、佐藤氏の要望もあって実現した対談。実際の展覧会場の画像を見ながらの解説は切れ味鋭く、このトークのテーマである「デザインのパラダイム」が今回の受賞対象である「アートディレクションを見せる展覧会のアートディレクション」でも大胆なロゴの展示の仕方などさまざまなところに活かされていることがよくわかる。最終的に完成した展示空間の話に加え、4年におよぶ展覧会の準備期間に、大きな倉庫を借りて原寸の高さ5メートルの壁面を作って展示のシミュレーションを行った様子など、貴重な裏話もたっぷり聞くことが出来た楽しい時間となった。



鳥海修「もじのうみ：水のような、空気のような活字」
展覧会解説 (YouTube 配信)

出演者：鳥海修 + 堤拓也

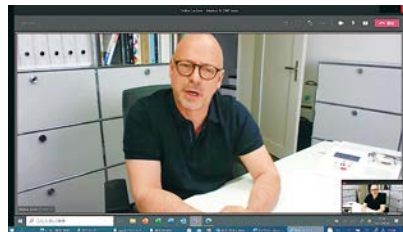
鳥海修氏と本展キュレーションの堤氏が展覧会の見所について解説。展覧会は鳥海氏の原風景の漫画から始まる。鳥海氏はグラフィックデザインに活字を作る仕事がある事を知らなかったが、学生時代に小塚昌彦氏の「日本人にとって、文字は水であり、米である」という言葉を聞いて、ずっと心に留めていた。庄内平野の水と空気を思い浮かべ、やるしかないと思ったと語る。鳥海氏が手掛けた書体総覧の中から、谷川俊太郎氏の詩の為に作った書体とお礼の詩を頂いた事を紹介。鳥海氏が詩を入れるのは本文書体で、その理想は水や空気の様に、誰が作ったかわからないスツと文章が頭に入ってくることだと語る。『鈴木勉の本』は、鳥海氏が写研時代から字工房時代に大変お世話になった鈴木氏の足跡を装丁家の平野甲賀氏の薦めで纏めた追悼文集だと紹介。最後は会場に再現された仕事机で、筆や硯を使い手で描いた文字をアウトライン化する工程を映像で紹介。最後に堤氏から、キャッチーな展覧会になっているので、デザインを学ぶ学生やデザイナーは勿論だが、活字について考えた事もない人にも是非観て欲しいと締め括った。



Olympic Language: Exploring the Look of the Games Commemorative Lecture (Microsoft Teams Live Event)

Speaker : Markus Osterwalder

Markus Osterwalder is a graphic designer who, for roughly 30 years, has been an Olympics historian and collector. He began his commemorative lecture with an introduction to his personal collection, numbering more than 60,000 items in total, and to the exhibition held at the Olympic Museum in Lausanne which formed the basis of this show at ggg. He next spoke of his work in producing *OLYMPIC GAMES: THE DESIGN*, his comprehensive book which exceeds 1,500 pages in the Japanese edition, and then proceeded to his main topic of the talk: the history of Olympics-related design. He discussed the origins and transformations of the Olympic emblems and logos between the first Games of the modern era, held in Athens in 1896, and the 2020 Tokyo; how the Olympics symbol came to have five rings, which represent the five continents; and Olympic various pictograms and posters through the years. He focused his talk on Games from the 1960s, when visual expression was accorded great importance and the leading designers began to be recruited to undertake the Olympic designs. He spoke in particular of the 1964 Tokyo, when design guidelines were published for the first time, and the 1968 Mexico City, the graphics of which were heavily influenced by op art. He illustrated his talk with numerous visuals.



Kasai Kaoru Exhibition: NOSTALGIA ① Gallery Talk (posted on YouTube)

Participants : Kaoru Kasai + Yoshihiko Ueda (Photographer) + Akira Minagawa (Fashion Designer)

For this Gallery Talk, Kaoru Kasai was joined by two guests he has known for many years and with whom he has collaborated on numerous projects. Yoshihiko Ueda said the title "NOSTALGIA" fits Mr. Kasai perfectly, observing how everything in his body of works seems to derive naturally from his sentiments and warmth. Akira Minagawa noted that his own books designed by Mr. Kasai and those of Mr. Ueda designed by Mr. Kasai are totally different in ambience. Mr. Kasai responded by saying that when designing for any artist, rather than aiming to create a design indicative of his own contribution, he always seeks to stress that the book is by that artist, adding that he enjoys it when a design becomes something other than his own. Mr. Kasai's creative stance seems in evidence in his work performed for his two guests, and one reason he wanted to talk with them today is because, to his thinking, both Mr. Minagawa and Mr. Ueda likely create without regard for whether what they do will be considered old-fashioned or new, in vogue or not, or powerful in a given way. Such things don't seem to matter to them. Mr. Kasai said he thought that the three of them shared a common way of working, following their natural instincts and watching where the results lead.



try try try: helmut schmid typography ① Exhibition Introduction (posted on YouTube)

Participants : Hirofumi Abe + Nicole Schmid + Tetsuya Hasegawa

The three participants spoke on how they went about putting together this retrospective exhibition in their respective capacities: Hirofumi Abe and Nicole Schmid, as members of the team in charge of the exhibition's planning, and Tetsuya Hasegawa, as the exhibition's designer. Mr. Abe said he began by undertaking a survey of Helmut Schmid's vast body of works, which made him conclude that Schmid's brilliance came by effort rather than natural talent. Ms. Schmid said the exhibition title was chosen because of how often her father exhorted with the words "try try try." Mr. Hasegawa explained how he decided to adopt panels made from lightweight perforated metal sheets: in order to create an overlapping, chronological display of Schmid's activities around the globe at different times, including his many works as well as his sketches and other items tracing Schmid's processes of trial and error. He added that he placed various snapshots and letters among the displays in order to convey how Helmut Schmid's creative work derived from his connections with many different people. Ms. Schmid closed by saying that this exhibition, in its final form, was a story all about Helmut Schmid.



try try try: helmut schmid typography ② "on Helmut Schmid" (posted on YouTube)

Participants : Kenya Hara, Yoshihisa Shirai, Kiyonori Muroga, Fjodor Gejko, Victor Malsy, Lars Müller, Philipp Teufel, Hirofumi Abe, Nicole Schmid

Various well-known people who were associated with Helmut Schmid spoke about him. Yoshihisa Shirai described how Schmid's publications have guided him in his own career. Lars Müller suggested that Schmid's *der Weg nach Basel* [The Road to Basel] was in many ways "The Road to Ruder." Philipp Teufel related how he had once made a xeroxed copy of *Typography Today*. Mr. Abe came to recognize Schmid as a *man of strong will*. Fjodor Gejko compared Schmid to a minimalist composer of "music seen with the eyes." Kiyonori Muroga told how he had originally become interested in typography when he began wondering why the typography in *Typography Today*, written in the 1990s, is still so good-looking. Victor Malsy revealed that he started a project at his university to make students familiar with Helmut Schmid. Ms. Schmid noted that her father had died while designing the Japanese edition of Emil Ruder's *Typographie*, but she was able to complete the design because when he had indicated what steps to follow. Kenya Hara stated that it was Schmid's work that had taught him the tense excitement of applying ink to pristine white paper.



Takeshi Kojima: One Dream Exhibition Introduction (posted on YouTube)

Speaker : Kimiko Hirano

Kimiko Hirano, who was in charge of the planning of this exhibition, spoke about what makes Takeshi Kojima's works so appealing. Mr. Kojima was an illustrator who continued to create a vast volume of works straight up, and yet he did not have one definitive style but rather produced works of great diversity. His "Sayonara" series, in which, like the flow of the wind, points become lines, and lines become surfaces, were used to illustrate a book by playwright Minoru Betsuyaku. The cover features a brilliant red of the kind only Kojima could create. He is also remarkable for his unique production method in which, in the days before computers, he made abundant use of pencils and copy paper. Illustrations made by that method were used in "Musashino Amarcord," a serialized feature of the Japanese edition of *Esquire*. He also provided the illustrations for numerous novels by Kotaro Sawaki, with book design performed by Kouga Hirano. Among them, there is one featuring an illustration by Mr. Kojima of an airplane taking off, viewed from the rear. It is the only illustration for which the original drawing has yet to be located, and Ms. Hirano expressed her strong hope that this work will be found. She closed with the hope that many people will come to see at this exhibition of unprecedented scale, to get to know what makes his works so appealing.



Kasai Kaoru Exhibition: NOSTALGIA ②
Gallery Talk (posted on YouTube)

Participants : Kaoru Kasai + Miwa Nishikawa (Film Director)

Mr. Kasai's guest for this Gallery Talk was film director Miwa Nishikawa, who is also active as an author and screenwriter. She offered that the exhibition title, "NOSTALGIA," fits Mr. Kasai perfectly, saying that his works have always given her a sense of his longing for, or strong interest in, the past. Mr. Kasai himself said that, no matter how old he gets, he seems forever bound up in memories of his childhood. He opined that though it's perhaps important for a designer to stay alert to what's new, what's in vogue, or where design is likely to evolve in the future, this is something he's not good at. Ms. Nishikawa responded by saying that, after seeing Mr. Kasai's exhibition, she felt that though what he does contains many elements of the past, his works are by no means old-fashioned but rather strike her as newest of all. The talk next turned to specific works that had long been on Ms. Nishikawa's mind – Mr. Kasai's commercials for United Arrows and the Nissan Cima, his Hiroshima Appeals poster, and so on – and then shifted to Ms. Nishikawa's own work in film and screenwriting, and proceeded to issues relating to video and visual expression, book design, words and lettering, etc. The 90 minutes passed with lightning speed.



Survive – Eiko Ishioka ①
Exhibition Commentary (posted on YouTube)

Speaker : Koichi Kawajiri

Koichi Kawajiri, who served as director of this exhibition and who wrote a biography of Eiko Ishioka (*TIMELESS*), gave an introduction to the show's highlights. Among the many works on display, he first focused on "Symposium: Discovery Today," Ms. Ishioka's series of posters for a fictional symposium for which she received a JAAC Award, becoming the first female designer to win that award. Mr. Kawajiri noted that from recently discovered paste-ups of the posters it became known that this work consisted of prints of various cut-outs photographed from various angles. He next turned to the posters Ms. Ishioka created in 1977 as part of PARCO's promotional campaign. These posters were the most difficult to photograph. They featured women from a tribe in Rajasthan, India, and it took a month for permission to shoot was granted. When permission was finally received, the lens was trained on a large group of women who appeared out of the desert. For the cover of Miles Davis's "TUTU" album, she called on the services of photographer Irving Penn. The photos chosen focused on the artist's face and hands, shot in monochrome. The album received a Grammy Award. Mr. Kawajiri closed the Gallery Guide with an introduction to the special area in the gallery where visitors could take snippets of Eiko's words to keep.



Kasai Kaoru Exhibition: NOSTALGIA ③
Gallery Tour (posted on YouTube)

Speaker : Kaoru Kasai

Kaoru Kasai gave a personal tour of his show at the gallery. In No.1, he introduced his works on display on the ground floor, and in No.2 he spoke about those in the underground level. This was his first solo show at ggg in 30 years, and he said that, unlike works he creates in response to conditions presented to him, on this occasion he was given complete freedom of choice, which he said caused him difficulty at first. But then he began poring through the notebooks in which, for more than 20 years, he had recorded words or pictures that came to mind. And in doing so, he discovered many things from the past that he had long forgotten. He then settled on calling his exhibition "NOSTALGIA," and from then on he says his creative hand set naturally in motion. The result was a show of new works in various formats – photographs, illustrations, abstract forms – elicited from his memories. From Mr. Kasai's explanations, one could readily understand not only the thoughts behind each work and how he arrived at them, but also the fun and enjoyment he had making them. He said preparing the exhibition was a challenge right down to the wire, but the final result reflects perfectly where he stands today: no more, no less. Ultimately, he said, he did everything he is capable of, leaving him with feelings of unalloyed fulfillment.



Survive – Eiko Ishioka ②
"Talking about Eiko Ishioka" (posted on YouTube)

Participants : Koichi Kawajiri + Yoshihiro Taniguchi

The recording of a talk event held at Chignitta, a creative art space operated in Osaka by Yoshihiro Taniguchi, was edited for online distribution. In Part 1, Mr. Kawajiri related a large number of anecdotes demonstrating what an amazing person Eiko Ishioka was. In Part 2, he spoke about how he interviewed Eiko in New York about her costume design for the opening ceremony of the 2008 Beijing Olympics, and then shortly after that learned of her death in *The New York Times*. In Part 3, from among Eiko's works shown at ddd he talked about her posters for PARCO featuring Indian tribeswomen and about Eiko's stance treating even the paste-up director as a member of her creative team. Mr. Taniguchi spoke about how advertising and communication have changed from the days when outside posters flourished – the times when Eiko Ishioka was active – and today, in the days of social media. In the final section, Mr. Kawajiri commented on how Eiko, known for her amazing power and overwhelming energy, was a charming person who also had an aspect of fragility, harboring boundless contradictions. The talk concluded with the observation that knowing about Eiko Ishioka can serve a good purpose for Japanese today who are troubled and conflicted.



Art Direction Japan 2020-2021 Exhibition
Gallery Talk (posted on YouTube)

Participants : Kashiwa Sato + Kazunari Hattori

The main participant in this Gallery Talk was Kashiwa Sato, recipient of the Tokyo ADC Grand Prize for his exhibition mounted at the National Art Center, Tokyo. He was joined by the same age Kazunari Hattori. Although they went to different universities, they have known each other since their student days, having worked part-time at the same location. After graduation, they occasionally worked together on various projects, Mr. Sato representing Hakuodo and Mr. Hattori representing Light Publicity. In view of this background and their having shared the experience of working in the same era, Mr. Sato invited Mr. Hattori for this talk session, knowing he would be the right person to discuss his exhibition together. While viewing images of the show itself, their explanations were sharp and incisive. This talk's theme was "The Dynamism of Design," and Mr. Sato's "art direction of an exhibition," for which he received his latest award, was in evidence here in diverse ways, including his bold display of logos. Besides discussing the exhibition space in its finalized form, Mr. Sato revealed that during the four years he had to prepare for the show, he rented a warehouse in which he created a simulation of what he would show, using walls five meters high. Hearing these behind-the-scenes anecdotes made for an extremely valuable and enjoyable.



Osamu Torinoumi Making Type: Like Water, Like Air
Exhibition Commentary (posted on YouTube)

Participants : Osamu Torinoumi + Takuya Tsutsumi

In this Gallery Talk Osamu Torinoumi and Takuya Tsutsumi, who curated the exhibition, offered comments on the show's highlights. The exhibition evolved from manga based on scenes from Mr. Torinoumi's life. Mr. Torinoumi said that originally he was unaware that the realm of graphic design includes type design. Then, when he was student, he heard how typographer Masahiko Kozuka had said that "to the Japanese people, characters are as vital to their lives as water and rice." It called to his mind the clear water and fresh air of the Shonai Plain in Yamagata, where he grew up, and from that moment on, Mr. Torinoumi said, he decided creating type was what he would do. Mr. Torinoumi related that he focuses on creating type for the main text of a work, and the ideal he aims for is for the written text to be effortlessly absorbed by the reader without awareness of who created it – like water, like air. He then turned the topic a memorial book dedicated to typeface designer Tsutomu Suzuki. He had compiled this book on the recommendation of book designer Kouga Hirano. Finally, Mr. Torinoumi sat at a worktable placed in the gallery to resemble the one he actually uses. He showed a video describing how, he creates the outlines of lettering which he wrote by hand using brush and inkstone. Mr. Tsutsumi closed the talk saying that the exhibition is filled with things to catch the interest not only of design students and designers, so he hoped many people will come to see it.



CCGA Print Studio Workshops

CCGA 版画工房ワークショップ



CCGAでは版画教育の拠点としての機能を強化し、地域でのグラフィックアートの普及振興にいっそう貢献するために、小規模ながらも本格的な版画制作を行うことのできる工房を2012年に開設、市民向け版画ワークショップの開催を開始した。版画工房にはエッチング用プレス機等のほか、大日本印刷の前身である秀英舎で100年以上前に実際に使われていたアルビオン・プレス（活版用手動平圧印刷機）を再生して設置している。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため2020年は版画工房の活動を休止したが、2021年に2年ぶりとなるワークショップを開講することができた。ワークショップの内容は、松尾芭蕉が「おくのほそ道」で知られる旅の途中に福島で詠んだ俳句に合わせて木口木版画を制作し、アルビオン・プレスを使った活版印刷と組み合わせて外函付きの本格的な句画集として仕上げるといったもの。

久々の開催ということもあり応募を多数いただいたため追加開講を急遽決定し、充実した内容にいずれの回も好評をいただいた。

In 2012 CCGA opened a studio, small in scale but enabling full-fledged print production, in a quest to strengthen its function as a base for education about printmaking and to contribute further to the promotion of graphic art locally. Since its opening, print workshops open to local citizens have been held here. The studio is equipped with an etching press and other standard equipment as well as a restored Albion press that was actually used more than 100 years ago at Shueisha, the forerunner of Dai Nippon Printing Co., Ltd.

All activities at the print studio were suspended in 2020 to prevent the spread of the novel coronavirus, but workshops were able to resume in 2021 after a two-year hiatus. The theme of the 2021 workshops was taken from Matsuo Basho's (1644-1694) haiku poems composed in Fukushima while traveling the Oku no Hosomichi, "The Narrow Road to the Deep North." The prints were created by wood engraving, and the Albion press was put to use for the letterpress processing. The result was a professional-quality illustrated haiku collection, complete with a slipcase.

Reflecting the program's suspension in 2020, the 2021 print workshops attracted a large number of participants. To accommodate them, extra sessions were scheduled. The year's theme and content garnered accolades from all participants.

2021年度 木口木版と活版印刷で句画集づくり

日程：

① 2021年6月19日（土）、6月26日（土）、7月10日（土）、7月17日（土）、7月24日（土）、7月31日（土）全6日間

② 2021年8月28日（土）、9月4日（土）、9月18日（土）、9月25日（土）、10月2日（土）、10月9日（土）全6日間

講師：野口和洋（木口木版画家）、

竹村渉・若林亜美（活版印刷工房まんまる〇）

受講者数：各6名

2021 Workshop:

Creating an Illustrated Haiku Collection
by Wood Engraving and Letterpress

Dates :

① June 19 (Sat.), June 26 (Sat.), July 10 (Sat.),
July 17 (Sat.), July 24 (Sat.), July 31 (Sat.), 2021

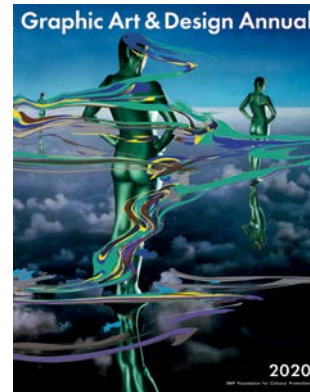
② August 28 (Sat.), Sep. 4 (Sat.), Sep. 18 (Sat.),
Sep. 25 (Sat.), Oct. 2 (Sat.), Oct. 9 (Sat.), 2021

Instructors : Kazuhiro Noguchi (wood engraving artist);
Wataru Takemura and Ami Wakabayashi
(Letterpress Design Studio Mammuru)

Number of participants : 6 each workshop

Publications 2021-22

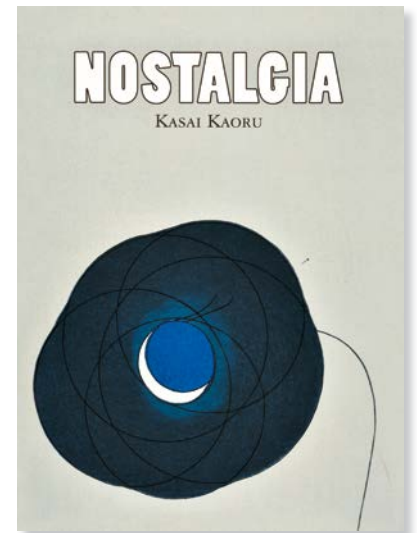
出版活動



■ Graphic Art & Design Annual 2020



■ Graphic Art & Design Annual 2020
ggg 35th Anniversary Special Issue



■ NOSTALGIA Kasai Kaoru (プリモアート®)

■ ソール・スタインバーグ
シニカルな現実世界の変換の試み

■ NOSTALGIA Kasai Kaoru (Primo Art)

■ Saul Steinberg
Lines that Transform the Real World



アーカイブ事業

Archiving

Poster Archives 2021-22

国内外のグラフィックデザイン作品を収集・保存し、優れた文化遺産として継承するとともに一般に公開することで、その発展と普及振興を目的としたDNPグラフィックデザイン・アーカイブに、新たに3名の作家の作品が寄贈された。

和田誠氏(1936-2019)の作品については、彼の事務所に保管されていたポスターのほぼ全種類、1,100点以上の寄贈を受けた。和田氏の幅広い仕事がかかえる、質量ともに充実したコレクションとなった。

片山利弘氏(1928-2013)の作品については、1960年代以降、アメリカや海外での活動時期の作品を中心に寄贈された。彼のグローバルな活動の一端に触れられる、大変貴重な作品群である。

松吉太郎氏(1962-)からは、田中一光デザイン室から独立後の作品を中心に寄贈いただいた。演劇ポスターを中心とした作品群は、他者とのコラボレーションというグラフィックデザインの核心に触れられる、彩にあふれた作品の数々である。

最後に、貴重な作品をご寄贈いただき、惜しみないご助力を賜った3名の作家と関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

森崎陵子

(CCGA現代グラフィックアートセンター)

The overarching aim of the DNP Graphic Design Archives is to contribute to the ongoing development and promotion of graphic design by collecting and preserving graphic design works from around the world, passing them to future generations as outstanding cultural assets and making them available for public viewing. During the past year, works by three designers were newly donated for inclusion in the collection.

More than 1,100 posters by Makoto Wada (1936-2019), nearly his entire output in this genre, were donated to the archives. These works, which previously were kept at his office, form a body of works of outstanding quality and quantity, a collection demonstrating the breadth of his creative talents.

The works of Toshihiro Katayama (1928-2013) donated to the archives consist primarily of his output created overseas starting from the 1960s. Together they form a precious collection offering insight into his activities on a global scale.

Taro Matsuyoshi (1962-) donated works mostly created after he went freelance after working at Ikko Tanaka's design studio. His works, especially his theater posters, abound in color and offer a glimpse at the crucial role collaboration plays in the realm of graphic design.

We wish to express our sincere appreciation to these three designers, and to everyone who enabled their precious works to become part of the collection of the DNP Graphic Design Archives.

Takako Morizaki

(CCGA: Center for Contemporary Graphic Art)

Makoto Wada Poster Archive

和田誠ポスターアーカイブ



1958



1961



1980



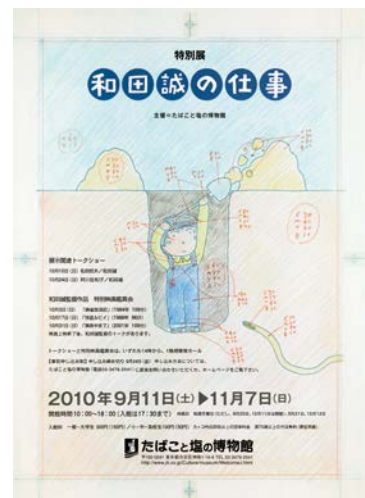
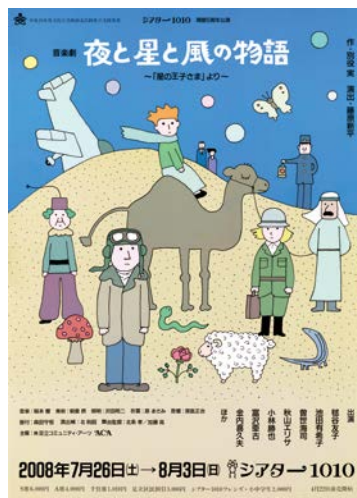
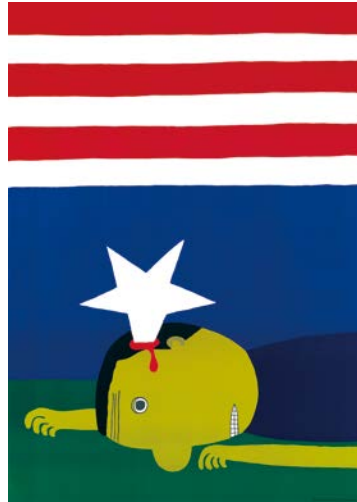
1984



1994

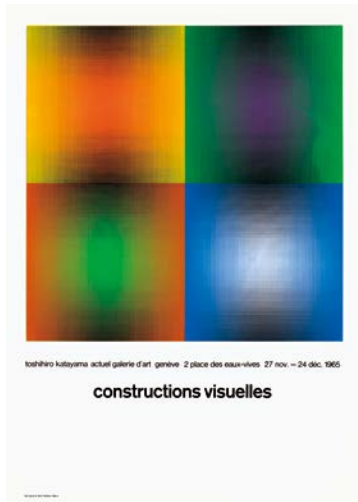


1995



Toshihiro Katayama Poster Archive

片山利弘 ポスターアーカイブ



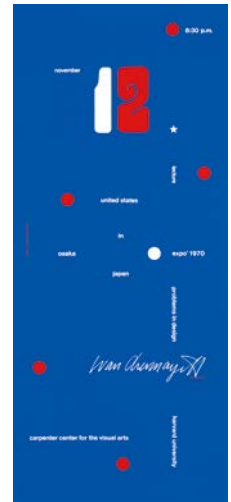
1965



1969



1970



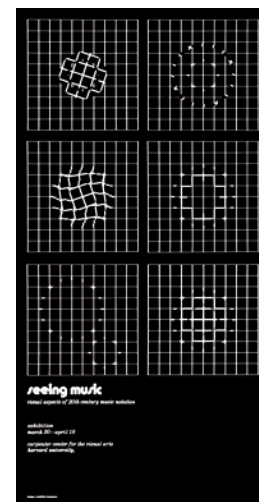
1970



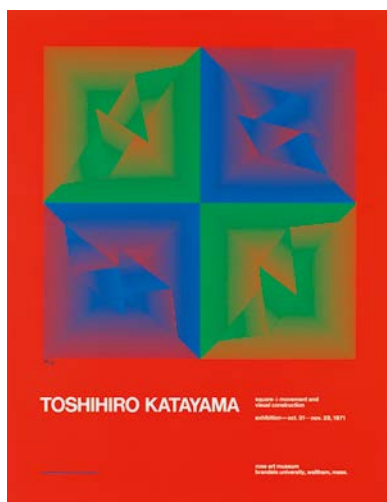
1971



1971



1971



1971



1972



1986

Taro Matsuyoshi Poster Archive

松吉太郎 ポスターアーカイブ



1994



2000



2002



2005



2007



2007



2014



2015



2015

DNP Graphic Design Archives

DNPグラフィックデザイン・アーカイブ

◆ポスターアーカイブ (2022年3月現在)

- ① 収蔵作家: 244名 (国内作家124名、海外作家120名)
- ② 総点数: 17,513点
- ③ 2021年4月～2022年3月の受入れ状況:

<日本>	
・片山 利弘	38点
・松吉 太郎	196点
・和田 誠	1,159点
・ギンザ・グラフィック・ギャラリー展覧会 「SPORTS GRAPHIC」出品作品	35点
・東京2020公式アートポスター	20点
計	1,448点

<海外>	
・チューリッヒ・デザイン・ミュージアムのポスター	33点
計	33点

◆アーカイブ作品寄贈

- ① ワルシャワ美術アカデミー(ポーランド)
2021年5月
永井 一正 ポスター 90点
- ② 西安建築科技大学建築学院(中国)
2021年6月
田中 一光 ポスター 5点
福田 繁雄 ポスター 1点
永井 一正 ポスター 22点

◆アーカイブ作品貸出

- ① 武蔵野美術大学 美術館・図書館
「片山利弘—領域を超える造形の世界」
2021年4月5日～6月20日
片山 利弘 作品 1点
- ② 国立新美術館
「ファッション イン ジャパン 1945-2020 流行と社会」
2021年6月9日～9月6日
※鳥根県立石見美術館から巡回
石岡 瑛子 作品 2点
山口 はるみ 作品 1点
- ③ 3331 Arts Chiyoda
「オルタナティブ! 小池一子展
アートとデザインのやわらかな文化創造に向けて」
2022年1月22日～3月21日
石岡 瑛子 作品 2点
山岡 茂 作品 1点
木下 勝弘 作品 1点

◆ Poster Archives (as of March 2022)

- ① Artists represented: 244
(124 domestic, 120 from overseas)
- ② Items in collection: 17,513
- ③ Items received between April 2021 and March 2022

< Japan >	
・ Toshihiro Katayama	38
・ Taro Matsuyoshi	196
・ Makoto Wada	1,159
・ Works on display of the ginza graphic gallery exhibition SPORTS GRAPHICS	35
・ Tokyo 2020 official art posters	20
Total	1,448

< Overseas >	
・ Posters of The Museum für Gestaltung Zürich	33
Total	33

◆ Donations to the Archives

- ① Academy of Fine Arts in Warsaw (Poland)
May 2021
90 Kazumasa Nagai posters
- ② Xi'AN University of Architecture and
Technology College of Architecture (China)
June 2021
5 Ikko Tanaka posters
1 Shigeo Fukuda poster
22 Kazumasa Nagai Posters

◆ Loans of Archived Works

- ① Toshihiro Katayama — Transcending Spatial Arts
Exhibition at Musashino Art University Museum & Library
April 5 – June 20, 2021
1 Toshihiro Katayama work
- ② Fashion in Japan 1945-2020
Exhibition at National Art Center, Tokyo
June 9 – September 6, 2021
* Traveled from the Iwami Art Museum.
2 Eiko Ishioka works
1 Harumi Yamaguchi work
- ③ Alternative! Kazuko Koike Exhibition—
Soft-Power Movement of Art & Design
Exhibition at 3331Arts Chiyoda
January 22 – March 21, 2022
2 Eiko Ishioka works
1 Shigeru Yamaoka work
1 Katsuhiko Kinoshita work

国際交流事業

International Exchange

A Sense of Movement: Japanese sports posters

The Japan Foundation Gallery (Sydney)

October 22, 2021 – January 22, 2022

動きの感覚 — 日本のスポーツ・ポスター展 国際交流基金シドニー日本文化センター



シドニーのセントラル駅から徒歩5分、ジャン・ヌーヴェル設計のワン・セントラル・パーク内に国際交流基金ギャラリーがあります。ここで2021年10月22日から2022年1月22日まで、スポーツをテーマにした日本のポスター展「A Sense of Movement: Japanese Sports Posters」が開催されました。gggのキュレーター北沢永志氏の企画のもと、浅葉克己、福田繁雄、田中一光、横尾忠則、上西祐理、亀倉雄策の6人の優れた日本人デザイナーのポスターが展示され、作品にあわせて写真の革新的な使用などデザイナーの技法・創作プロセスも紹介されました。特に上西祐理の2001年世界卓球選手権のポスターは、現在、そして将来にわたって女性デザイナーの力強い作品に目を向けていくことの重要性を示す、象徴的な展示となりました。

2005年にgggで開催された巡回展「パラリンジ・デザイン展」以来、北沢氏と久しぶりに再会できたのも素晴らしい出来事でした。2022年1月22日には、北沢氏とともにオンラインでのクロージングイベント「A Sense of Movement Finissage」に参加しました。イベントでは本展について語り合ったほか、空間にオブジェクトを浮かせる（亀倉《TOKYO 1964》や上西のポスター）、斜めに大胆に切り込みを入れる（福田《Victory, 1976》）といった手法を通じて、デザイナーが平面上でどのように「動きの感覚」を呼び起こそうとしているのかについて探りました。イベントには140名が参加しました。

アン・マリー・ヴァンデヴェン／キュレーター
シドニー応用芸術・科学博物館（パワーハウス・ミュージアム）
ビジュアルコミュニケーション部門（アート・デザイン・写真）

主催：国際交流基金シドニー日本文化センター

共催：公益財団法人DNP文化振興財団

入場者数：1,112名

*本展は今後、パリ日本文化会館、国際交流基金トロント日本文化センターへ巡回予定です。



Photo: Docqment

A five minute walk from Sydney's Central Station is The Japan Foundation Gallery, located in the Jean Nouvel-designed One Central Park building. Here *A Sense of Movement: Japanese Sports Posters* was held from 22 October 2021 – 22 January 2022. Expertly curated by Mr. Eishi Kitazawa, Curator of ggg, Tokyo, this exhibition featured posters by six pre-eminent Japanese designers – Katsumi Asaba, Shigeo Fukuda, Ikko Tanaka, Tadanori Yokoo, Yuri Uenishi and Yusaku Kamekura. The extended labels provided insights into each artist's technical and creative processes, including their innovative use of photography. Yuri Uenishi's iconic 2001 *World Table Tennis Championships* poster highlighted the importance of embracing strong works by female designers, now and in the future.

It was wonderful to meet Mr. Kitazawa again after many years. Last time we met was when the *Balarinji: Ancient Culture, Contemporary Design* exhibition toured from Sydney to the ggg in Tokyo (2005). I joined Mr. Kitazawa for the Finissage Webinar event on 22 January 2022 to discuss the exhibition and explore how designers evoke a 'sense of movement', two dimensionally, using techniques like floating objects in space (Yusaku Kamekura's *Tokyo 1964* and Uenishi's posters) or boldly slicing the poster diagonally (Shigeo Fukuda *Victory*, 1976). 140 guests joined.

Anne-Marie Van de Ven / Former Curator,
Visual Communication (art. design. photography),
Museum of Applied Arts and Sciences
(Powerhouse Museum), Sydney

Organizer: The Japan Foundation, Sydney
Co-organizer: DNP Foundation for Cultural Promotion
Number of Visitors: 1,112
*The exhibition will be toured to La Maison de la culture du Japon à Paris and the Japan Foundation, Toronto, in the near future.

研究助成事業

Research Grants

Graphic Culture Research Grants

グラフィック文化に関する学術研究助成

2021年度、DNP文化振興財団グラフィック文化に関する学術研究助成は、国内58件、海外3件、計61件の応募があった。コロナ禍で研究の見通しがつきにくい中、昨年よりも多くの応募があったことは、大変喜ばしく思う。

審査は例年どおり、書類審査で行う一次審査と審査委員が一堂に会する二次審査の二段階で行った。討議の結果、グラフィックに関わる幅広いテーマを対象とするA部門で10件、アーカイブをテーマとするB部門で4件、計14件を本年度の新規採択研究に選出した。また、2020年度採択研究のうち継続助成希望のあった7件については、中間報告書にもとづく書類審査の結果、継続助成が承認された。

採択された研究者の皆さまには、研究が充実したものとなり、有意義な成果の発表を聞けることを期待している。

In 2021, a total of 61 applications were received for DNP Foundation for Cultural Promotion's Research Grants: 58 from within Japan and 3 from overseas. Despite the anticipated difficulties of conducting research amid the pandemic, we were very pleased to receive a greater number of applications than in the previous year. As always, the screening took place in two stages: an initial review of the application documents followed by a session attended by all selection committee members. As a result, a total of 14 new research projects were selected for funding: 10 in Category A (research on graphic design or graphic art in general) and 4 in Category B (research on graphic culture-related archives). In addition, 7 projects selected in 2020 were approved for continued support, based on evaluation of the recipients' interim reports.

We congratulate all grant recipients and look forward to hearing reports of their fruitful research.

2021年度募集要項

A部門	グラフィックデザイン、グラフィックアート全般をテーマとする学術研究
B部門	グラフィック文化に関するアーカイブをテーマとする研究
助成対象	大学、美術館等の研究機関に所属する研究者(大学院修士課程在籍者以上)、またはそれに準じる研究実績のある者(大学教授または美術館館長の推薦のある者)
助成金額	1件につき上限50万円
助成期間	2022年1月1日～2022年12月31日まで(1回を限度に次年度に継続研究が可)
申請方法	所定様式の申請書を郵送とメール
申請期間	2021年4月1日～6月19日まで

Overview of the 2021 Grant Program

Category A	Research on graphic design or graphic art in general
Category B	Research on graphic culture-related archives
Eligibility	Scholars affiliated with research institutions (universities, art museums, etc.) or individuals having corresponding research credentials
Grant amount	Maximum 500,000 yen
Grant period	January 1, 2022, to December 31, 2022. (Grants are awarded on an annual basis, with extension for a second year possible, but one time only.)
Application method	Designated application form, to be submitted by regular post and e-mail.
Application period	April 1 to June 19, 2021



応募件数

	国内	海外	計
A部門	47	2	49
B部門	11	1	12
計	58	3	61

Number of Applications

	Japan	Overseas	Total
Category A	47	2	49
Category B	11	1	12
Total	58	3	61

2021年度 採択研究(14件)

部門	テーマ	代表研究者	所属・職名	助成額
A	日本工房の対外宣伝グラフィック雑誌「CANTON」と1939年広東における日中宣伝戦	陳 鶯	京都工芸繊維大学 研究生	500,000円
A	イタリア未来派における写真受容：写真実験「フォトディナミズム」の総体解明	角田 かるあ	慶応義塾大学大学院 後期博士課程	500,000円
A	版画とグラフィックデザインの交錯と境界：1950-70年代の日本を中心に	中尾 優衣	東京国立近代美術館 主任研究員	400,000円
A	風景論争の研究：原将人の作品と批評を中心に	佐々木 友輔	鳥取大学地域学部 講師	400,000円
A	港屋絵草紙店の夢二版画にみる彫師伊上凡骨の仕事—明治絵画の筆致を製版する彫刻技法「サビ彫り」について	張 諒太	京都精華大学 博士後期課程特別研究生	420,000円
A	シビ・ピネルズの編集デザインと教育活動：20世紀米国における女性デザイナーの葛藤と超克	櫻井 かのこ	岐阜大学 大学院生	340,000円
A	国家表象としてのグラフィック：ナチ期ドイツのベルリンにおける日本の印刷文化展を中心に	江口 みなみ	筑波大学 研究員	500,000円
A	リチャード・ハミルトンのインクジェットデジタルプリントの考察：美術作品における絵画、写真、印刷の比較検討とともに	吉村 典子	宮城学院女子大学 教授	400,000円
A	グラフィックの身体性：BIPOCデザインの越境性について	グリフィス キオ		500,000円
A	ルイス・サリヴァンの装飾における社会思想の表現—装飾図案集とその草稿の分析を通して	倉田 慧一	東京大学 大学院博士後期課程	500,000円
B	坂口恭平の制作活動のアーカイブ	池澤 茉莉	熊本市現代美術館 学芸員	400,000円
B	若江漢字撮影によるヨーゼフ・ボイス・ドキュメントのアーカイブ構築と公開促進	三本松 倫代	神奈川県立近代美術館 主任学芸員	500,000円
B	松澤有作品および所蔵資料のアーカイブ化とデジタルアーカイブ公開に関する研究	木内 真由美	長野県立美術館 主査学芸員	500,000円
B	地域資源としての「染型紙」のアーカイブ化および活用についての実践的研究—大崎市岩出山および羽後街道沿いに現存する染型紙を対象として—	平岡 善浩	宮城大学 教授	500,000円

2021 Selected Research Topics

Cat.	Research Topic	Applicant	Affiliated Institution	Grant Amount (JPY)
A	Nihon Kobo's External Propaganda Magazine CANTON and the Sino-Japanese Propaganda War in Canton in 1939	Ying CHEN	Kyoto Institute of Technology	500,000
A	On the Reception of Photography During the Italian Futurism: Explaining the Experiment of "Fotodinamismo"	Kahlua TSUNODA	Keio University	500,000
A	Interactions and Boundaries between Prints and Graphic Design in Japan from the 1950s to the 1970s	Yui NAKAO	The National Museum of Modern Art, Tokyo	400,000
A	Landscape theory: with a focus on Hara Masato's works and criticisms	Yusuke SASAKI	Faculty of Regional Sciences, Tottori University	400,000
A	IGAMI Bonkotsu's work in the prints "Print Shop Minatoya"—About the carving technique "sabibori" that capture brush touch of Meiji era paintings—	Ryota CHO	Kyoto Seika University	420,000
A	Cipe Pineles's Editorial Design and Educational Activities: Difficulty and Overcome in the Life of A Female Designer in the 20th Century United States	Kanoko SAKURAI	Gifu University	340,000
A	Graphics as a National Representation: Focusing on the Exhibition of Japanese Print Culture Held in Nazi-Era Berlin	Minami EGUCHI	University of Tsukuba	500,000
A	Richard Hamilton's Inkjet Printed Digital Works: Questioning the Distinction between Paintings, Photographs, and Prints	Noriko YOSHIMURA	Miyagigakuin Women's University	400,000
A	BIPOC Design Experience	Kio GRIFFITH		500,000
A	Expressions of Louis Sullivan's Thought in Ornament	Keiichi KURATA	The University of Tokyo	500,000
B	Archive of Kyohei Sakaguchi's creation days	Mari IKEZAWA	Contemporary Art Museum, Kumamoto	400,000
B	The Archiving of Wakae Kanji's Photographic Documentation of Joseph Beuys	Tomoyo SANBONMATSU	The Museum of Modern Art, Kamakura & Hayama	500,000
B	Research on the archiving and digital archiving of Matsuzawa Yutaka's works and materials and making them available on the web	Mayumi KINOUCHI	Nagano Prefectural Art Museum	500,000
B	Practical research on archiving and utilization of "Dyeing pattern paper" as a local resource—Target at Iwadeyama (Osaki City) and along Hago Kaido—	Yoshihiro HIRAOKA	School of Project Design, Department of Value Creating Design, Miyagi University	500,000

2020年度 採択研究継続助成 (7件)

部門	テーマ	代表研究者	所属・職名	助成額
A	16世紀にキリスト教宣教師がもたらした銅版画の役割	蛭川 順子	関西大学 東西学術研究所 客員研究員	400,000円
A	戦後フランスの複製技術による芸術の共有化に関する研究 —フォートリエの「複数原画」を手掛かりに	木水 千里	早稲田大学 助教	500,000円
A	チェッコリ絵における逆遠近法の解釈と、 その造形的研究に基づくデザイン展開	林 東煥	九州大学大学院 芸術工学府 大学院博士 後期課程	400,000円
A	近代日本における〈学校用民間教育掛図〉の図像学的研究	牧野 由理	埼玉県立大学 保健医療福祉学部 准教授	500,000円
A	戦後日本のデザインにおける勝見勝の国際的役割	碓井 麻央	富山県美術館 学芸員	500,000円
A	牧野文庫コレクションにみる日本のボタニカルアート研究 —江戸時代の植物画と牧野富太郎植物解剖図の造形特徴比較—	大友 邦子	筑波大学 准教授	400,000円
B	金属活字における平仮名・片仮名の字形一覧の作成と研究	石崎 康子	横浜市歴史博物館 主任学芸員	400,000円

2021 Continuation Grants (2020 Selected Research Topics)

Cat.	Research Topic	Applicant	Affiliated Institution	Grant Amount (JPY)
A	The Functions of the Engravings brought to Japan by Christian Missionaries in the 16th Century	Junko NINAGAWA	Visiting Researcher, The Institute of Oriental and Occidental Studies, Kansai University	400,000
A	A study on the universalization of art through mechanical reproduction in post-war France: from the point of view of Fautrierr's "Les Originaux Multiples".	Chisato KIMIZU	Assistant Professor, Waseda University	500,000
A	A study on the interpretation of the reverse perspective method of Chaekgeori painting and the development of design based on its formative research	Donghwan IM	Graduate Student Doctor's Cours, Graduate School of Design, Kyushu University	400,000
A	Iconography on Private Company Wall Charts for Schools in Modern Japan	Yuri MAKINO	Associate Professor, School of Health and Social Services, Saitama Prefectural University	500,000
A	Masaru Katzme's Role for Japanese Design after World War II	Mao USUI	Associate Curator, Toyama Prefectural Museum of Art and Design	500,000
A	Japanese Botanical Art Research in Makino Bunko Collection -Comparison of Drawing Features between Botanical arts in the Edo Period and Tomitaro MAKINO's Botanical Scientific Illustration-	Kuniko OTOMO	Assistant Professor, University of Tsukuba	400,000
B	A Study on the List of Hiragana and Katakana Characters in Metal Typefaces.	Yasuko ISHIZAKI	Senior Curator, Yokohama History Museum	400,000

研究成果報告会とDNP文化振興財団学術研究助成紀要

2019年度と2018年度の採択研究者について、コロナ禍による研究遂行の大幅な遅れを考慮し、助成期間を約1年延長する特例措置を決定したため、2021年に研究成果報告会の開催と『DNP文化振興財団学術研究助成紀要』の発刊は次年度に見送った。

Research Results Presentations and The Bulletin of Graphic Culture Research Grants

In recognition of the significant delays encountered by grantees from 2018 and 2019 amid the pandemic, a decision was taken to extend their research periods by approximately one year. As a result, in 2021 presentations of these grantees' research results and publication of the *Bulletin of Graphic Culture Research Grants* were postponed by a year.

2021-22 Financial Support Activities

2021-22年度助成実績

1	対象 第32回すかがわ国際短編映画祭 主催 すかがわ国際短編映画祭実行委員会／ 須賀川市教育委員会 年月 2021/10 金額 30,000円 備考 短編映画フェスティバルおよびコンペ	Target 32nd Sukagawa International Short Film Festival Organizers Sukagawa International Short Film Festival Executive Committee, Sukagawa Board of Education Date October, 2021 Amount JPY 30,000 Remarks Short film festival and competition
2	対象 第32回田善顕彰版画展 主催 須賀川商工会議所青年部／ 須賀川市教育委員会後援 年月 2022/2 金額 50,000円 備考 須賀川出身の江戸期の銅版画家、亜欧堂田善(あおう どうでんぜん)顕彰を目的とする市内小中学生対象の版 画コンクール	Target The 32nd Denzen Print Award Exhibition Organizers Sukagawa Chamber of Commerce Youth Division, Sukagawa Board of Education Date February, 2022 Amount JPY 50,000 Remarks Print contest for Sukagawa elementary and junior high school students aimed at spreading recognition of copper plate print artist and Sukagawa native Aodo Denzen (1748-1822).



TDC 2021

会期 = 2021年4月1日 - 5月29日
 (新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言発出のため4月26日で終了)
 受賞作家 = ○グランプリ = 松本弦人 ○ブックデザイン賞 = OK-RM (Oliver Knight + Rory McGrath) ○タイプデザイン賞 = Jia Yang + Yichao Xu + Yin Qiu ○RGB賞 = 飯沢未央 + 萩原俊矢 + 畑ユリエ ○TDC賞 = M/M (Paris), Dafi Kühne, 川辺圭, 岡崎智弘, Henrik Kubel + Scott Williams, Liu Zhao + Zhan Huode + Weng Donghua ○特別賞 = 菊地敦己, 服部一成
展示概要 = 先端的なタイポグラフィ作品が一堂に会する国際コンペティション「東京TDC賞」(東京タイプディレクターズクラブ)の成果を紹介するTDC展。2020年秋の公募に寄せられた3,750点(国内1,947、海外1,803)の応募作から厳正な審査によって選ばれた「東京TDC賞2021」。受賞12作品をはじめ、ノミネート作品、優秀作品を含めた約122点のタイポグラフィカルな作品を展示した。

Tokyo Type Directors Club Exhibition 2021

Dates = April 1 - May 29, 2021
 (Note: The exhibition closed April 26 in response to the Japanese Government's declaration of a state of emergency to prevent the spread of the coronavirus.)
Award Winners = Grand Prize: Gento Matsumoto. Book Design Prize: OK-RM (Oliver Knight + Rory McGrath). Type Design Prize: Jia Yang + Yichao Xu + Yin Qiu. RGB Prize: Mio Iizawa + Shunya Hagiwara + Yurie Hata. TDC Prize: M/M (Paris), Dafi Kühne, Kei Kawabe, Tomohiro Okazaki, Henrik Kubel + Scott Williams, Liu Zhao + Zhan Huode + Weng Donghua. Special Prize: Atsuki Kikuchi, Kazunari Hattori.
Exhibition Overview = The 2021 Tokyo Type Directors Club Exhibition introduced the results of an international competition organized by the Tokyo Type Directors Club (TDC) that brought together an array of today's most advanced works of typography. Award winners were selected from a pool of 3,750 open entries submitted starting in autumn 2020: 1,947 from within Japan and 1,803 from overseas. In all, approximately 122 works of typography were on display: not only the 12 award-winning works, but also works that reached the nomination stage as well as other outstanding entries.



Design: Jianping He

Sports Graphic スポーツ・グラフィック

会期 = 2021年6月8日 - 7月7日
監修・会場構成 = 浅葉克己, 浅葉球
俳句 = 榎本バソンの巻
協力 = 二戸市シビックセンター・福田駿雄デザイン館, 一般社団法人日本肢体不自由者卓球協会
展示概要 = 1年間延期された東京オリンピック・パラリンピックを前に、依然として新型コロナウイルスの感染状況に終息点が見えない状況の中、モヤモヤとした気持ちを少しでも前向きな明るい方向へと転換すべく企画された展覧会。テーマは「スポーツ」。日本を代表するグラフィックデザイナーたちが、「スポーツの「動きの感覚」を呼び起こすような「高揚感」や「迫力」、構成の「美しさ」や斬新な「アイデア」、さらには批評的な「ユーモア」をいかに作品として表現してきたのか。1972年の札幌オリンピックから現在までの「スポーツ・グラフィック」の秀作の数々を一堂に集めて展示をした。ポスターや広告、イラストレーションや立体作品に加え、それらの作品から立ち昇る「世界観」を、榎本バソンの巻氏によって「俳句」にしてもらい、合わせて紹介した。会場にはパラ卓球選手から見える世界を再現した変型卓球台も設置、幅広いスポーツの世界を感じる内容となった。

Sports Graphic Exhibition

Dates = June 8 - July 7, 2021
Supervision, Exhibition Composition = Katsumi Asaba, Q Asaba
Haiku = Ryoichi Bason Enomoto
Cooperation = Ninohe Civic Center Fukuda Shigeo Design Hall, Japan Para Table Tennis Association
Exhibition Overview = This exhibition held just prior to the start of the Tokyo Summer Olympics. Organized around the general theme of "sports," the exhibition showed how Japan's leading graphic designers through the years have expressed the excitement and physical power of sports, the beauty with which they have constructed their works, the freshness of their ideas, and the humor imbued in their graphic critiques. On display were a large selection of outstanding sports-themed works spanning from the 1972 Winter Olympics in Sapporo to the present. In addition to posters, advertisements, illustrations and installations, the exhibition was augmented by haiku poems specially penned by Ryoichi Bason Enomoto to express the "worldview" these works encapsulate. For this event, a specially modified tennis table was installed in the gallery to reproduce how a Paralympic athlete would see the world. In these varied ways, the SPORTS GRAPHIC exhibition enabled visitors to experience the myriad worlds evoked by all kinds of sports.



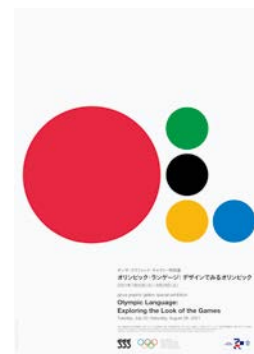
Design: Katsumi Asaba / Illustration: Hikaru Ichijo

オリンピック・ランゲージ：デザインでみるオリンピック

会期 = 2021年7月20日 - 8月28日
主催 = 公益財団法人DNP文化振興財団
共催 = オリンピック文化遺産財団, 大日本印刷株式会社
協力 = 日本スポーツ振興センター, 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会
後援 = 日本オリンピック委員会
展示概要 = 東京オリンピックに合わせて開催した特別展。2018年にスイスのローザンヌにあるオリンピック博物館で開催された「Olympic Language: Exploring the Look of the Games」の巡回展で、デザインの面でも画期的だった1964年東京、1968年メキシコシティ、1972年ミュンヘン、1994年リレハンメル、2004年アテネの5つの大会に焦点を絞り、各大会のデザインがどのように統一感と個性を表現してきたかを紹介した。各大会それぞれに工夫を凝らした特色があるが、特に一階の1964年東京大会の展示では、亀倉雄策のエンブレムやポスター、画期的だったビクトグラムなど、日本のグラフィックデザイン史においても重要な作品の数々が並び注目を集めた。

Olympic Language: Exploring the Look of the Games

Dates = July 20 - August 28, 2021
Organizer = DNP Foundation for Cultural Promotion
Co-organizer = Olympic Foundation for Culture and Heritage
Co-sponsor = Dai Nippon Printing Co., Ltd.
Cooperation = The Tokyo Organising Committee of the Olympic and Paralympic Games, Japan Sport Council
Support = The Japanese Olympic Committee
Exhibition Overview = This special exhibition, held to coincide with the Tokyo Olympic Games, had originally been mounted at the Olympic Museum in Lausanne, Switzerland, in 2018. It focused on five editions of the Games that were epoch-making in terms of design - Tokyo 1964, Mexico City 1968, Munich 1972, Lillehammer 1994, and Athens 2004 - and showed how the designs adopted for these events expressed both a sense of overall unity and individual identity. While works created for each of the five featured Olympics were distinctive in their own way, the display on the 1964 Tokyo Olympics, shown on the ground floor, garnered special attention for its many works of great importance in the history of graphic design in Japan, including Yusaku Kamekura's Olympic emblem, posters and innovative pictograms.



Design: groovisions

葛西薫展 NOSTALGIA

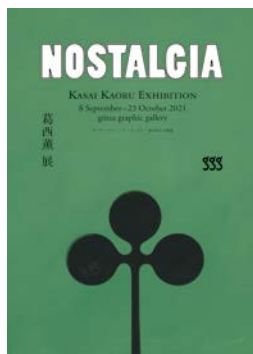
会期 = 2021年9月8日 - 10月23日

協力 = 株式会社サン・アド、凸版印刷株式会社
作家略歴 = 1949年北海道札幌市生まれ。文華印刷、大谷デザイン研究所を経て、1973年サン・アド入社。現在同社顧問。サントリウーロン茶、ユナイテッドアローズ、とらや、TORAYA AN STANDなどの広告制作およびアートディレクションのほか、CI・サイン計画、映画・演劇のグラフィック、タイトルワーク、ブックデザインなど、活動は多岐にわたる。東京ADCグランプリ、原弘賞、毎日デザイン賞、亀倉雄策賞、など受賞。
展示概要 = 葛西氏が、その語感が好きだという「NOSTALGIA」。望郷、郷愁などの意味があるが、葛西氏はそれを「論理の外にある意味のないものへの興味。その深層にあるもの」であり、それは手作業から生まれるという。定規を使うこと、墨を磨ること、絵具を絞り出すこと、鉛筆を削ることなど……。その「NOSTALGIA」をテーマにした新作の数々を中心に、ブックデザイン、プロダクト、オブジェなど、多面的な創作活動を紹介。現代社会が喪失しつつある「ユーモア」と「ペーソス」、「知性」と「無邪気」など、葛西氏の思い描く「ノスタルジアの世界」を体感できる展示となった。

Kasai Kaoru Exhibition: NOSTALGIA

Dates = September 8 - October 23, 2021

Cooperation = SUN-AD Company Limited, Toppan Inc.
Artist Profile = Born in Sapporo, Hokkaido Prefecture in 1949, he joined SUN-AD Company Limited in 1973 after stints working at Bunika Printing Co., Ltd. and Ohtani Design. He currently serves as advisor at SUN-AD. His creative activities span a wide range, including advertising and art direction for Suntory Oolong Tea, United Arrows, Toraya Confectionery, as well as corporate identity and signage, book design, and graphics and title design for films and theater plays. Major awards received include the Tokyo ADC Grand Prix, Hiromu Hara Memorial Prize, Mainichi Design Award, and the Yusaku Kamekura Design Award.
Exhibition Overview = Kasai Kaoru titled his exhibition "NOSTALGIA," a word he chose because he likes the way it sounds. In its conventional sense, "nostalgia" conveys a longing for places or times gone by; but to Kasai, nostalgia connotes "an interest in things that are meaningless and defy logic - and in what lies deep within them." He says that, for him, nostalgia derives from designing manually. This exhibition introduced the many facets of Kasai's creative activities, centering on a large number of his new works, and also including his creations in book design, product design and artistic objects. Visitors were treated to a first-hand look into Kasai Kaoru's world of nostalgia: a world filled with the humor, pathos, intelligence and innocence that are gradually being lost in our modern-day society.



Design: Kaoru Kasai

日本のアートディレクション展2020-2021

会期 = 2021年11月1日 - 30日

受賞作家 = ○グランプリ = 佐藤可士和 ○ADC
会員賞 = 佐藤雅彦 + 佐藤匡、原研哉 + 上田義彦
+ 深尾大樹 + 坂本龍一、永井裕明 + 石岡怜子
○原弘賞 = 井上嗣也 + 稲垣純 + ウィン・シャ
<以下G8にて展示> ○ADC賞 = 香取有美 + 泉
田岳 + 東畑幸多 + 太田恵美 + 水本晋平 + 瀧本幹
也、川辺圭 + 中野仁嘉 + 世羅孝祐、林俊美、後
藤大 + 宮崎晋 + 石井雄樹、高橋秀明 + 江口昌宏
+ 竹内スグル + 諏訪徹 + 吉田多麻希、野間真吾、
佐々木拓 + 金井あき、西川友美、木住野彰悟、
古谷萌、古川雅博 + 秀島康修 + 近藤良隆 + 和田
佳菜子、木住野彰悟、藤田佳子 + 倉宏 + プレ
ックスボレックス

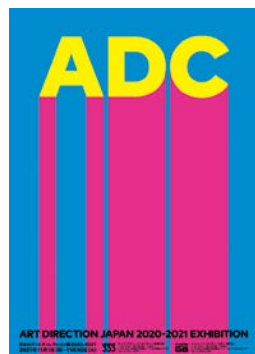
展示概要 = 昨年はコロナ禍により開催されなかつたため2年ぶりの日本のアートディレクション展。今年は2019年5月から2021年4月までの2年間に発表、使用、掲載された約10,000点の応募作の中から、ADC全会員81名による厳正な審査によりADC賞が選出された。本展では受賞作品と優秀作品を、ggg [会員部門]、G8 [一般部門]の2会場で紹介した。

Art Direction Japan 2020-2021 Exhibition

Dates = November 1 - 30, 2021

Award Winners = Grand Prize: Kashiwa Sato. ADC Members Award: Masahiko Sato + Masashi Sato; Kenya Hara + Yoshihiko Ueda + Taiki Fukao + Ryuichi Sakamoto; Hiroaki Nagai + Ryoko Ishioka. Hara Hiromu Award: Tsuguya Inoue + Jun Inagaki + Wing Shya. ADC Award (shown at Creation Gallery G8): Yumi Katori + Takeshi Izumida + Kota Tohata + Megumi Ota + Shimpei Mizumoto + Mikiya Takimoto; Kei Kawabe + Noriyoshi Nakano + Kosuke Sera; Toshimi Hayashi; Dai Goto + Susumu Miyazaki + Yuki Ishii; Shumei Takahashi + Masahiro Eguchi + Suguru Takeuchi + Toru Suwa + Tamaki Yoshida; Shingo Noma; Taku Sasaki + Aki Kanai; Tomomi Nishikawa; Shogo Kishino; Moe Furuya; Masahiro Furukawa + Yasunobu Hideshima + Yoshitaka Kondo + Kanako Wada; Shogo Kishino; Kako Fujita + Hiroshi Ichikura + Blexbolex

Exhibition Overview = This exhibition featured winners of Tokyo ADC Awards, selected by 81 members through a rigorous screening process, from among some 10,000 entries of works released, used, or published over the two years spanning from May 2019 to April 2021, last year's event having been canceled due to the COVID-19 pandemic. Besides the prizewinning works, other outstanding works were also on view. Works by ADC members were displayed at ggg, and entries submitted by non-members were featured at Creation Gallery G8.



Design: Kashiwa Sato

ソール・スタインバーグ シニカルな現実世界の変換の試み

会期 = 2021年12月10日 - 2022年3月12日

監修 = 矢萩喜徳

協力 = ソール・スタインバーグ財団、マーズ画廊、和田誠事務所

作家略歴 = 1914年ルーマニア生まれ。パレストロ大学で哲学と文学を学んだ後、イタリアのミラノ王立工科大学（現ミラノ工科大学）で建築を専攻し1940年卒業。1941年、ファシスト政権下の反ユダヤ的なイタリアを逃れアメリカに渡る。戦後はニューヨークに居を構え、『The New Yorker』誌の仕事を50年以上にわたり手がけた。知的で洗練されたスタイルで、漫画(cartoon)の世界に革命を起こし、美術の領域にグラフィックを取り入れた第一人者。

展示概要 = ソール・スタインバーグ財団から寄贈いただいたポスター、リトグラフ、エッチング、木版画など62点、和田誠事務所より寄贈、貸出いただいたポスター7点、フランスのマーズ画廊の作品集5冊、さらにドローイングを中心とした代表作の複製作品などを含む、約280点の作品を一堂に展示。最初期の1940年代から晩年まで、さまざまなスタイルの作品を幅広く網羅する、日本初の大規模な個展となった。

Saul Steinberg: Lines that Transform the Real World

Dates = December 10, 2021 - March 12, 2022

Supervision = Kijuro Yahagi

Cooperation = The Saul Steinberg Foundation, Galerie Maeght, Makoto Wada Office

Artist Profile = Born in Romania in 1914. He studied philosophy and literature at the University of Bucharest, and then enrolled at what today is known as the Polytechnic University of Milan, where he majored in architecture, graduating in 1940. In 1941 he emigrated to the United States to flee the anti-Semitism rampant under Italy's Fascist government. After the war he settled in New York City, and over the next half-century his drawings were a regular feature of *The New Yorker*. His intellectual and refined style sparked a revolution in the realm of cartoons, and he was a leading force in incorporating graphic design into the realm of art.

Exhibition Overview = This exhibition brought together approximately 280 works in total, including: 62 posters, lithographs, etchings, woodblock prints, etc. donated by the Saul Steinberg Foundation; 7 posters donated or loaned by Makoto Wada Office; 5 collections of his works published by Galerie Maeght; and reproductions of his drawings and other works. As the first large-scale exhibition in Japan dedicated solely to Saul Steinberg, the works on show encompassed a broad spectrum spanning from his early productions of the 1940s through his output in later years.



Design: Kijuro Yahagi

ddd 展覧会概要

ヘルムート シュミット タイポグラフィ： トライ トライ トライ

会期 = 2021年4月3日 - 7月10日
後援 = ゲーテ・インスティトゥート大阪・京都、在日スイス大使館
協力 = 松陽産業株式会社
展示企画 = 阿部宏史 (print gallery tokyo)、ニコールシュミット (helmut schmid design)、辰馬知佳子
展示デザイン = 長谷川哲也 (H TE ARCHITECTS)
作家略歴 = 1942年オーストリア生まれ。西ドイツで植字工見習い後、スイスのAGS (バーゼル工芸学校) で、エミール・ルーダーのもとで学ぶ。バーゼル、西ベルリン他、世界各地で働いた後、1977年より大阪で、大塚製薬の医薬パッケージやボカリスエット、IPSAや資生堂MAQuillAGEのブランドアイデンティティ等、多数のデザインを手掛ける。同時に「タイポグラフィック・リフレクション」等の自主出版活動も行う。2000年より2010年まで神戸芸術工科大学、2006年から1年半はソウルの弘益大学校にて教鞭をとる。2018年逝去。
展示概要 = シュミット氏の初来日は1966年。一度はヨーロッパへ戻るが、1977年に再び来日。以来、情報伝達とフリーフォルムという二元性と向き合いつつデザイン活動を行い、商業作品も個人的な作品も、アプローチは違えど分け隔てなく取り組む。本展では、氏の有名無名の作品やその制作プロセスを、彼がその探求の中で出会った人々の面影と共に辿った。最後までごく個人的でありつづけた、人間味あふれる彼のタイポグラフィの軌跡を展覧。

try try try: helmut schmid typography

Dates = April 3 - July 10, 2021
Support = Goethe-Institut Osaka Kyoto, Embassy of Switzerland in Japan
Cooperation = Shoyo Sangyo Co., Ltd.
Exhibition Planning = Hirofumi Abe (print gallery tokyo), Nicole Schmid (helmut schmid design), Chikako Tatsuuma
Exhibition Design = Tetsuya Hasegawa (H TE ARCHITECTS)
Artist Profile = Born in Austria in 1942, Helmut Schmid completed an apprenticeship in typesetting in West Germany. He studied under Emil Ruder and others at AGS in Switzerland. After passing through Basel, West Berlin, and other parts of the world, he finally settled in Osaka in 1977. His work spans across various fields including editorial design, packaging of ethical drugs, and visual identity for brands such as Pocari Sweat sports drink. He taught at Kobe Design University, and Hongik University in Seoul. He passed away in 2018.
Exhibition Overview = He came to Japan for the first time in 1966. He returned to Europe for a time but opted to return to Japan in 1977. From that time, Schmid devoted himself to design work, always addressing its duality as a conveyance of information and free form. Although he embraced different approaches to commercial work and to his private work, he devoted himself equally to both realms. This exhibition featured a multitude of his works, both those well known and obscure, and also described his creative processes and the people he encountered during his artistic explorations. Throughout his career, Schmid's typography, though highly individualistic, exuded great warmth.



Design: Nicole Schmid

小島 武展 夢ひとつ

会期 = 2021年7月24日 - 9月25日
企画監修 = 平野甲賀、平野公子
タイトルロゴ = 平野甲賀
告知物、展示デザイン = 古本実加、吉良幸子
作家略歴 = 1940年満州生まれ。北九州に引き上げ後、高校まで博多で映画三昧の日々を過ごす。上京後、桑沢デザイン研究所に通い、1962年よりフリーのイラストレーターとして活躍。音楽、演劇、広告、出版と多彩なジャンルのイラストレーションとグラフィックを手がけた。1993年には第24回講談社出版文化賞(さしえ賞)受賞。主な仕事に、アートシアター新宿文化、小室等、井上陽水、高田渡、「Number」表紙、「話の特集」、「ニューミュージック・マガジン」「小説新潮」など多数。2009年逝去。
展示概要 = 平野甲賀氏曰く、今回、彼が残した膨大な作品を整理する中、とくに気づいたことは、漫画のタッチの新鮮さ、描き文字のすばらしさ。本展ではスライド、ライトテーブルで作品を映像としても展覧。ひとつのモチーフを繰り返し描いて別の背景と組み合わせる独特の手法や、鉛筆画を何度も描き分け、コピーを重ねながら墨色を色濃くしていく、或いは描いたイラストを切り分け、別の絵の上にカラーージュを重ねていくといった創作過程についても紹介。

Takeshi Kojima: One Dream

Dates = July 24 - September 25, 2021
Exhibition Planning = Kouga Hirano, Kimiko Hirano
Title Logo Design = Kouga Hirano
Publicity Materials, Exhibition Design = Mika Furumoto, Sachiko Kira
Artist Profile = Born in Manchuria in 1940. He Studied Kuwasawa Design School. He started working freelance in 1962, and during his long career Kojima created illustrations and graphics spanning a wide variety of genres, including music, the stage, advertising, and publishing. In 1993 he was presented with the Kodansha Publishing Culture Award. His major works include projects with Art Theatre Shinjuku Bunka and cover artwork for musicians. His artwork was also featured on the cover of Number, and in publications such as Hanashi no Tokushu, New Music Magazine and Shosetsu Shincho. He passed away in 2009.
Exhibition Overview = Kouga Hirano, in sorting through this vast collection in preparation for this exhibition, says that he was drawn especially to the liveliness of Kojima's caricatures and the brilliance of his hand-drawn lettering. For this exhibition, his works were displayed through slide projection and as images viewed on light boxes. Visitors were also introduced to his various unique creative processes, for example: how he drew a particular motif in repetition and combined them with different backgrounds; and how he created multiple pencil drawings and overlapped them to achieve a progressively deeper black color.



Design: Mika Furumoto

石岡瑛子 デザインはサバイブできるか

会期 = 2021年10月16日 - 12月18日
監修 = 石岡瑛子、河尻亨一
デザイン = 永井裕明 (N.G.inc.)
展示構成 = 中沢仁美 (シービーケー)
展示映像 = 加藤貴大 (motion graphic director) + 熊本直樹 (design director) + EDP graphic works (motion graphic design creation)
作家略歴 = 東京藝術大学卒。1961年資生堂宣伝部入社。前田美波里起用のポスターなどで頭角を現し独立。70年代にはパルコ、角川文庫など時代を揺るがす数々のキャンペーン、ファッションショーの演出、書籍デザイン他を手がける。80年代初頭に活動拠点をニューヨークに移し、美術及び意匠デザインなど、ボーダーレスに仕事の領域を広げ、ニューヨーク批評家協会賞、グラミー賞、アカデミー賞を受賞するなど世界的評価を得る。2012年逝去。
展示概要 = gggから巡回となる本展は、資生堂やパルコなどの広告キャンペーンの名作をはじめ、映画や演劇のポスター、レコードジャケット、自書を含めた多様なブックデザイン他、主に1980年代のニューヨークへ渡るまでの仕事に焦点を当てた。制作過程の一環を垣間見ることのできる校正指示やアイデアアラフなど、クリエイティブに対する情熱を伝える作品・資料を、石岡瑛子氏の言葉とともに展開。

Survive - Eiko Ishioka

Dates = October 16 - December 18, 2021
Direction = Riyoko Ishioka, Koichi Kawajiri
Design = Hiroaki Nagai (N.G.inc.)
Exhibition Composition = Hitomi Nakazawa (CBK Co., Ltd.)
Exhibition Visuals = Kidai Kato (motion graphic director) + Naoki Kumamoto (design director) + EDP graphic works (motion graphic design creation)
Artist Profile = Eiko Ishioka graduated from Tokyo National University of Fine Arts and Music (now, Tokyo University of the Arts). She joined Shiseido as a member of their advertising division in 1961. After that, she opened her own agency. In the 1970s, she created and produced a number of groundbreaking ad campaigns. After relocating her base to New York in the early 1980s, she further expanded the scope of her work to areas such as set and costume design, receiving international acclaim such as a Grammy Award and an Academy Award. She passed away in 2012.
Exhibition Overview = This exhibition covered an expansive range of Eiko Ishioka's creative work. Included were her famed works created for ad campaigns for Shiseido and PARCO, film and theater posters, record jacket designs, and book designs. The exhibition focused on her works made prior to her move to New York in the early 1980s. Also on display were works and materials demonstrating Ishioka's creative passion, especially her editorial instructions and rough sketches offering a glimpse into her creative process. The gallery was also decorated with numerous quotes from her many years working in creative design.



Design: Hiroaki Nagai

Review of CCGA 2021

CCGA 展覧会概要

鳥海 修

「もじのうみ：水のような、空気のような活字」

会期 = 2022年1月15日 - 3月19日

協力 = 株式会社SCREENグラフィックソリューションズ、株式会社モリサワ、有限会社字游工房
アートディレクション = 三重野龍、岡村優太、廣田碧
キュレーション = 堤拓也

会場デザイン = 加藤正基

作家略歴 = 1955年山形県生まれ。多摩美術大学卒業後、1979年写研に入社。1989年字游工房を鈴木勉、片田啓一の3名で設立。1998年~2019年まで同社代表取締役。SCREENグラフィックソリューションズのヒラギノシリーズ、こぶりなゴシック等を委託制作。自社ブランドの游書体ライブラリーの游明朝体、游ゴシック体などベーシック書体を中心に100以上の開発に携わる。
展示概要 = 数多くの書体制作に関わる一方で、これまで京都精華大学や武蔵野美術大学、私塾「文字塾」などで活字デザインに関する教育や指導に当たってきた。氏の教え子3名がアートディレクションを担当し、より感覚的かつ身体的に書体設計のことがわかる空間を作った。タイトル通り、ギャラリー内に所狭しと並べられた「もじ」の「うみ」に溺れることで、「みず」や「空気」といった、普段は意識することのない、私たちが必要としている日本固有の文字について、改めて考える機会を創出。

Osamu Torinomi Making Type: Like water, Like Air

Dates = January 15 - March 19, 2022

Cooperation = SCREEN Graphic Solutions Co., Ltd., Morisawa Inc., JIYUKOBO Ltd.

Art Direction = Ryu Mieno, Yuta Okamura, Midori Hirota
Curation = Takuya Tsutsumi

Exhibition Planning = Masaki Kato

Artist Profile = Born in Yamagata Prefecture in 1955. After graduating from Tama Art University, in 1979 he joined Sha-Ken Co., Ltd. In 1989, he founded JIYUKOBO Ltd. together with Tsutomu Suzuki and Keiichi Katada, and he served as its president from 1998 to 2019. He was commissioned to create typefaces such as the Hiragino series and Koburina Gothic. He has also been involved in the development of more than 100 basic and other typefaces for his own brand, including Yu Mincho and Yu Gothic.

Exhibition Overview = Osamu Torinomi has been involved in the creation of numerous typefaces. At the same time, he has devoted to education and guidance at universities as well as at his own private school, Mojijuku. This exhibition's art direction was performed by three of his pupils, who created a space in which visitors can acquire a more sensory and physical understanding of typeface design. The show offered an opportunity to focus renewed awareness on Japan's unique and indispensable writing systems - something we Japanese normally take for granted, as we do with water and air.



Design: Ryu Mieno

つながりのデザイン：
DNPグラフィックデザイン・
アーカイブコレクション

Ties and Bonds in Graphic Design:
DNP Graphic Design Archives Collection

会期 = 2021年3月2日 - 6月6日
Dates = March 2 - June 6, 2021



Design: Yu Kuramoto / Helvetica Design inc.

どこか遠くへ：
グラフィックにみる旅のかたち

Wanderlust in Graphics

会期 = 2021年6月12日 - 9月5日
Dates = June 12 - September 5, 2021



Design: Shinji Kamei / STORK

線を引く：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.34

Drawing Lines: 34th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection

会期 = 2021年9月11日 - 12月19日
Dates = September 11 - December 19, 2021



1986

- 3月 1回 大橋正展 野菜のイラストレーション
 4月 2回 福田繁雄展 Illustric412
 5月 3回 奥村毅正展 燦々彩譜
 6月 4回 秋山育展 ビクチャーレリーフ
 7月 5回 1986 ADC展
 8月 6回 アートワークス展Ⅰ The World is Art.
 9月 7回 佐藤晃一展 箱についてー2
 10月 8回 粟津潔展 エノタメノジブンカクメイ
 11月 9回 追悼・ハーバート・バイヤー展
 ヴィジュアル・コミュニケーションのバイオニア
 12月 10回 K2 Live!展 ケイを知らずにツーといひな。

1987

- 1月 11回 いろはの絵展 辻修平と
 The CA WorkshopによるCGカリグラフィ
 2月 12回 花の万博+博覧会のシンボルマーク展
 3月 13回 藤幡正樹展 geometric love
 4月 14回 松永真 毎日デザイン賞受賞記念展
 5月 15回 安西水丸 二色
 6月 16回 ルウ・ドーフスマンとCBSの
 クリエイティブワークス展
 7月 17回 1987 ADC展
 8月 18回 アートワークス展Ⅱ Rest in Peace
 9月 19回 五十嵐威暢の立体数字展
 10月 20回 青葉益輝プリンティングアート展 Graphically
 11月 21回 オルガー・マチスのポスター展 意外性の真実
 12月 22回 ミルトン・グレイザー展 イメージの魔術師

1988

- 1月 23回 木村勝パッケージングディレクション展
 リンゴになった箱と動詞になった箱
 2月 24回 谷口広樹展 猿の記憶
 3月 25回 銀座百点 表紙原画展:創刊400号記念
 4月 26回 吉田カツ・描き下し刷り下し展
 5月 27回 AGI '88 Tokyo展
 世界のグラフィックデザイン
 6月 28回 イッセイ・ミヤケのポスター展 I.I.I. at GGG
 7月 29回 1988 ADC展
 8月 30回 アートワークス展Ⅲ Peace by Piece
 9月 31回 情報ポスター・リクルート展
 10月 32回 早川良雄「女」原画展
 11月 33回 仲條正義展 NAKAJOISH
 12月 34回 スタシスのポスターとイラストレーション展
 存在の深淵に迫る東欧からのメッセージ

1989

- 1月 35回 ショッピング・バッグ・デザイン
 2月 36回 矢萩喜徳展
 3月 37回 Texture 首川魔鬼子+田原桂一+山岡茂
 4月 38回 タナカノリユキ展 Gokan-都市の表層
 5月 39回 オトル・アイヒャー展
 現代哲学の先駆者 W.フォン・オッカム
 6月 40回 操上和美展 Photographis
 7月 41回 若尾真一郎展 Wakao Collection
 8月 42回 アートワークス展Ⅳ 百花繚乱
 9月 43回 永井一正展
 10月 44回 Europalia '89 Japan
 新作ポスター 12人展
 11月 45回 チャールズ S. アンダーソン最新作品展覧会
 12月 46回 清原悦志の仕事 オーマージュ

1990

- 1月 47回 秋月繁展 遊びの箱
 2月 48回 菊地信義 装幀の本「棚」
 3月 49回 原田雄夫木版画展 馬
 4月 50回 田中一光グラフィックアート植物園

- 5月 51回 山城隆一 猫のいないイラスト展
 6月 52回 松井桂三3D展
 7月 53回 寺門孝之展 遺伝子導入天使
 8月 54回 アートワークス展V 東京標本箱1990
 9月 55回 田原桂一展 光の香り
 10月 56回 浅葉克己の新作展 アジアの文字
 11月 57回 伊勢亮也展 イメージのマカロニ
 12月 58回 蓬田やすひろ展 ビープル

1991

- 1月 59回 舟橋全二展
 2月 60回 太田徹也のダイヤグラム
 3月 61回 ペア・アーノルディ展
 Posters, Prints and Painting
 4月 62回 澤田泰廣展 P2 [Painting×Printing]
 5月 63回 新井苑子展 インスピレーションを描く
 6月 64回 Communication & Print
 新作ポスター 10人展
 7月 65回 オブジェ・ブック展
 中垣信夫+中垣デザイン事務所
 8月 66回 アートワークス展VI
 "Bacteriart" Messages from Dream Island
 10-11月 67回 Trans-Art 91
 12月 68回 1991 ADC展

1992

- 1月 69回 アイヴァン・チャマイエフ展 コラーージュ
 2月 70回 立花ハジメ初の個展 ape-MAN
 3月 71回 第4回東京 TDC展
 4月 72回 ヘンリック・トマシェフスキ展
 5月 73回 シーモア・クワスト展 メタル彫刻
 6月 74回 鹿目尚志展 BOX・XX
 7月 75回 中村誠 個展
 8月 76回 リック・バリセンティ展
 9月 77回 葛西薫展 'AERO'
 10月 78回 瀬本唯人、宇野亜喜良、和田誠、
 山口はるみ展
 11月 79回 ボール・ランド展
 12月 80回 フロシキ展

1993

- 1月 81回 小島良平展 Tropica Grafica
 2月 82回 稲越功一展 アウト・オブ・シーズン
 3月 83回 1992 ADC展
 4月 84回 第5回東京 TDC展
 5月 85回 U.G.サトーのポスター展 "Freedom"
 6月 86回 オマーージュ 向秀男展
 7月 87回 文字からのイマジネーション
 8月 88回 現代香港のデザイン8人展
 9月 89回 勝井三雄展 光の国:夜と昼の狭間に
 10月 90回 1993 Illustration 4
 安西水丸・河村要助・矢吹申彦・湯村輝彦
 11月 91回 ソール・バス展
 12月 92回 グリーティング・ポップアップ13人展

1994

- 1月 93回 粟津潔展 H²O Earthman
 2月 94回 第6回東京 TDC展
 3月 95回 上條喬久展 Windscape Mindscape
 4月 96回 片山利弘展
 5月 97回 永井一正展
 6月 98回 オランダのグラフィックデザイン100年
 7月 99回 1994 ADC展
 8-9月 100回 グラフィック・グッズ展
 デザインからの贈りもの
 10月 101回 平野甲賢展 文字の力
 10月 特別展 九州の九人の九つの個性展

- 11月 102回 亀倉雄策ポスター新作展
 12月 103回 原研哉展
 12月 特別展 「私の好きなもの」
 土橋とし子、中村幸子、メグ・ホンキ3人展

1995

- 1月 104回 ブルーノ・ムナーリ展
 2月 105回 日本のブックデザイン展1946-95
 3月 106回 第7回東京 TDC展
 4月 107回 ビーター・ブラッティング展
 5月 108回 田中一光展 人間と文字
 6月 109回 ニクラウス・トロックスラーポスター展
 7月 110回 1995 ADC展
 8月 111回 リズム&ヒューズの
 コンピュータグラフィックス展
 9月 112回 八木保展 自然観
 9月 特別展 世界のグラフィック20人 ギンザ・グラフィック・
 ギャラリー 10周年 / ggg Books 20冊記念
 10月 113回 モダン・タイポグラフィの流れ展-1
 11月 114回 戸田正寿 イヤイヤランド展
 12月 115回 日本のイラストレーション50年展

1996

- 1月 116回 蓬田やすひろ展 お江戸で、ゆらゆら
 2月 117回 モダン・タイポグラフィの流れ展-2
 3月 118回 NIPPONJIN ポスター 23人展イン・サンパワロ
 4月 119回 第8回東京 TDC展
 5月 120回 現代ハンガリーのグラフィック4人展
 6月 121回 勝岡重夫タイポグラフィックアート展
 Departure
 7月 122回 1996 ADC展
 8月 123回 前田ジョン かみとコンピュータ展
 9月 124回 K2-黒田征太郎 / 長友啓典
 柳脚の椅子展
 10月 125回 チェコ・アヴァンギャルド・ブックデザイン
 1920s・30s
 11月 126回 Graphic Wave 1996
 青木克憲 / 佐藤卓 / 山形季央
 12月 127回 アラン・ル・ケルネ展

1997

- 1月 128回 下谷二助展 人じん
 1月 特別展 CCGA特別展:
 ジョセフ・アルバース展
 2月 129回 大橋正展 体温をもつ野菜たち
 3月 130回 創立10周年記念 東京 TDC展
 4月 131回 仲條正義○○○展
 5月 132回 今日の雑誌8誌による・特集エココロジ展
 6月 133回 横尾忠則ポスター展
 吉祥招福繁昌描き下ろし!!
 7月 134回 1997 ADC展
 8月 135回 河原敏文とボリゴン・ピクチュアス展
 ロッキー・ホラ商會
 9月 136回 メキシコ10人展
 10月 137回 Graphic Wave 1997
 秋田寛 / 井上里枝 / 福島治
 10月 特別展 勝見勝賞 10周年記念展
 11月 138回 福田繁雄のポスター (Supporter)
 12月 139回 GLOBAL展 世界33人の
 デザイナーによるデュオポスター

1998

- 1月 140回 鈴木八朗展 8RO ART & AD
 2月 141回 オーデルマット+ティッシ
 グラフィックデザイン展
 3月 142回 スタシス・エイドリグヴィチウス展
 4月 143回 1998 TDC展

- 5月 144回 スタジオ・ドゥンパー展
 6月 145回 山本容子展 オペラレクソン
 7月 146回 1998 ADC展
 8月 147回 河口洋一郎展 電脳宇宙への旅
 9月 148回 Graphic Wave 1998
 蝦名龍郎 / 平野敬子 / 三木健
 10月 149回 グンター・ランボー展
 11月 150回 フィリップ・アペロウ展
 フランス文化におけるポスター
 12月 151回 ヘルベルト・ロイピン展

1999

- 1月 152回 海外作家によるFuroshiki Graphics展
 2月 153回 日本のタイポグラフィック1946-95
 3月 154回 木村恒久構成フォト・グラフィックス展 What?
 3月 特別展 堀内誠一の仕事展 雑誌づくりの決定的瞬間
 4月 155回 1999 TDC展
 5月 156回 現代ブルガリアのグラフィックデザイン展
 6月 157回 日比野克彦展 誘拐したい
 7月 158回 1999 ADC展
 7月 特別展 前田ジョン One-line.com
 8月 159回 矢萩喜徳展
 9月 160回 Graphic Wave 1999
 鈴木守 / 松下計 / 米村浩
 10月 161回 FUSE展
 11月 162回 松井桂三展
 12月 163回 ボール・デイヴィスのポスター展
 12月 特別展 アーヴィング・ペン
 三宅一生の仕事への視点

2000

- 1月 164回 Graphic Message for Ecology
 1月 特別展 篠山紀信&マニエール・ルグリ展
 フォトセッションinパリ・オペラ座1998-1999夏
 2月 165回 ブルーノ・モングッツィ展 形と機能の詩人
 3月 166回 伊藤憲治展 医学誌「ステトスコープ」の
 表紙デザイン半世紀
 4月 167回 2000 TDC展
 5月 168回 Poster Works Nagoya 12
 岡本滋夫+11人のデザイナーたち
 6月 169回 なにわの、ここでグラフィック展
 7月 170回 2000 ADC展
 8月 171回 日宣美の時代
 日本のグラフィックデザイン1951-70展
 9月 172回 Graphic Wave 2000
 秋山具義 / Tycoon Graphics / 中島英樹
 10月 173回 D-ZONE / 戸田ツトム展
 11月 174回 ビエール・ベルナル展
 現実的であり、不可能を試みる!
 12月 175回 本とコンピュータ展 書物変容-アジアの詩空

2001

- 1月 176回 二〇〇一年木田彦展
 2月 177回 イタロ・ルビ展 Not Just Graphics
 3月 178回 "Spring has come"
 松永真、ディテールの競演。
 4月 179回 2001 TDC展
 5月 180回 コントラプункト展
 デンマーク国家のデザインプログラム
 6月 181回 原弘のタイポグラフィ
 7月 182回 2001 ADC展
 8月 183回 瀬本唯人 にんげんもよう
 9月 184回 Graphic Wave 2001
 澁谷克彦 / 永井一史 / ひびのこづえ
 10月 185回 ハングルポスター展
 11月 186回 サイトウマコト展
 12月 187回 チップ・キッド展

2002

- 1月188回 ウーヴェ・レシユ展
2月189回 宇野亜喜良展
3月190回 デザイン教育の現場から
セント・ジュースト大学院の的手法
4月191回 2002 TDC展
5月192回 DRAFT 展
6月193回 アラン・チャン展 東情西韻
6月 特別展 花森安治と暮らしの手帖展
7月194回 2002 ADC展
8月195回 タナカノリユキ展 OUT OF DESIGN
9月196回 Graphic Wave 2002
左合ひとみ/澤田泰廣/新村則人
10月197回 SUN-AD人
11月198回 ブラジルのグラフィックデザイン展
ブックデザインにみる今日のブラジル
12月199回 ハーブ・ルバリン展

2003

- 1月200回 田中一光 ポスターとグラフィックアート展
2月201回 サディク・カラムスターファ展
旅と儀式、言葉と形象
3月202回 現代中国平面設計展
4月203回 2003 TDC展
5月204回 ファブリカ展 1994 / 03 混沌から秩序へ
6月205回 空山基展
7月206回 2003 ADC展
8月207回 新島夷展 色彩とフォントの相互作用
9月208回 Graphic Wave 2003
佐野研二郎/野田風/服部一成
10月209回 副田高行「広告の告白」展
11月210回 ステファン・サグマイスター展
12月211回 河野鷹忠展
昭和を駆け抜けたモダニスト 1906-99

2004

- 1月212回 永井一正ポスター展
2月213回 伊藤桂司・谷口広樹・ヒロ杉山展
3月214回 雑誌をデザインする集団キャップ展
4月215回 2004 TDC展
5月216回 佐藤卓展 Plasticity
6月217回 現代デンマークポスターの10年
デンマーク・デザイン・センターによるセレクション
7月218回 2004 ADC展
8月219回 パーンブルック・デザイン展
Friendly Fire
9月220回 Graphic Wave 2004
工藤青石 / GRAPH / 生息気
10月221回 疾風迅雷 杉浦康平雑誌デザインの半世紀展
11月222回 佐藤可士和 Beyond
12月223回 もう一人の山名文夫 1920-70年代

2005

- 1月224回 七つの顔のアサバ展
2月225回 バラリンジ・デザイン展
古代の文化と現代のデザイン
3月226回 青木克憲XX展
4月227回 2005 TDC展
5月228回 和田誠のグラフィックデザイン
6月229回 チャマイエフ&ガイスマー展
40年間にわたるデザイン活動
7月230回 2005 ADC展
8月231回 佐藤雅彦研究室展 課題とその解答
9月232回 Graphic Wave 2005
谷田一郎/東泉一郎/森本千絵
10月233回 CCCP研究所=ドクター・パッシェ &
マドモアゼル・ローズ展

- 11月234回 祖父江慎+ cozfish展
12月235回 スイスポスター 100年展

2006

- 1月236回 亀倉雄策 1915-1997
日本デザイン界を牽引したバイオニア
2月237回 野田風展
Hanpanda コンテンポラリーアート
3月238回 シアン展
4月239回 2006 TDC展
5月240回 永井一史
HAKUHODO DESIGN 「ブランドとデザイン」
6月241回 田名網敬一主義展
7月242回 2006 ADC展
8月243回 アレクサンダー・ゲルマン展
ニューヨーク・コネクション
9月244回 Graphic Wave 2006 School of Design
古平正義/平林奈緒美/水野学/山田英二
9月 特別展 AGI日本デザイン総会開催記念:掛け軸展
10月245回 勝手に広告展
[中村至男+佐藤雅彦]の活動No.6
11月246回 中島英樹展 Clear in the Fog
12月247回 早川良雄 日本のデザイン黎明期の証人

2007

- 1月248回 Exhibitions Graphic Messages from
ggg & ddd 1986-2006 [Part I]
2月 Exhibitions Graphic Messages from
ggg & ddd 1986-2006 [Part II]
3月249回 キムラカツ展 問いボックス店
4月250回 2007 TDC展
5月251回 ヘルムート・シュミット
デザイン イズ アティテュード
6月252回 廣村正彰 2D ⇄ 3D
7月253回 2007 ADC展
8月254回 ワルシャワの風 1966-2006
ワルシャワ国際ポスター・ビエンナーレ金賞受賞作品展
9月255回 佐野研二郎 ギンザ・サローネ
10月256回 中島信也CM展
中島信也と29人のアートディレクター
11月257回 Welcome to Magazine Pool
雑誌デザイン10人の越境者たち
12月258回 Aoba Show 青葉益輝ワン・マン・ショー

2008

- 1月259回 アー Tuttダ! 戸田正寿ポスターアート展
2月260回 グラフィックデザインの時代を築いた
20人の証言 Interviews by 柏木博
3月261回 Textasy
プロディ・ノイエシユヴァンダー展
4月262回 2008 TDC展
5月263回 アラン・フレッチャー
英国グラフィックデザインの父
6月264回 がんばれニッポン、を広告してきたんだ
そういえば、俺。 応援団長佐々木●宏
7月265回 2008 ADC展
8月266回 Now Updating... THA /
中村勇吾のインタラクティブデザイン
9月267回 平野敬子 デザインの起点と終点と起点
10月268回 白 原研哉展
11月269回 M/M [Paris] The Theatre Posters
12月270回 OYKOT Wieden+Kennedy Tokyo:
10 Years of Fusion

2009

- 1月271回 きらめくデザイナーたちの競演
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展

- 2月272回 Helvetica forever: Story of a Typeface
ヘルベチカ展
3月273回 DRAFT Branding & Art Directors
4月274回 2009 TDC展
5月275回 矢萩喜俊展
[Magnetic Vision / 新作100点]
6月276回 グラフィックデザイナー マックス・フーパー展
7月277回 2009 ADC 展
8月278回 [ラストショー]細谷巖アートディレクション展
9月279回 銀座界隈限ガヤガヤ青春ショー
~言い出しっぺ横尾忠則~
瀧本唯人・宇野亜喜良・和田誠・横尾忠則4人展
10月280回 山形季央展
11月281回 北川一成
12月282回 広告批評展
ひとつの時代の終わり始まり

2010

- 1-2月283回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展I
田中一光ポスター 1953-1979
3月284回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展II
福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング
4月285回 TDC展 2010
5月286回 Talking the Dragon 井上嗣也展
6月287回 NB@ggg ネヴィル・プロティ 2010
7月288回 2010 ADC展
8月289回 ラルフ・シュライフォール展
9月290回 ブッシュビン・パラダイム
シーモア・クワスト | ポール・デイヴィス |
ミルトン・グレイザー | ジェームズ・マクミラン
10月291回 海と山と新村則人
11月292回 服部一成二十年十一月
12月293回 EUPHRATES ユーフラテス展
~研究から表現へ~

2011

- 1月294回 秀英体 100
2月295回 イアン・アンダーソン /
ザ・デザイナーズ・リパブリックが
トーキョーに帰ってきた。
3月296回 デザイン 立花文徳
4月297回 TDC展 2011
5月298回 佐藤晃一ポスター
6月299回 レイモン・サヴィニャック展:
41歳、「牛乳石鹸モンサヴォン」の
ポスターで生まれた巨匠
7月300回 2011 ADC展
8月301回 [ジー・ジー・ジー] グルーヴィジョンズ展
9月302回 工藤青石展 形と色と構造の感情
10月303回 100 ggg Books 100 Graphic Designers
11月304回 イデオポリス東京:
スクール・オブ・ヴィジュアルアーツ
美術学修士課程卒業制作展
12月305回 杉浦康平・マンガラ発光

2012

- 1-2月306回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展IV
没後10周年記念企画
田中一光ポスター 1980-2002
3月307回 ロト Cheney
一基聖のごとく、ロシア・アヴァンギャルドの麗児〜
4月308回 TDC展 2012
5月309回 キギ展 植原亮輔と渡邊良重
6月310回 ジャンピン・ヘ フラッシュバック
7月311回 2012 ADC展
8月312回 The Posters 1983-2012
世界ポスタートリエンナーレトヤマ受賞作品展

- 9月313回 寄藤文平の夏のー研究
10月314回 AGI展
11月315回 横尾忠則 初のブックデザイン展
12月316回 テセウス・チャン ヴェルクNo.20:銀座
The Extremities of the Printed Matter

2013

- 1月317回 松永貞ポスター 100展
2月318回 カリ・ビッポ ポスターとドローイング
シンプル・ストロング・シャープ
3月319回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展V
LIFE 永井一正ポスター展
4月320回 TDC展 2013
5月321回 KM [ケーエム] カレル・マルテンス
6月322回 ホワイ・ロット・アツシエイツ
予定は失敗のもと。未定は成功のもと。
7月323回 2013 ADC展
8月324回 大宮エリー展
9月325回 PARTY そこにいない。展
10月326回 長崎わかこ展
[Between Human and Nature]
11月327回 ヤン・テヒョルト展
12月328回 トマシェフスキ展 世界を震わす詩学

2014

- 1月329回 勝井三雄展 兆しのデザイン
2月330回 「指を置く」展 佐藤雅彦+齋藤達也
3月331回 明日のデザインと福島島
[Social Design & Poster]
4月332回 TDC展 2014
5月333回 phono / graph sound, letters, graphics
6月334回 永井裕明展 Graphic Jam Zukō
7月335回 2014 ADC展
8月336回 ひのこづさいぼー:
ひびのこづえ+「にほんごであそぼ」のしごと
9月337回 So French ミシェル・ブーヴェ・ポスターズ
10月338回 セミトランスアレント・デザイン 退屈
11月339回 Persona 1965
グラフィックデザイン展(ペルソナ) 50年記念
12月340回 荒井良二だもん

2015

- 1月341回 浅葉克己のタイポグラフィ展
Asaba's Typography.
2月342回 Line in the sand ポール・デイヴィス
3月343回 APPLE+ 三木健 学び方のデザイン
「りんご」と日常の仕事
4月344回 TDC展2015
5月345回 2 Men Show
スタンリー・ウォン [黃炳培] ×
アナザーマウンテンマン [又一山人]
6月346回 ライソマティクス グラフィックデザインの死角
7月347回 2015 ADC展
8月348回 ラース・ミュラー 本 アナログリアリティー
9月349回 色部義昭 Wall
10月350回 21世紀琳派ポスターズ
10人のグラフィックデザイナーによる競演
11月351回 宇字宇 大日本タイポ組合
12月 特別展 [千代田区立立比谷図書文化館にて開催]
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展
THE NIPPON POSTERS

2016

- 1-3月 特別展 [千代田区立立比谷図書文化館にて開催]
千代田区立立比谷図書文化館主催 /
DNP文化振興財団共催
祖父江慎+コスフィッシュ展 ブックデザイ



1992-2022

4-5月352回 ggg30周年記念 明日に架ける橋
ggg展覧会ポスター 1986-2016

6月353回 TDC 2016

7-9月354回 2016 ADC展

9-10月355回 ノゼイナール かたちと理由

11-12月356回 櫻本了吉コーカイ記

2017

1-3月357回 仲條正義 IN & OUT, あるいは歌&囁吐
4月358回 TDC 2017

5-6月359回 ロマン・チェシレヴィチ 鏡像への狂気
7月360回 2017 ADC展

7月 特別展 追悼! 「長友啓典」特別展

8-9月361回 Apeloigg Tokyo フォリリップ・アペロワ展

9-11月362回 組版造形 白井敬尚

11-1月363回 マリメッコ・スピリッツー パーヴォ・ハロネン/
マイヤ・ロウエカリ/アイノミヤイ・メッツォラ

2018

1-3月364回 平野甲賀と晶文社展

4月365回 TDC 2018

5-6月366回 ウィム・クドウエル グリッドに魅せられて

7-8月367回 Harumi Yamaguchi × Yoshirotten
Harumi's Summer

9-10月368回 横尾忠則 幻想幻想画譚 1974-1975

10-11月369回 日本のアートディレクション展 2018

12-1月370回 続々 三澤遼

2019

2-3月371回 ボーラ・シェア: Serious Play

4月372回 TDC 2019

5-6月373回 Beginnings 井上嗣也展

7-8月374回 田名網敬一の観光展

8-10月375回 Sculptural Type コントラプункト

10-11月376回 日本のアートディレクション展 2019

11-1月377回 カール・グルストナー 動きの中の思索

2020

1-3月378回 河口洋一郎 生命のインテリジェンス

6-8月379回 TDC 2020

10-11月380回 いきることば つむぐいのち

永井一正の絵と言葉の世界

12-3月381回 石岡瑛子

グラフィックデザインはサバイブできるか

2021

4-5月382回 TDC 2021

6-7月383回 Sports Graphic スポーツ・グラフィック

7-8月 特別展 オリンピック・ランゲージ:
デザインでみるオリンピック

9-10月384回 葛西薫展 NOSTALGIA

11月385回 日本のアートディレクション展 2020-2021

12-3月386回 ソール・スタインバーグ

シニカルな現実世界の変換の試み

1992

1-2月 1回 Trans-Art '91展

3月 2回 アイヴァン・チャマイエフ展 コラーージュ

4-5月 3回 第4回東京TDC展

5-6月 4回 リック・パリセンティ展

6-7月 5回 シーモア・クワスト展 メタル彫刻

7-8月 6回 デザイン・プリント・ペーパー展

8-9月 7回 ヴァン・オリバー展

10月 8回 中村誠 偏展

10-11月 9回 マイケル・メイヴリー展

11-12月 10回 灘本唯人、宇野亜喜良、和田誠、
山口はるみ展

1993

1-2月 11回 フロシキ展

2-3月 12回 ホワイノット・アソシエイツ展

3-4月 13回 アレン・ホリ+ロバート・ナカタ展
解き放たれた声

4-5月 14回 1992 ADC展

5-6月 15回 ラッセル・W・フィッシャー展

6-7月 16回 第5回東京TDC展

7-8月 17回 文字からのイマジネーション

8-9月 18回 デザイン・プリント・ペーパー展 Part II

9-10月 19回 ビル・ゾーバーン展

10-11月 20回 U.G.サトウのポスター展 Treedom

11-12月 21回 勝井三雄展 光の国:夜と昼の狭間に

12-1月 22回 現代香港のデザイン8人展

1994

1-2月 23回 ソール・バス展

2-3月 24回 グリーディング・ポップアップ13人展

3-4月 25回 リュディ・パウア/
インテグラルコンセプト展

4-5月 26回 Illustration4 安西水丸・河村要助・
矢吹申彦・湯村輝彦

5-6月 27回 ジェニファ・モラ展

6-7月 28回 永井一正展

7-8月 29回 ウーヴェ・レシュ展

8-9月 30回 1994 ADC展

9-10月 31回 デザイン・プリント・ペーパー展 Part III

10-11月 32回 アメリカのAD2人展

デビッド・カーソン+ゲーリー・ケブキ
エディトリアルデザインの新潮流

12月 33回 亀倉雄策ポスター新作展

1995

1-2月 34回 ヘルマン・モンタルボ ポスター展

2-3月 35回 ブルーノ・ムナーリ展

3-4月 36回 グラッパ・デザイン展

4-5月 37回 第7回東京TDC展

5-6月 38回 ミシェル・ブーヴェ展 ポスター、路傍の美

6-7月 39回 田中一光展 人間と文字

7-8月 40回 テレロング展

8-9月 41回 1995 ADC展

9-10月 42回 デザイン・プリント・ペーパー展 IV

10-11月 43回 ベレ・トレント展

11-12月 44回 アジアのデザイナー 6人展

1996

1-2月 45回 日本のイラストレーション50年展

2-3月 46回 マーゴ・チェイス展

3-4月 47回 ヴェルネル・イエカー展

4-5月 48回 グンター・ランボー展

5-6月 49回 第8回東京TDC展

6-7月 50回 カリ・ビッポ展

7-8月 51回 現代ハンガリーのグラフィック4人展

8-9月 52回 1996 ADC展

9-10月 53回 前田ジョン かみとコンピュータ展

10-11月 54回 アラン・ル・ケルネ展

11-12月 55回 ウッディ・パートル展

1997

1-2月 56回 ジョアン・マシャド展

2-3月 57回 K2オオサカ展 黒田征太郎+長友啓典

3-4月 58回 グラフィックデザイン・イン・チャイナ展

4-5月 59回 創立10周年記念 東京TDC展

5-6月 60回 メキシコ10人展

7月 61回 カトー・デザイン 思考するデザイン展

8-9月 62回 1997 ADC展

9-10月 63回 ラルフ・シュライフォーク展

10-11月 64回 ジェームズ・ビクトル展 貼紙禁止

11-12月 65回 GLOBAL展 世界33人の
デザイナーによるデュオポスター

1998

1-2月 66回 ファイトヘルベ/デ・ヴリンゲル展
未来を振り返る

2-3月 67回 ジャン・ベノア・レヴィ展 その視覚的活動

3-4月 68回 《トロイカ》ロシア 3人展

4-5月 69回 フィリップ・アペロウ展

フランス文化におけるポスター

6月 70回 1998 TDC展

7月 71回 スタジオ・ダウンバー展

8-9月 72回 1998 ADC展

9-10月 73回 ザフリキ展

10-11月 74回 現代イスラエルのビジュアルコミュニケーター
デビッド・タルタコーバ展

11-12月 75回 台湾4人展

1999

1-2月 76回 海外作家による Furoshiki Graphics 展

2-3月 77回 ビエール・ニューマン展

3-4月 78回 ボーラ・シェア展

5-6月 79回 ハンブルクのグラフィックデザイン展

オルガー・マチス+クリスティアーネ・フラインガー

6-7月 80回 1999 TDC展

7-8月 81回 ヤン・ライリッヒ Jr.展 時代のミルハウス

8-9月 82回 1999 ADC展

9-10月 83回 スコット・マケラ [WIDE OPEN]展

10-11月 84回 尊厳

チャズ・マヴィヤネー・デイヴィースの世界展

11-12月 85回 マカオ2人展

ウン・ヴァイメン/ビクトル・ヒューゴ・マレイロス

2000

1-2月 86回 Graphic Message for Ecology

2-3月 87回 松井桂三展

3-4月 88回 ポール・デイヴィースのポスター展

4-5月 89回 なにわの、こてこてグラフィック展

5-6月 90回 2000 TDC展

6-7月 91回 アントン・ペイク展 ボディ・アンド・ソウル

7-9月 92回 ビエール・ベルナル展

現実的であり、不可能を試みよう!

9-10月 93回 2000 ADC展

10-11月 94回 イタロ・ルビ展 Not Just Graphics

11-12月 95回 デザイン教育の現場から

ベルリン芸術大学

オルガー・マチス教室によるアプローチ

2001

1-2月 96回 二〇〇一年木田安彦展

2-3月 97回 コントラプункト展

デンマーク国家のデザインプログラム

3-4月 98回 ザルツブルク音楽祭ポスター展

5-6月 99回 2001 TDC展
6-7月 100回 チップ・キッド展
7-8月 101回 ハングルポスター展
8-9月 102回 2001 ADC展
9-10月 103回 ウォルフガング・フィンガルト展
タイポグラフィへのわが道
10-11月 104回 “Spring has come”
松永真、ディテールの競演。
11-12月 105回 デザイン教育の現場からⅡ
セント・ジュースト大学院の新技术

2002

1-2月 106回 灘本唯人 にんげんもよう
2-3月 107回 サイトウマコト展
3-4月 108回 オットキシュタイン展
4-5月 109回 タピロ展 ヴェニス・ビエンナーレのポスター
5-6月 110回 2002 TDC展
7月 111回 ウィーンのパスター展
ウィーン市立図書館アーカイブ1883-2002
7-9月 112回 三木健展
9-10月 113回 2002 ADC展
10-11月 114回 サディク・カラムスターファ展
旅と儀式
11-12月 115回 中国グラフィックデザイン展

2003

1-2月 116回 SUN-AD人
2-3月 117回 田中一光 ポスターとグラフィックアート展
3-4月 118回 ファブリカ展 1994 / 03 混沌から秩序へ
4-6月 119回 墨と椅子について
カン・タイキユン+フリーマン・ラウ
アート&デザイン展
6-7月 120回 2003 TDC展
7-8月 121回 ルーバ・バルコバ展
8-9月 122回 2003 ADC展
9-10月 123回 ステファン・サグマイスター展
10-11月 124回 ヨーロッパの文化ポスター
ノイエ・ザムルング・ミュンヘンの
所蔵作品より
11-12月 125回 空山基展

2004

1-2月 126回 副田高行「広告の告白」展
2-3月 127回 永井一正ポスター展
3-4月 128回 現代デンマークポスターの10年
デンマーク・デザイン・センターによるセレクション
4-5月 129回 雑誌をデザインする集団キャップ展
5-6月 130回 2004 TDC展
6-7月 131回 ビエール・メンデル展
8-9月 132回 2004 ADC展
9-10月 133回 パーンブルック・デザイン展
Friendly Fire
10-11月 134回 チェコのポスター展
ブラハ美術工芸博物館
コレクション1960-2003
11-12月 135回 バラリンジ・デザイン展
古代の文化と現代のデザイン

2005

1-2月 136回 疾風迅雷 杉浦康平の雑誌デザイン半世紀展
2-3月 137回 シアン展 ベルリンでの13年
3-4月 138回 佐藤可土和 Beyond
4-5月 139回 メーフィス&ファン・デュールセン展
5-6月 140回 2005 TDC展
7月 141回 CCCP研究所=ドクター・ベッシエ &
マドモアゼル・ローズ展
8-9月 142回 2005 ADC展

9-10月 143回 青木克憲XX展
10-11月 144回 ドイツAGIグラフィックデザイン展
パーフェクトフォルム
11-12月 145回 和田誠のグラフィックデザイン

2006

1-2月 146回 スイスポスター 100年展
2-3月 147回 グラフィック・ソート・ファシリティ展
GTF / 50プロジェクト
3-4月 148回 野田広展
Hanpanda コンテンポラリーアート
4-5月 149回 ブルーノ・オルダーニ展
5-6月 150回 2006 TDC展
6-7月 151回 ブラック&ホワイトポスター展
8月 152回 2006 ADC展

2007

5-6月 153回 Exhibitions Graphic Messages from
ggg & ddd 1986-2006
7-8月 154回 2007 TDC展
8-9月 155回 ヘルムート・シュミット
デザイン イズ アティテュード
10-11月 156回 2007 ADC展
11-12月 157回 キムラカツ展 問いボックス店

2008

1-2月 158回 Welcome to Magazine Pool
雑誌デザイン10人の越境者たち
2-4月 159回 佐野研二郎 ギンザ・サローネ・オサカ
4-6月 160回 中島信也CM展
中島信也と29人のアートディレクター
6-7月 161回 2008 TDC展
8月 162回 Now Updating... THA /
中村勇吾のインストラクティブデザイン
9-10月 163回 2008 ADC展
10-11月 164回 Aoba Show 青葉益輝ワン・マン・ショー
11-12月 165回 Graphic West 真 and / or 善
杉崎真之助と高橋善丸のグラフィックデザイン

2009

1-2月 166回 Helvetica forever: Story of a Typeface
ヘルベチカ展
3-4月 167回 きらめくデザイナーたちの競演
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展
4-6月 168回 DRAFT Branding & Art Directors
6-7月 169回 2009 TDC展
8-10月 170回 2009 ADC展
10-12月 171回 矢萩善徳展
[Magnetic Vision / 新作100点]

2010

1-3月 172回 Graphic West 2 感じる箱展
grafの考えるグラフィックデザインの実験と検証
3-5月 173回 北川一成
5-7月 174回 TDC展 2010
7-9月 175回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅲ
福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング
9-10月 176回 2010 ADC展
11-12月 177回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ
田中一光ポスター 1953-1979

2011

1-3月 178回 Graphic West 3 phono / graph
一音・文字・グラフィック
3-5月 179回 秀英体100
5-7月 180回 TDC展 2011
7-9月 181回 服部一成二十一年夏大阪

9-10月 182回 2011 ADC展
11-12月 183回 100 ggg Books 100 Graphic Designers

2012

1-3月 184回 Graphic West 4 「奥村昭夫と仕事」展
3-5月 185回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅳ
没後10周年記念企画
田中一光ポスター 1980-2002
5-7月 186回 TDC展 2012
7-9月 187回 立花文穂展
9-10月 188回 2012 ADC展
11-12月 189回 The Posters 1983-2012
世界ポスタートリエンナーレトヤマ受賞作品展

2013

1-3月 190回 Graphic West 5
type trip to Osaka typography ti: 270
3-4月 191回 [デーデーデー] グルーヴィジョンズ展
5-6月 192回 TDC展 2013
7-8月 193回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅴ
LIFE 永井一正ポスター展
9-10月 194回 2013 ADC展
11-12月 195回 大宮エリー展

2014

1-3月 196回 Graphic West 6
大阪新美術館建設準備室デザインコレクション
熱情と冷静のアヴァンギャルド
3-4月 197回 「指を置く」展 佐藤雅彦+齋藤達也
5-6月 198回 TDC展 2014
6-7月 199回 明日のデザインと福島治
[Social Design & Poster]
10-12月 200回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅵ
THE NIPPON POSTERS

2015

1-3月 201回 永井裕明展
Graphic Jam Zukō in Kyoto
4-5月 202回 ラース・ミュラー 本 アナログリアディエー
6-7月 203回 TDC展 2015
8-10月 204回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅶ
20世紀琳派 田中一光
11-12月 205回 ニッポンのニッポン ヘルムートシュミット

2016

1-3月 206回 浅葉亮己個展 「アサハの血肉化」
4-5月 207回 21世紀琳派ポスターズ
10人のグラフィックデザイナーによる競演
5-7月 208回 ライゾマティクス グラフィックデザインの死角
7-8月 209回 TDC 2016
9-10月 210回 物質性-非物質性 デザイン&イノベーション
11-12月 特別展 京都dddギャラリー・京都工芸繊維大学
アートマネージャー養成講座連携企画展
なにで行く どこへ行く 旅っていいね
京都造形芸術大学プロジェクトセンター×
12月 特別展 京都dddギャラリー-連携企画展
experimental studies | post past

2017

1-3月 211回 グラフィックとミュージック
5-6月 212回 仲條正義 IN & OUT, あるいは飲&嘔吐
7-8月 213回 TDC 2017
9-10月 214回 平野甲賀と晶文社展
11月 特別展 京都dddギャラリー・成安造形大学連携展
.communication
12-3月 215回 ウィム・クロウエル グリッドに魅せられて

2018

4-6月 216回 Graphic West 7: YELLOW PAGES
7-8月 217回 TDC 2018
8-10月 218回 田名網敬一の現在展
11-12月 特別展 京都dddギャラリー・京都市立芸術大学
ビジュアル・デザイン研究室共催展
グラフィックで科学を学ぼう 進化のものがたり展

2019

1-3月 219回 組版造形 白井敬尚
3-6月 220回 本の縁側 矢萩多聞と本づくり展
6-8月 221回 ヘイセイ・グラフィックス
8-10月 222回 ドヴァランズ-システムを遊び場に
11-12月 223回 Graphic West 8:
三重野龍大全2011-2019「屁理屈」

2020

1-3月 224回 Design ZOO いのち・ときめき・デザイン展
6-10月 225回 コントラクンプト タイプ
10-12月 226回 食のグラフィックデザイン

2021

1-3月 227回 Graphic West 9: Sulki & Min
4-7月 228回 ヘルムートシュミットタイポグラフィ:
トライ トライ トライ
7-9月 229回 小島武展 夢ひとつ
10-12月 230回 石岡瑛子 デザインはサブイブできるか

2022

1-3月 231回 鳥海修
[もじのうみ:水のような、空気のような活字]

- 1995**
- 4-7月 1回 グラフィック・ビジョン：
ケネス・タイラーとアメリカ現代版画の30年
 - 8-10月 2回 ロイ・リキテンスタイン：
エンタブラチュア→ヌード
 - 11-1月 3回 一瞬の刻印：ロバート・マザウェル展

- 1996**
- 3-4月 4回 アメリカ版画の現在地点：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.1
 - 4-7月 5回 デヴィッド・ホックニー展
 - 7-10月 6回 自律する色彩：ジョセフ・アルバース展
 - 10-1月 7回 スタイルを越えて：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.2

- 1997**
- 3-6月 8回 ジェームズ・ローゼンクvist展
 - 6-9月 9回 版画における抽象：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.3
 - 10-11月 10回 大竹伸朗：Printing / Painting展
 - 12-1月 11回 線／色彩／イメージ：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.4

- 1998**
- 3-5月 12回 フランク・ステラ／ケネス・タイラー：
構築する版画
アーティストとプリンター、30年の軌跡
 - 5-9月 13回 主張する黒：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.5
 - 9-12月 14回 形象としての紙：アラン・シールズ展

- 1999**
- 3-5月 15回 福田美蘭展 New Works: Prints
 - 6-9月 16回 かたる かたち：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.6
 - 9-12月 17回 版画の話展

- 2000**
- 3-6月 18回 New Works 1998-1999：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.7
 - 6-9月 19回 太田三郎：存在と日常
 - 9-12月 20回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ設立展：
ポスターグラフィックス 1950-2000

- 2001**
- 3-5月 21回 版画集への招待：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.8
 - 5-7月 22回 折元立身：1972-2000
 - 8-10月 23回 藤本由紀夫：四次元の読書
 - 10-12月 24回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ展 Vol.2：
グラフィックデザインの時代

- 2002**
- 3-6月 25回 空間に躍りてた版画たち：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.9
 - 6-9月 26回 矢萩喜徳郎：視触、視弾、そして眼差しの記憶
 - 9-12月 27回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ展 Vol.3：
個性の時代

- 2003**
- 3-4月 28回 絵画—永遠の現在を求めて：
リチャード・ゴーマン展
 - 4-6月 29回 色彩としての紙：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.10
 - 6-9月 30回 ヘレン・フランケンサラー—木版画展
 - 9-12月 31回 タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション 新収蔵作品展：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.11

- 2004**
- 3-6月 32回 イラストレーションの黄金時代
 - 6-9月 33回 パスワード：日本とデンマークの
アーティストによる対話
 - 9-12月 34回 版で発信する作家たち2004福島

- 2005**
- 3-6月 35回 アメリカ現代木版画の世界：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.12
 - 6-9月 36回 Breathing Light：吉田重信
 - 10-12月 37回 decade — CCGAと6人の作家たち

- 2006**
- 3-6月 38回 版に描く：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.13
 - 6-9月 39回 藤幡正樹：不完全さの克服
イメージとメディアによって創り出される、
新たな現実感。
 - 9-12月 40回 野田哲也：日記

- 2007**
- 3-6月 41回 凹版表現の魅力：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.14
 - 6-9月 42回 再生する版画：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.15
 - 9-12月 43回 ユニーク・インプレッション：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.16

- 2008**
- 3-6月 44回 厚い色：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.17
 - 6-9月 45回 大きな版画、小さな版画：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.18
 - 9-11月 46回 黒のモノローグ：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.19

- 2009**
- 2-6月 47回 作品と題名：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.20
 - 6-9月 48回 きらめくデザイナーたちの競演
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展
 - 9-12月 49回 赤のちから：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.21

- 2010**
- 3-6月 50回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ
田中一光ポスター 1953-1979
 - 6-9月 51回 ロイ・リキテンスタイン展：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.22
 - 9-12月 52回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅲ
福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング

- 2011**
- 3月 53回 幾何学的抽象の世界：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.23
(東日本大震災のため中断)
 - 6-9月 54回 秀英体 100
 - 9-12月 55回 幾何学的抽象の世界：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.23

- 2012**
- 3-6月 56回 日本ポルトガル交流
版で発信する作家たち：after 3.11
 - 6-9月 57回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅳ
没後10周年記念企画
田中一光ポスター 1980-2002
 - 9-12月 58回 銅版の表現力：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.24

- 2013**
- 2月 特別展 第24回田善顕版画画展
 - 3-6月 59回 THE POSTERS 1983-2012
世界ポスタートリエンナーレトヤマ受賞作品展
 - 6-9月 60回 現代版画とリトグラフ：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.25
 - 9-12月 61回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅴ
LIFE 永井一正ポスター展

- 2014**
- 2月 特別展 第25回田善顕版画画展
 - 3-6月 62回 プリント・イン・ブルー：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.26
 - 7-9月 63回 20世紀モダンデザインの誕生—
大阪新美術館建設準備室デザインコレクション
 - 9-12月 64回 レリーフ・プリントの世界：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.27

- 2015**
- 2月 特別展 第26回田善顕版画画展
 - 3-6月 65回 開館20周年記念
21世紀のグラフィック・ビジョン
 - 6-9月 66回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅵ
浅葉克己ポスターアーカイブ展
 - 9-12月 67回 ロバート・マザウェルのリトグラフ：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.28

- 2016**
- 2月 特別展 第27回田善顕版画画展
 - 3-6月 68回 グラフィックとミュージック
 - 6-9月 69回 中林忠良展：未知なる航海—腐食の海へ
 - 9-12月 70回 フランク・ステラ<イマジナリー・プレイシズ>：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.29

- 2017**
- 2月 特別展 第28回田善顕版画画展
 - 3-6月 71回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅶ
松永真ポスター展
 - 6-9月 72回 加納光於—揺らめく色の穂先に
 - 9-12月 73回 ジョセフ&アニ・アルバーズ、二つの抽象：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.30

- 2018**
- 2月 特別展 第29回田善顕版画画展
 - 3-6月 74回 少数精鋭の色たち—DNPグラフィック
デザイン・アーカイブより
 - 6-9月 75回 北川健次：黒の装置—記憶のディスタンス
 - 9-12月 76回 ヘレン・フランケンサラー
[エクスペリメンタル・インプレッション]：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.31

- 2019**
- 3-6月 77回 ヘイセイ・グラフィックス
 - 6-9月 78回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅷ
蔵出し 仲條正義
 - 9-12月 79回 柔らかな版：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.32

- 2020**
- 3-6月 80回 食のグラフィックデザイン
 - 7-9月 81回 共鳴する刻 [しるし]—木口木版画の現在地
 - 9-12月 82回 ことばと版画：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.33

- 2021**
- 3-6月 83回 つながりのデザイン：
DNPグラフィックデザイン・アーカイブコレクション
 - 6-9月 84回 どこか遠くへ、グラフィックにみる旅のかたち
 - 9-12月 85回 線を引く：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.34

- 1986**
- Mar. 1 Tadashi Ohashi:
Vegetable Illustration
- Apr. 2 Shigeo Fukuda: Illustration 412
- May 3 Yukimasa Okumura: Sunsun Saifu
- Jun. 4 Iku Akiyama: Picture Relief
- Jul. 5 1986 Tokyo ADC Exhibition
- Aug. 6 Art Works I The World is Art.
- Sep. 7 Koichi Sato: About Boxes 2
- Oct. 8 Kiyoshi Awazu:
Self Revolution for Painting
- Nov. 9 Herbert Bayer:
Pioneer of Visual Communication
- Dec. 10 K2 Live!
Don't Say "2" Without Knowing the "K"
- 1987**
- Jan. 11 Iroha: CG Calligraphy of Shuhei Tsuji
and CA Workshop
- Feb. 12 Flower Expo + Expo Logo Exhibition
- Mar. 13 Masaki Fujihata: Geometric Love
- Apr. 14 The Works of Shin Matsunaga:
The Mainichi Design Prize
Commemorative Exhibition
- May 15 Mizumaru Anzai "2C"
- Jun. 16 Lou Dorfsman and
The Creative Works of CBS
- Jul. 17 1987 Tokyo ADC Exhibition
- Aug. 18 Art Works II Rest in Peace
- Sep. 19 Takenobu Igarashi: Igarashi Numbers
- Oct. 20 Masuteru Aoba: Graphically
- Nov. 21 Holger Matthies:
Unpredictable Reality
- Dec. 22 Milton Glaser: Conjuror of Image
- 1988**
- Jan. 23 Katsu Kimura:
Works from Packaging Direction
- Feb. 24 Hiroki Taniguchi:
Homo sapiens' Memory
- Mar. 25 Ginza Hyakuten Covers, Original Works
- Apr. 26 Katsu Exhibition, Spring: Original-
Lithography-Silk Screen-Offset Print
- May 27 AGI '88 Tokyo: World Graphic Design
- Jun. 28 Issey Miyake Poster Exhibition:
I.I.I. at GGG
- Jul. 29 1988 Tokyo ADC Exhibition
- Aug. 30 Art Works III Peace by Piece
- Sep. 31 Recruit / Information Posters
- Oct. 32 Yoshio Hayakawa:
Original Drawings "Woman"
- Nov. 33 Masayoshi Nakajo: NAKAJOISH
- Dec. 34 Posters and Illustrations of
Stasys Eidrigevicius
- 1989**
- Jan. 35 Shopping Bag Design Exhibition
- Feb. 36 Kijuro Yahagi Exhibition
- Mar. 37 Texture: Makiko Minagawa +
Keiichi Tahara + Shigeru Yamaoka
- Apr. 38 Noriyuki Tanaka:
Gokan - The Urban Surface
- May 39 Oti Aicher: W.Von Ockham,
a Pioneer in Modern Philosophy
- Jun. 40 Kazumi Kurigami: Photographs
- Jul. 41 Shinichiro Wakao: Wakao Collection
- Aug. 42 Art Works IV
All The Flowers Have Come Here.
- Sep. 43 Kazumasa Nagai Exhibition
- Oct. 44 Posters by 12 Artists
for Europalia '89 Japan
- Nov. 45 The Current Works of Charles Anderson
- Dec. 46 Works of Etsushi Kiyohara: Hommage
- 1990**
- Jan. 47 Shigeru Akizuki: Boxes for Fun
- Feb. 48 Nobuyoshi Kikuchi:
"Shelf" Bound Books
- Mar. 49 Tsunao Harada:
"Horse" Wood-block Print
- Apr. 50 Ikko Tanaka Exhibition:
Graphic Art Botanical Garden
- May 51 Ryuichi Yamashiro:
Illustration without Cats
- Jun. 52 Keizo Matsui:
Three Dimensional Graphics
- Jul. 53 Takayuki Terakado Exhibition
- Aug. 54 Art Works V Tokyo Specimen Boxes 1990
- Sep. 55 Keiichi Tahara: The Fragrance of Light
- Oct. 56 Katsumi Asaba's New Works:
Terrible Typography in Asia.
- Nov. 57 Macaroni: Katsuya Ise
- Dec. 58 Yasuhiro Yomogida: People
- 1991**
- Jan. 59 Zenji Funabashi Exhibition
- Feb. 60 Tetsuya Ohta: Diagrams
- Mar. 61 Per Arnoldi:
Posters, Prints and Painting
- Apr. 62 Yasuhiro Sawada:
P2 [Painting x Printing]
- May 63 Sonoko Arai: Drawing Inspiration
- Jun. 64 Communication & Print:
Newly Created Posters by 10 Artists
- Jul. 65 Nobuo Nakagaki +
Nakagaki Design Office: Object Books
- Aug. 66 Art Works VI "Bacteriart" Messages
from Dream Island
- Oct.-Nov. 67 Trans-Art '91
- Dec. 68 1991 Tokyo ADC Exhibition
- 1992**
- Jan. 69 Ivan Chermayeff: Collages
- Feb. 70 The First Solo Exhibition of
Hajime Tachibana: ape-MAN
- Mar. 71 The 4th Tokyo TDC Exhibition
- Apr. 72 Henryk Tomaszewski Exhibition
- May 73 Seymour Chwast: Painted Metal Sculpture
- Jun. 74 Takashi Kanome: BOX-XX
- Jul. 75 Makoto Nakamura Solo Exhibition
- Aug. 76 Rick Valicenti Exhibition
- Sep. 77 Kaoru Kasai: AERO
- Oct. 78 Tadahito Nadamoto / Akira Uno /
Makoto Wada / Harumi Yamaguchi
Exhibition
- Nov. 79 Paul Rand
- Dec. 80 Furoshiki by 18 Artists
- 1993**
- Jan. 81 Ryohei Kojima: Tropica Grafica
- Feb. 82 Koichi Inakoshi: Out of Season
- Mar. 83 1992 Tokyo ADC Exhibition
- Apr. 84 The 5th Tokyo TDC Exhibition
- May 85 U.G. Sato's Poster Exhibition: Freedom
- Jun. 86 Hideo Mukai: Hommage
- Jul. 87 Imagination of Letters
- Aug. 88 8 Designers in Today's Hong Kong
- Sep. 89 Mitsuo Katsui: The Blessing of Light
- Oct. 90 1993 Illustration 4:
Mizumaru Anzai / Yosuke Kawamura /
Nobuhiko Yabuki / Teruhiko Yumura
- Nov. 91 Saul Bass Exhibition
- Dec. 92 13 Pop-up Greeting
- 1994**
- Jan. 93 Kiyoshi Awazu: H²O Earthman
- Feb. 94 The 6th Tokyo TDC Exhibition
- Mar. 95 Takahisa Kamiyo: Windscape Mindscape
- Apr. 96 Toshihiro Katayama Exhibition
- May 97 Kazumasa Nagai Exhibition
- Jun. 98 Dutch Graphic Design A Century
- Jul. 99 1994 Tokyo ADC Exhibition
- Aug.-Sep. 100 Graphic Goods: Gifts from Design
- Sep. 101 Koga Hirano: The Power of Letters
- Oct. Kyushu Nine Designers Nine Personalities
- Nov. 102 Yusaku Kamekura New Posters
- Dec. 103 Kenya Hara Exhibition
- Dec. Toshiko Tsuchihashi, Sachiko Nakamura,
Meg Hosoki: Favorites
- 1995**
- Jan. 104 Bruno Munari Exhibition
- Feb. 105 Book Design in Japan 1946-95
- Mar. 106 The 7th Tokyo TDC Exhibition
- Apr. 107 Pieter Brattinga: Designs for People
- May 108 Ikko Tanaka: Man and Writing
- Jun. 109 Niklaus Troxler Posters
- Jul. 110 1995 Tokyo ADC Exhibition
- Aug. 111 Rhythm & Hues Computer Graphics:
A Postcard from Hollywood
- Sep. 112 Tamotsu Yagi: A View of Nature
- Sep. 200 Graphic Designers of the World:
ggg 10th Anniversary and 20 ggg Books
- Oct. 113 Transition of Modern Typography-1
- Nov. 114 Masatoshi Toda: Ear Ear Land
- Dec. 115 50 Years in Japanese Illustrations
- 1996**
- Jan. 116 Yasuhiro Yomogida:
"yurayura" Swaying in Edo
- Feb. 117 Transition of Modern Typography-2
- Mar. 118 NIPPONJIN:
Posters by 23 Artists in Sao Paulo
- Apr. 119 The 8th Tokyo TDC Exhibition
- May 120 Contemporary Graphics in Hungary:
DOPP at GGG
- Jun. 121 Shigeo Katsuo's Typographic Art:
Departure
- Jul. 122 1996 Tokyo ADC Exhibition
- Aug. 123 John Maeda Paper and Computers
- Sep. 124 K2 - Seitaro Kuroda /
Keisuke Nagatomo: Two Chairs
- Oct. 125 Czech Avant-Garde Book Design
1920s-'30s
- Nov. 126 Graphic Wave 1996: Katsunori Aoki /
Taku Satoh / Toshio Yamagata
- Dec. 127 Alain Le Querrec Exhibition
- 1997**
- Jan. 128 Nisuke Shimotani: Man
Collection of CCGA:
The Prints of Josef Albers
- Feb. 129 Tadashi Ohashi: Warm Veggies
- Mar. 130 The 10th Anniversary of Tokyo TDC
- Apr. 131 Masayoshi Nakajo: OOO
- May 132 Special Issue "Ecology"
by 8 Magazines in Japan
- Jun. 133 Tadanori Yokoo's Poster Exhibition:
Lucky God Yokoo
- Jul. 134 1997 Tokyo ADC Exhibition
- Aug. 135 Toshifumi Kawahara and
Polygon Pictures: Rocky Hola Shop
- Sep. 136 10 Mexican Graphic Designers
- Oct. 137 Graphic Wave 1997: Kan Akita /
Satoe Inoue / Osamu Fukushima
- Oct. The 10th Anniversary of
Masaru Katsumi Award
- Nov. 138 Shigeo Fukuda's Poster Exhibition:
Supporter
- Dec. 139 Global Exhibition: Duo Posters by
33 Designers from around the World
- 1998**
- Jan. 140 Hachiro Suzuki: Bro Art & AD
- Feb. 141 Odermatt + Tissot Graphic Design
- Mar. 142 Stasys Eidrigevicius Exhibition
- Apr. 143 Tokyo TDC 1998 Exhibition
- May 144 Studio Dumber Exhibition
- Jun. 145 Opera Lesson by Yoko Yamamoto
- Jul. 146 1998 Tokyo ADC Exhibition
- Aug. 147 Yoichiro Kawaguchi:
Voyage through a Cyber Universe
- Sep. 148 Graphic Wave 1998: Tatsuo Ebina /
Keiko Hirano / Ken Miki
- Oct. 149 Gunter Rambow in Tokyo
- Nov. 150 Philippe Apeloig:
Posters in the Context of French Culture
- Dec. 151 Herbert Leupin Exhibition
- 1999**
- Jan. 152 Furoshiki Graphics by 18 Designers
from around the World
- Feb. 153 Transition of Modern Typography in
Japan 1946-95
- Mar. 154 Tsunehisa Kimura Photo Graphics: What?
The Works of Seiichi Horiuchi
- Apr. 155 Tokyo TDC 1999 Exhibition
- May 156 Contemporary Bulgarian Graphic
Design Exhibition
- Jun. 157 Katsuhiko Hibino: Abduction
- Jul. 158 1999 Tokyo ADC Exhibition
- Jul. John Maeda: One-line.com
- Aug. 159 Kijuro Yahagi Exhibition
- Sep. 160 Graphic Wave 1999: Mamoru Suzuki /
Kei Matsushita / Hiroshi Yonemura
- Oct. 161 An Exhibition of FUSE Posters and Fonts
- Nov. 162 Keizo Matsui Exhibition
- Dec. 163 Paul Davis Posters
- Dec. Irving Penn Regards
the Works of Issey Miyake
- 2000**
- Jan. 164 Graphic Message for Ecology
Kishin Shinoyama & Manuel Legris:
A L'Opera de Paris
- Feb. 165 Bruno Monguzzi:
A Poet of Form and Function
- Mar. 166 Kenji Itoh: The Medical Journal
STETHOSCOPE - A Half Century of
Journal Cover Designs -
- Apr. 167 Tokyo TDC 2000 Exhibition
- May 168 Poster Works Nagoya 12:
Shigeo Okamoto + 11 Designers
- Jun. 169 Osaka Pop Exhibition:
"kotekote" Graphics
- Jul. 170 2000 Tokyo ADC Exhibition

- Aug. 171 The Epoch of the Japan Advertising Artists Club [JAAC]
- Sep. 172 Graphic Wave 2000:Gugi Akiyama / Tycoon Graphics / Hideki Nakajima
- Oct. 173 Tzotom Toda: D-ZONE
- Nov. 174 Pierre Bernard: Be Realistic, Demand the Impossible!
- Dec. 175 The Book & The Computer: New Parameters across Time and Space
- 2001**
- Jan. 176 2001 Yasuhiko Kida
- Feb. 177 Italo Lupi: Not Just Graphics
- Mar. 178 "Spring has come" Shin Matsunaga, Play Together with Details
- Apr. 179 Tokyo TDC 2001 Exhibition
- May 180 Visual Identity for Danish State Institutions by Kontrapunkt, Copenhagen
- Jun. 181 Typography of Hiromu Hara
- Jul. 182 2001 Tokyo ADC Exhibition
- Aug. 183 Tadahito Nadamoto: Patterns from Everyday Life
- Sep. 184 Graphic Wave 2001: Katsuhiko Shibuya / Kazufumi Nagai / Kodue Hibino
- Oct. 185 Hangul Poster Exhibition
- Nov. 186 Makoto Saito Exhibition
- Dec. 187 Chip Kidd Exhibition
- 2002**
- Jan. 188 Uwe Loesch Exhibition
- Feb. 189 Akira Uno Exhibition
- Mar. 190 Design Education: I, We, They, The Post -St Joost Method of Design Education
- Apr. 191 Tokyo TDC 2002 Exhibition
- May 192 Draft Exhibition
- Jun. 193 Alan Chan: Oriental Passion Western Harmony
- Jun. Yasuji Hanamori and "Kurashi no Techo"
- Jul. 194 2002 Tokyo ADC Exhibition
- Aug. 195 Noriyuki Tanaka: Out of Design
- Sep. 196 Graphic Wave 2002: Hitomi Sago / Yasuhiro Sawada / Norito Shinmura
- Oct. 197 Sun-ad: The People
- Nov. 198 Graphic Shows Brazil: Today's Brazilian Book Design
- Dec. 199 Herb Lubalin Exhibition
- 2003**
- Jan. 200 Ikko Tanaka: Poster and Graphic Art
- Feb. 201 Sadik Karamustafa Graphic Design: Journeys and Rituals, Words and Images
- Mar. 202 Contemporary Chinese Graphic Design Exhibition
- Apr. 203 Tokyo TDC 2003 Exhibition
- May 204 Fabrica 1994 / 03: From Chaos to Order and Back
- Jun. 205 Hajime Sorayama The Exhibition
- Jul. 206 2003 Tokyo ADC Exhibition
- Aug. 207 Minoru Niijima: Interaction of Colors and Fonts
- Sep. 208 Graphic Wave 2003: Kenjiro Sano / Nagi Noda / Kazunari Hattori
- Oct. 209 Advertising Returns! Art Direction by Soeda Takayuki
- Nov. 210 Stefan Sagmeister Exhibition
- Dec. 211 Takashi Kono: Modernist of the Showa Era 1906-99
- 2004**
- Jan. 212 Kazumasa Nagai Poster Exhibition
- Feb. 213 Keiji Ito / Hiroki Taniguchi / Hiro Sugiyama Exhibition
- Mar. 214 The Magazine Design Studio Cap Exhibition
- Apr. 215 Tokyo TDC 2004 Exhibition
- May 216 Taku Satoh: Plasticity
- Jun. 217 Danish Posters: Over the Past 10 Years, Selected by Danish Design Centre
- Jul. 218 2004 Tokyo ADC Exhibition
- Aug. 219 The Work of Barnbrook Design: Friendly Fire
- Sep. 220 Graphic Wave 2004: Aoshi Kudo / Graph / Namaiki
- Oct. 221 Wind and Lighting: A Half-Century of Magazine Design by Kohei Sugiura
- Nov. 222 Kashiwa Sato: Beyond
- Dec. 223 Another Side of Ayao Yamana 1920s-70s
- 2005**
- Jan. 224 The Seven Faces of Asaba
- Feb. 225 Balarinji: Ancient Culture - Contemporary Design
- Mar. 226 Katsunori Aoki XX
- Apr. 227 Tokyo TDC 2005 Exhibition
- May 228 The Graphic Design of Makoto Wada
- Jun. 229 Chermayeff & Geismar Inc: Designing over Four Decades
- Jul. 230 2005 Tokyo ADC Exhibition
- Aug. 231 Masahiko Sato Laboratory: Problems and Their Solutions
- Sep. 232 Graphic Wave 2005: Ichiro Tanida / Ichiro Higashizumi / Chie Morimoto
- Oct. 233 Laboratoires CCCP = Dr. Peche + Melle. Rose
- Nov. 234 Shin Sobue + cozfish Exhibition
- Dec. 235 Swiss Poster Art: 100 Years of Creation
- 2006**
- Jan. 236 Yusaku Kamekura 1915-1997: A Leading Pioneer in the World of Japanese Design
- Feb. 237 Nagi Noda: Hanpanda Contemporary Art
- Mar. 238 Cyan Exhibition
- Apr. 239 Tokyo TDC 2006 Exhibition
- May 240 Kazufumi Nagai: Hakuodo Design "Brands and Designs"
- Jun. 241 Keiichi Tanaami-ism
- Jul. 242 2006 Tokyo ADC Exhibition
- Aug. 243 Alexander Gelman: New York Connection
- Sep. 244 Graphic Wave 2006 School of Design: Masayoshi Kodaira / Naomi Hirabayashi / Manabu Mizuno / Eiji Yamada
- Sep. AGI Congress 2006 in Japan: Kakejiku Exhibition
- Oct. 245 Radical Advertisement [Norio Nakamura + Masahiko Sato] Activities No.6
- Nov. 246 Hideki Nakajima: Clear in the Fog
- Dec. 247 Yoshio Hayakawa: Witness to the Dawn of Japanese Design
- 2007**
- Jan. 248 Exhibitions: Graphic Messages from ggg & ddd 1986-2006 [Part I]
- Feb. Exhibitions: Graphic Messages from ggg & ddd 1986-2006 [Part II]
- Mar. 249 Kimura Katsu Ten: Toy Box Ten
- Apr. 250 Tokyo TDC 2007 Exhibition
- May 251 helmut schmid: design is attitude
- Jun. 252 Masaaki Hiromura: 2D ↔ 3D
- Jul. 253 2007 Tokyo ADC Exhibition
- Aug. 254 The Warsaw Wind 1966-2006: Gold Prize Winning Entries from the Warsaw International Poster Biennale
- Sep. 255 Ginza Salone: Kenjiro Sano
- Oct. 256 Shinya Nakajima TV Commercial: Shinya Nakajima with 29 Art Directors
- Nov. 257 Welcome to Magazine Pool: Ten Creators Crossing Boundaries for Magazine Design
- Dec. 258 Aoba Show: Masuteru Aoba One-Man Show
- 2008**
- Jan. 259 Toda Today: Poster Art by Seiju Toda
- Feb. 260 Testimonies from Twenty Pioneers of the Graphic Design Era: Interviews by Hiroshi Kashiwagi
- Mar. 261 Textasy: Brody Neuwenschwander
- Apr. 262 Tokyo TDC 2008 Exhibition
- May 263 Alan Fletcher: The Father of British Graphic Design
- Jun. 264 Hiroshi Sasaki, Leader of a Cheering Squad for the Japanese Advertising World
- Jul. 265 2008 Tokyo ADC Exhibition
- Aug. 266 Now Updating-- Interactive Design Works by THA Ltd. / Yugo Nakamura
- Sep. 267 The Design Cycle of Keiko Hirano: Origin, Terminus, Origin
- Oct. 268 White: Kenya Hara Exhibition
- Nov. 269 M/M (Paris) The Theatre Posters
- Dec. 270 OYKOT Wieden + Kennedy Tokyo: 10 Years of Fusion
- 2009**
- Jan. 271 Brilliant Rivalry: Works by Outstanding Designers in the DNP Archives of Graphic Design
- Feb. 272 Helvetica forever: Story of a Typeface
- Mar. 273 Draft: Branding and Art Directors
- Apr. 274 Tokyo TDC 2009 Exhibition
- May 275 Kijuro Yahagi: Magnetic Vision / 100 New Works
- Jun. 276 Max Huber - a Graphic Designer
- Jul. 277 2009 Tokyo ADC Exhibition
- Aug. 278 Hosoya Gan Last Show: Exhibition of an Art Director & Graphic Designer
- Sep. 279 Tadahito Nadamoto, Akira Uno, Makoto Wada and Tadanori Yokoo Show
- Oct. 280 Toshio Yamagata Exhibition
- Nov. 281 Issay Kitagawa
- Dec. 282 Kokoku Hihyo: End of One Era, Start of Another
- 2010**
- Jan.-Feb. 283 DNP Graphic Design Archives Collection II Ikko Tanaka Posters 1953-1979
- Mar. 284 DNP Graphic Design Archives Collection III Shigeo Fukuda's Visual Jumping
- Apr. 285 Tokyo TDC 2010 Exhibition
- May 286 Talking the Dragon: Tsuguya Inoue
- Jun. 287 NB@ggg: Neville Brody 2010
- Jul. 288 2010 Tokyo ADC Exhibition
- Aug. 289 Ralph Schraivogel Exhibition
- Sep. 290 The Push Pin Paradigm: Seymour Chwast | Paul Davis | Milton Glaser | James McMullan
- Oct. 291 Seas and Mountains and Norito Shinmura
- Nov. 292 Kazunari Hattori: November 2010
- Dec. 293 Euphrates: From Research to Expression
- 2011**
- Jan. 294 Shueitai 100
- Feb. 295 Ian Anderson / The Designers Republic C(H)-ōme (+81/3)
- Mar. 296 Design Fumio Tachibana
- Apr. 297 Tokyo TDC 2011 Exhibition
- May 298 Sato Koichi Poster Exhibition
- Jun. 299 Raymond Savignac; at the Age of 41, Maestro Born from Poster [Monsavon au lait]
- Jul. 300 2011 Tokyo ADC Exhibition
- Aug. 301 [gggg] Groovisions Exhibition
- Sep. 302 Form, Color and Structure: The Sensual World of Aoshi Kudo
- Oct. 303 100 ggg Books 100 Graphic Designers
- Nov. 304 SVA MFA Design Ideopolis-Tokyo
- Dec. 305 Luminous Mandala: Book Designs of Kohei Sugiura
- 2012**
- Jan.-Feb. 306 DNP Graphic Design Archives Collection IV The 10th Memorial to Ikko Tanaka: Ikko Tanaka Posters 1980-2002
- Mar. 307 Rodchenko - Innovator of Russian Avant-Garde -
- Apr. 308 Tokyo TDC 2012 Exhibition
- May 309 KIGI: Ryosuke Uehara and Yoshie Watanabe
- Jun. 310 Jianping He Flashback
- Jul. 311 2012 Tokyo ADC Exhibition
- Aug. 312 The Posters 1983-2012: The Prize - Winning Works from The International Poster Triennial in Toyama -
- Sep. 313 Bunpei Yorifuji's Summer Homework Project
- Oct. 314 AGI (Alliance Graphique Internationale) Exhibition
- Nov. 315 Tadanori Yokoo: The First Book Design Exhibition
- Dec. 316 Theseus Chan: WERK No. 20: Ginza The Extremities of the Printed Matter
- 2013**
- Jan. 317 Shin Matsunaga Poster 100
- Feb. 318 Kari Piippo Posters & Drawings - Simple, Strong and Sharp -
- Mar. 319 DNP Graphic Design Archives Collection V LIFE - Kazumasa Nagai Poster Exhibition
- Apr. 320 Tokyo TDC 2013 Exhibition
- May 321 KM Karel Martens
- Jun. 322 Why Not Associates - We Never Had a Plan So Nothing Could Go Wrong
- Jul. 323 2013 Tokyo ADC Exhibition
- Aug. 324 Ellie Omiya Exhibition
- Sep. 325 PARTY Not There.



1992-2022

Oct. 326	Rikako Nagashima: "Between Human and Nature"	Sep.-Nov. 362	Typographic Composition, Yoshihisa Shirai	1992	Jul.-Aug. 51	Contemporary Graphics in Hungary: DOPP at DDD	
Nov. 327	Jan Tschichold Exhibition	Nov.-Jan. 363	Marimekko Spirit – Paavo Halonen / Maija Louekari / Aino-Maija Metsola	Jan.-Feb. 1	Trans-Art '91	Aug.-Sep. 52	1996 Tokyo ADC Exhibition
Dec. 328	Tomaszewski, The Poetic Spirit			Mar. 2	Ivan Chermayeff: Collages	Sep.-Oct. 53	John Maeda Paper and Computers
2014		2018		Apr.-May 3	The 4th Tokyo TDC Exhibition	Oct.-Nov. 54	Alain Le Querrec Exhibition
Jan. 329	Mitsuo Katsui: Design of Symptom	Jan.-Mar. 364	Kouga Hirano and Shobunsha	May-Jun. 4	Rick Valicenti Exhibition	Nov.-Dec. 55	Woody Pirtle: Maximum Message Minimum Means
Feb. 330	"Putting Finger" Masahiko Sato + Tatsuya Saito	Apr. 365	Tokyo TDC 2018 Exhibition	Jun.-Jul. 5	Seymour Chwast: Painted Metal Sculpture	1997	
Mar. 331	Osamu Fukushima and the Future of Design: Social Design & Poster	May-Jun. 366	wim crouwel fascinated by the grid	Jul.-Aug. 6	Design, Print, Paper Exhibition	Jan.-Feb. 56	João Machado Exhibition
Apr. 332	Tokyo TDC 2014 Exhibition	Jul.-Aug. 367	Harumi Yamaguchi × Yoshirotten Harumi's Summer	Aug.-Sep. 7	Vaughan Oliver Exhibition	Feb.-Mar. 57	K2 Osaka Exhibition: Seitaro Kuroda / Keisuke Nagatomo
May 333	phono / graph – sound, letters, graphics	Sep.-Oct. 368	Tadanori Yokoo: The Complete Drawings for "Genka" by Jakuchō Setouchi 1974-1975	Oct. 8	Makoto Nakamura Solo Exhibition	Mar.-Apr. 58	Graphic Design in China
Jun. 334	Nagai Hiroaki: Graphic Jam Zukō	Dec. 369	Art Direction Japan 2018 Exhibition	Oct.-Nov. 9	Michael Mabry Exhibition	Apr.-May 59	The 10th Anniversary of Tokyo TDC
Jul. 335	2014 Tokyo ADC Exhibition	Dec.-Jan. 370	Haruka Misawa – Again and Again: Ideas Coming To Mind	Nov.-Dec. 10	Tadahito Nadamoto / Akira Uno / Makoto Wada / Harumi Yamaguchi Exhibition	May-Jun. 60	10 Mexican Graphic Designers
Aug. 336	Binokodu Cells: "Kodue Hibino + Nihongo de Asobo"	2019		1993		Jul. 61	Cato Design Inc. : Design by Thinking
Sep. 337	So French: Michel Bouvet Posters	Feb.-Mar. 371	Paula Scher: Serious Play	Jan.-Feb. 11	Furoshiki by 18 Artists	Aug.-Sep. 62	1997 Tokyo ADC Exhibition
Oct. 338	Semitransparent Design: Boring / Bored	Apr. 372	Tokyo TDC 2019 Exhibition	Feb.-Mar. 12	Why Not Associates Exhibition	Sep.-Oct. 63	Ralph Schraivogel: Shifted Structures
Nov. 339	Persona 1965: Exhibition of Graphic Design in Tokyo	May-Jun. 373	Tsuguya Inoue: Beginnings	Mar.-Apr. 13	Allen Hori + Robert Nakata: Displaced Voices	Oct.-Nov. 64	James Victore: Post No Bills
Dec. 340	Inside the Mind of Ryoji Arai	Jul.-Aug. 374	Keiichi Tanaami Great Journey	Apr.-May 14	1992 Tokyo ADC Exhibition	Nov.-Dec. 65	Global Exhibition: Duo Posters by 33 Designers from around the World
2015		Aug.-Oct. 375	Sculptural Type: Kontrapunkt	May-Jun. 15	Russell Warren-Fisher Exhibition	1998	
Jan. 341	Katsumi Asaba: Asaba's Typography.	Oct.-Nov. 376	Art Direction Japan 2019 Exhibition	Jun.-Jul. 16	The 5th Tokyo TDC Exhibition	Jan.-Feb. 66	Faydherbe / De Vringer: Looking Back into the Future
Feb. 342	Line in the sand: Paul Davis	Nov.-Jan. 377	What's Karl Gerstner? Thinking in Motion	Jul.-Aug. 17	Imagination of Letters	Feb.-Mar. 67	Jean-Benoît Lévy: Visual Activity
Mar. 343	APPLE+ Learning to Design, Designing to Learn Ken Miki	2020		Aug.-Sep. 18	Design, Print, Paper Exhibition Part II	Mar.-Apr. 68	"Troika" 3 Dimensions of Russian Graphic Design
Apr. 344	Tokyo TDC 2015 Exhibition	Jan.-Mar. 378	Yoichiro Kawaguchi: The Intelligence of Life	Sep.-Oct. 19	Bill Thorburn Exhibition	Apr.-May 69	Philippe Apeloig: Posters in the Context of French Culture
May 345	2 Men Show: Stanley Wong × Anothermountainman	Jun.-Aug. 379	Tokyo TDC 2020 Exhibition	Oct.-Nov. 20	U.G. Sato's Poster Exhibition: Treedom	Jun. 70	Tokyo TDC 1998 Exhibition
Jun. 346	Rhizomatics: The Blind Spot of Graphic Design	Oct.-Nov. 380	Poems of Eternal Life: The World of Kazumasa Nagai's Images and Words	Nov.-Dec. 21	Mitsuo Katsui: The Blessing of Light	Jul. 71	Studio Dumber Exhibition
Jul. 347	2015 Tokyo ADC Exhibition	Dec.-Mar. 381	Survive – Eiko Ishioka	Dec.-Jan. 22	8 Designers in Today's Hong Kong	Aug.-Sep. 72	1998 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 348	Lars Müller BOOKS Analogue Reality	2021		Apr.-May 26	1993 Illustration 4: Mizumaru Anzai / Yosuke Kawamura / Nobuhiko Yabuki / Teruhiko Yumura	Sep.-Oct. 73	Zafryki: Piotr Młodożeniec / Marek Sobczyk
Sep. 349	Yoshiaki Irobe: Wall	Apr.-May 382	Tokyo TDC 2021 Exhibition	May-Jun. 27	Jennifer Morla Exhibition	Oct.-Nov. 74	David Tartakover: Posters No Commercial Value
Oct. 350	21st Century Rimpa Posters: Competitive Works by 10 Graphic Designers	Jun.-Jul. 383	Sports Graphic Exhibition	Jun.-Jul. 28	Kazumasa Nagai Exhibition	Nov.-Dec. 75	Taiwan 4: Yeh Kuo-Sung / Yu Ming-Lung / Shih Ling-Hung / Leslie Chan
Nov. 351	d3i d3i d3i Dainippon Type Organization	Jul.-Aug. 384	Special Exhibition: Olympic Language: Exploring the Look of the Games	Aug.-Sep. 29	Uwe Loesch Exhibition	1999	
Dec. 352	Special Exhibition (Venue: Chiyoda City's Hibiya Library and Museum)	Sep.-Oct. 385	Kasai Kaoru Exhibition: NOSTALGIA	Sep.-Oct. 31	Design, Print, Paper Exhibition Part III	Jan.-Feb. 76	Furoshiki Graphics by 18 Designers from around the World
	DNP Graphic Design Archives Collection THE NIPPON POSTERS	Nov. 385	Art Direction Japan 2020-2021 Exhibition	Oct.-Nov. 32	David Carson + Gary Koepke Free-Form Typography: The New U.S. Editorial Design	Feb.-Mar. 77	Pierre Neumann: Swiss Landscape
2016		Dec.-Mar. 386	Saul Steinberg: Lines that Transform the Real World	Dec. 33	Yusaku Kamekura New Posters	Mar.-Apr. 78	The Graphic Design of Paula Scher: Type is Image
Jan.-Mar. 353	Special Exhibition (Venue: Chiyoda City's Hibiya Library and Museum) Organized by Chiyoda City's Hibiya Library and Museum / Co-organized by DNP Foundation for Cultural Promotion Shin Sobue + co:fish BOOK DESIGN	2022		1995		May-Jun. 79	Graphic Design from Hamburg: Holger Matthies + Christiane Freiling
Apr.-May 352	ginza graphic gallery 30th Anniversary Bridge Over Troubled Water: ggg Exhibition Posters 1986-2016	Jan.-Feb. 34	German Montalvo Exhibition: From Sunrise to Sunset	Jan.-Feb. 34	German Montalvo Exhibition: From Sunrise to Sunset	Jun.-Jul. 80	Tokyo TDC 1999 Exhibition
Jun. 353	Tokyo TDC 2016 Exhibition	Feb.-Mar. 35	Bruno Munari Exhibition	Feb.-Mar. 35	Bruno Munari Exhibition	Jul.-Aug. 81	Jan Rajlich Jr.: Millhouse of the Times
Jul.-Sep. 354	2016 Tokyo ADC Exhibition	Mar.-Apr. 36	Grappa Design: from east to far east	Mar.-Apr. 36	Grappa Design: from east to far east	Aug.-Sep. 82	1999 Tokyo ADC Exhibition
Sep.-Oct. 355	Nosigner: Reason Behind Forms	Apr.-May 37	The 7th Tokyo TDC Exhibition	Apr.-May 37	The 7th Tokyo TDC Exhibition	Sep.-Oct. 83	Scott Makela: Wide Open
Nov.-Dec. 356	Enomoto Ryoichi Kokaiki	May-Jun. 38	Michel Bouvet: L'affiche, un art de la lue	May-Jun. 38	Michel Bouvet: L'affiche, un art de la lue	Oct.-Nov. 84	The World of Chaz Maviyane-Davies
2017		Jun.-Jul. 39	Ikko Tanaka: Man and Writing	Jun.-Jul. 39	Ikko Tanaka: Man and Writing	Nov.-Dec. 85	2 Men from Macau: Ung Vai Meng / Victor Hugo Marreiros
Jan.-Mar. 357	Masayoshi Nakajo IN & OUT	Jul.-Aug. 40	Terrelonge Exhibition	Jul.-Aug. 40	Terrelonge Exhibition	2000	
Apr. 358	Tokyo TDC 2017 Exhibition	Aug.-Sep. 41	1995 Tokyo ADC Exhibition	Aug.-Sep. 41	1995 Tokyo ADC Exhibition	Jan.-Feb. 86	Graphic Message for Ecology
May-Jun. 359	Roman Cieśliewicz Melting Mirage	Sep.-Oct. 42	Design, Print, Paper Exhibition Part IV	Sep.-Oct. 42	Design, Print, Paper Exhibition Part IV	Feb.-Mar. 87	Keizo Matsui Exhibition
Jul. 360	2017 Tokyo ADC Exhibition	Oct.-Nov. 43	Peret Torrent Exhibition	Oct.-Nov. 43	Peret Torrent Exhibition	Mar.-Apr. 88	Mar. Davis Posters
Jul. 361	Special Exhibition: Farewell! Keisuke Nagatomo	Nov.-Dec. 44	6 Designers in Asia Exhibition	Nov.-Dec. 44	6 Designers in Asia Exhibition	Apr.-May 89	Osaka Pop Exhibition: "kotekote" Graphics
Aug.-Sep. 361	Apeloiggg Tokyo Philippe Apeloig Exhibition	1996		Jan.-Feb. 45	50 Years in Japanese Illustrations	May-Jun. 90	Tokyo TDC 2000 Exhibition
		Jan.-Feb. 45	50 Years in Japanese Illustrations	Feb.-Mar. 46	Margo Chase: Digital + Organic	Jun.-Jul. 91	Anthony Beeke Posters: Body and Soul
		Feb.-Mar. 46	Margo Chase: Digital + Organic	Mar.-Apr. 47	Werner Jeker: Graphic Design	Jul.-Sep. 92	Pierre Bernard: Be Realistic, Demand the Impossible!
		Mar.-Apr. 47	Werner Jeker: Graphic Design	Apr.-May 48	Posters from Gunter Rambow: Comments on society	Sep.-Oct. 93	2000 Tokyo ADC Exhibition
		Apr.-May 48	Posters from Gunter Rambow: Comments on society	May-Jun. 49	The 8th Tokyo TDC Exhibition	Oct.-Nov. 94	Italo Lupi: Not Just Graphics
		May-Jun. 49	The 8th Tokyo TDC Exhibition	Jun.-Jul. 50	Kari Piippo: Simple, Strong, and Sharp		
		Jun.-Jul. 50	Kari Piippo: Simple, Strong, and Sharp				

Nov.-Dec.	95	Design Education: The Classroom Approach of Holger Matthies, Berlin University of the Arts	Oct.-Nov.	134	Posters from the Czech Republic: Collection 1960-2003 of the Museum of Decorative Arts in Prague	2010	Jan.-Mar.	172	Graphic West 2: Sensory Boxes	Apr.-May	207	21st Century Rimpa Posters: Competitive Works by 10 Graphic Designers		
2001			Nov.-Dec.	135	Balarinji: Ancient Culture – Contemporary Design	Jan.-Mar.	172	Graphic West 2: Sensory Boxes	Mar.-May	173	Issay Kitagawa	May-Jul.	208	Rhizomatics: The Blind Spot of Graphic Design
Jan.-Feb.	96	2001 Yasuhiko Kida	2005			May-Jul.	174	Tokyo TDC 2010 Exhibition	Jul.-Sep.	175	DNP Graphic Design Archives Collection III Shigeo Fukuda's Visual Jumping	Jul.-Aug.	209	Tokyo TDC 2016 Exhibition
Feb.-Mar.	97	Visual Identity for Danish State Institutions by Kontrapunkt, Copenhagen	Jan.-Feb.	136	Wind and Lighting: A Half-Century of Magazine Design by Kohei Sugiura	Sep.-Oct.	176	2010 Tokyo ADC Exhibition	Nov.-Dec.	177	DNP Graphic Design Archives Collection II Ikko Tanaka Posters 1953-1979	Sep.-Oct.	210	Materiality-Immateriality Design & Innovation University Collaborative Exhibition: Kyoto Institute of Technology Art Manager Training Program "How Will You Go, and Where? Travel is Wonderful"
Mar.-Apr.	98	Poster of Salzburg Festival	Feb.-Mar.	137	Cyan: 13 Years in Berlin	2011			Jan.-Mar.	178	Graphic West 3: phono / graph – Sound · Letters · Graphics –	Dec.		University Collaborative Exhibition: Kyoto University of Art & Design Project Center "experimental studies post past"
May-Jun.	99	Tokyo TDC 2001 Exhibition	Mar.-Apr.	138	Kashiwa Sato: Beyond	Mar.-May	179	Shueitai 100	May-Jul.	180	Tokyo TDC 2011 Exhibition	2017		
Jun.-Jul.	100	Chip Kidd Exhibition	Apr.-May	139	Mevis & Van Deursen Exhibition	Jul.-Sep.	181	Kazunari Hattori: Summer 2011 in Osaka	May-Jul.	181	Kazunari Hattori: Summer 2011 in Osaka	Jan.-Feb.	211	Graphics and Music
Jul.-Aug.	101	Hangul Poster Exhibition	May-Jun.	140	Tokyo TDC 2005 Exhibition	Sep.-Oct.	182	2011 Tokyo ADC Exhibition	May-Jul.	212	Masayoshi Nakajo IN & OUT	Jul.-Aug.	213	Tokyo TDC 2017 Exhibition
Aug.-Sep.	102	2001 Tokyo ADC Exhibition	Jul.	141	Laboratoires CCCP = Dr. Peche + Melle. Rose	Nov.-Dec.	183	100 ggg Books 100 Graphic Designers	Jul.-Aug.	213	Tokyo TDC 2017 Exhibition	Sep.-Oct.	214	Kouga Hirano and Shobunsha University Collaborative Exhibition: Seian University of Art & Design ".communication"
Sep.-Oct.	103	Wolfgang Weingart: My Way to Typography	Aug.-Sep.	142	2005 Tokyo ADC Exhibition	2012			Nov.		University Collaborative Exhibition: Seian University of Art & Design ".communication"	Dec.-Mar.	215	wim crouwel fascinated by the grid
Oct.-Nov.	104	"Spring has come" Shin Matsunaga, Play Together with Details	Sep.-Oct.	143	Katsunori Aoki XX	Jan.-Mar.	184	Graphic West 4: "Okumura Akio and Works" Exhibition	Dec.-Mar.	215	wim crouwel fascinated by the grid	2018		
Nov.-Dec.	105	Design Education II : I, We, They. The Post-St Joost Method of Design Education	Oct.-Nov.	144	German AGI Graphic Design: Perfect Form	Mar.-May	185	DNP Graphic Design Archives Collection IV The 10th Memorial to Ikko Tanaka: Ikko Tanaka Posters 1980-2002	Apr.-Jun.	216	Graphic West 7: YELLOW PAGES	Apr.-Jun.	216	Graphic West 7: YELLOW PAGES
2002			Nov.-Dec.	145	The Graphic Design of Makoto Wada	May-Jul.	186	Tokyo TDC 2012 Exhibition	Jul.-Aug.	217	Tokyo TDC Exhibition	Jul.-Aug.	217	Tokyo TDC Exhibition
Jan.-Feb.	106	Tadahito Nadamoto: Patterns from Everyday Life	2006			Jul.-Sep.	187	Fumio Tachibana Exhibition	Aug.-Oct.	218	Keiichi Tanaami Dialogue	Aug.-Oct.	218	Keiichi Tanaami Dialogue
Feb.-Mar.	107	Makoto Saito Exhibition	Jan.-Feb.	146	Swiss Poster Art: 100 Years of Creation	Sep.-Oct.	188	2012 Tokyo ADC Exhibition	Nov.-Dec.	219	University Collaborative Exhibition: Visual Design Lab of Kyoto City University of Arts "Learn Science through Graphics: The Story of Evolution"	Nov.-Dec.	223	Graphic West 8: Ryu Mieno Solo Exhibition 2011-2019 "Quibble"
Mar.-Apr.	108	Ott + Stein: Posters from Berlin	Feb.-Mar.	147	Graphic Thought Facility: GTF 50 Projects	Nov.-Dec.	189	The Posters 1983-2012: The Prize – Winning Works from The International Poster Triennial in Toyama –	2019			Jan.-Mar.	219	Typographic Composition, Yoshihisa Shirai
Apr.-May	109	Studio Tapiro: Posters for the Venice Biennale	Mar.-Apr.	148	Nagi Noda: Hanpanda Contemporary Art	Jan.-Mar.	190	Graphic West 5: Type trip to Osaka typographics ti: 270	Mar.-Jun.	220	Tamon Yahagi / engawa: the open book veranda	Mar.-Jun.	220	Tamon Yahagi / engawa: the open book veranda
May-Jun.	110	Tokyo TDC 2002 Exhibition	Apr.-May	149	Bruno Oldani Exhibition	Mar.-Apr.	191	[dddg] Groovisions Exhibition	Jun.-Aug.	221	Heisei Graphics	Jun.-Aug.	221	Heisei Graphics
Jul.	111	Posters from Vienna: The Vienna Municipal Library Archive 1883-2002	May-Jun.	150	Tokyo TDC 2006 Exhibition	May-Jun.	192	Tokyo TDC 2013 Exhibition	Aug.-Oct.	222	deValence – Systems as Playgrounds	Aug.-Oct.	222	deValence – Systems as Playgrounds
Jul.-Sep.	112	Ken Miki Exhibition	Jun.-Jul.	151	Black and White Posters Exhibition	Jul.-Aug.	193	DNP Graphic Design Archives Collection V LIFE – Kazumasa Nagai Poster Exhibition	Nov.-Dec.	223	Graphic West 8: Ryu Mieno Solo Exhibition 2011-2019 "Quibble"	Nov.-Dec.	223	Graphic West 8: Ryu Mieno Solo Exhibition 2011-2019 "Quibble"
Sep.-Oct.	113	2002 Tokyo ADC Exhibition	Aug.	152	2006 Tokyo ADC Exhibition	Sep.-Oct.	194	2013 Tokyo ADC Exhibition	2020			Jan.-Mar.	224	Design ZOO – Life meets design
Oct.-Nov.	114	Sadik Karamustafa: Journeys and Rituals	2007			Nov.-Dec.	195	Ellie Omiya Exhibition	Jan.-Mar.	224	Design ZOO – Life meets design	Jun.-Oct.	225	Kontrapunkt Type
Nov.-Dec.	115	Contemporary Chinese Graphic Design Exhibition	May-Jun.	153	Exhibitions: Graphic Messages from ggg & ddd 1986-2006	Jan.-Mar.	190	Graphic West 5: Type trip to Osaka typographics ti: 270	Jun.-Oct.	225	Kontrapunkt Type	Oct.-Dec.	226	Graphic Design of Food
2003			Jul.-Aug.	154	Tokyo TDC 2007 Exhibition	Mar.-Apr.	191	[dddg] Groovisions Exhibition	Oct.-Dec.	226	Graphic Design of Food	2021		
Jan.-Feb.	116	San-ad :The People	Aug.-Sep.	155	helmut schmid: design is attitude	May-Jun.	192	Tokyo TDC 2013 Exhibition	Jan.-Mar.	227	Graphic West 9: Sulki & Min	Jan.-Mar.	227	Graphic West 9: Sulki & Min
Feb.-Mar.	117	Ikko Tanaka: Poster and Graphic Art	Oct.-Nov.	156	2007 Tokyo ADC Exhibition	Jul.-Aug.	193	DNP Graphic Design Archives Collection V LIFE – Kazumasa Nagai Poster Exhibition	Apr.-Jul.	228	try try try: helmut schmid typography	Apr.-Jul.	228	try try try: helmut schmid typography
Mar.-Apr.	118	Fabrica 1994 / 03: From Chaos to Order and Back	Nov.-Dec.	157	Kimura Katsu Ten: Toy Box Ten	Oct.-Nov.	156	2007 Tokyo ADC Exhibition	Jul.-Sep.	229	Takeshi Kojima: One Dream	Jul.-Sep.	229	Takeshi Kojima: One Dream
Apr.-Jun.	119	Kan Tai-Keung and Freeman Lau: The Art and Design of Ink and Chairs	2008			Nov.-Dec.	157	Kimura Katsu Ten: Toy Box Ten	Oct.-Dec.	230	Survive - Eiko Ishioka	Oct.-Dec.	230	Survive - Eiko Ishioka
Jun.-Jul.	120	Tokyo TDC 2003 Exhibition	Jan.-Feb.	158	Welcome to Magazine Pool: Ten Creators Crossing Boundaries for Magazine Design	Jan.-Feb.	158	Welcome to Magazine Pool: Ten Creators Crossing Boundaries for Magazine Design	2022			Jan.-Mar.	231	Osamu Torinoumi Making Type: Like water, Like Air
Jul.-Aug.	121	Luba Lukova: From the Heart	Feb.-Apr.	159	Ginza Salone Osaka: Kenjiro Sano	Feb.-Apr.	159	Ginza Salone Osaka: Kenjiro Sano	Jan.-Mar.	201	Nagai Hiroaki: Graphic Jam Zukō in Kyoto	Jan.-Mar.	231	Osamu Torinoumi Making Type: Like water, Like Air
Aug.-Sep.	122	2003 Tokyo ADC Exhibition	Apr.-Jun.	160	Shinya Nakajima TV Commercial: Shinya Nakajima with 29 Art Directors	Apr.-Jun.	160	Shinya Nakajima TV Commercial: Shinya Nakajima with 29 Art Directors	Apr.-May	202	Lars Müller BOOKS Analogue Reality	Apr.-May	202	Lars Müller BOOKS Analogue Reality
Sep.-Oct.	123	Stefan Sagmeister Exhibition	Jun.-Jul.	161	Tokyo TDC 2008 Exhibition	Jun.-Jul.	161	Tokyo TDC 2008 Exhibition	Jun.-Jul.	203	Tokyo TDC 2015 Exhibition	Jun.-Jul.	203	Tokyo TDC 2015 Exhibition
Oct.-Nov.	124	Cultural Posters from the Collection of Die Neue Sammlung München	Aug.	162	Now Updating... Interactive Design Works by THA Ltd. / Yugo Nakamura	Aug.	162	Now Updating... Interactive Design Works by THA Ltd. / Yugo Nakamura	Aug.-Oct.	204	DNP Graphic Design Archives Collection VII 20th Century Rimpa: Ikko Tanaka nippon no Nippon: helmut schmid	Aug.-Oct.	204	DNP Graphic Design Archives Collection VII 20th Century Rimpa: Ikko Tanaka nippon no Nippon: helmut schmid
Nov.-Dec.	125	Hajime Sorayama The Exhibition	Sep.-Oct.	163	2008 Tokyo ADC Exhibition	Sep.-Oct.	163	2008 Tokyo ADC Exhibition	Nov.-Dec.	205	nippon no Nippon: helmut schmid	Nov.-Dec.	205	nippon no Nippon: helmut schmid
2004			Oct.-Nov.	164	Aoba Show: Masuteru Aoba One-Man Show	Oct.-Nov.	164	Aoba Show: Masuteru Aoba One-Man Show	2016			Jan.-Mar.	206	Asaba's Assimilation: Katsumi Asaba Exhibition
Jan.-Feb.	126	Advertising Returns!? Art Direction by Soeda Takayuki	Nov.-Dec.	165	Graphic West: Truth And / Or Virtue: Graphic Designs by Shinnoske Sugisaki and Yoshimaru Takahashi	Nov.-Dec.	165	Graphic West: Truth And / Or Virtue: Graphic Designs by Shinnoske Sugisaki and Yoshimaru Takahashi	Jan.-Mar.	201	Nagai Hiroaki: Graphic Jam Zukō in Kyoto	Jan.-Mar.	206	Asaba's Assimilation: Katsumi Asaba Exhibition
Feb.-Mar.	127	Kazumasa Nagai Poster Exhibition	2009			Jan.-Feb.	166	Helvetica forever: Story of a Typeface	Apr.-May	202	Lars Müller BOOKS Analogue Reality	Apr.-May	202	Lars Müller BOOKS Analogue Reality
Mar.-Apr.	128	Danish Posters: Over the Past 10 Years, Selected by Danish Design Centre	Jan.-Feb.	166	Helvetica forever: Story of a Typeface	Mar.-Apr.	167	Brilliant Rivalry: Works by Outstanding Designers in the DNP Archives of Graphic Design	Jun.-Jul.	203	Tokyo TDC 2015 Exhibition	Jun.-Jul.	203	Tokyo TDC 2015 Exhibition
Apr.-May	129	The Magazine Design Studio Cap Exhibition	Mar.-Apr.	167	Brilliant Rivalry: Works by Outstanding Designers in the DNP Archives of Graphic Design	Apr.-Jun.	168	Draft: Branding and Art Directors	Aug.-Oct.	204	DNP Graphic Design Archives Collection VII 20th Century Rimpa: Ikko Tanaka nippon no Nippon: helmut schmid	Aug.-Oct.	204	DNP Graphic Design Archives Collection VII 20th Century Rimpa: Ikko Tanaka nippon no Nippon: helmut schmid
May-Jun.	130	Tokyo TDC 2004 Exhibition	Apr.-Jun.	168	Draft: Branding and Art Directors	Jun.-Jul.	169	Tokyo TDC 2009 Exhibition	Nov.-Dec.	205	nippon no Nippon: helmut schmid	Nov.-Dec.	205	nippon no Nippon: helmut schmid
Jun.-Jul.	131	Pierre Mendell Exhibition	Jun.-Jul.	169	Tokyo TDC 2009 Exhibition	Jun.-Jul.	169	Tokyo TDC 2009 Exhibition	2016			Jan.-Mar.	206	Asaba's Assimilation: Katsumi Asaba Exhibition
Aug.-Sep.	132	2004 Tokyo ADC Exhibition	Aug.-Oct.	170	2009 Tokyo ADC Exhibition	Aug.-Oct.	170	2009 Tokyo ADC Exhibition	Jan.-Mar.	206	Asaba's Assimilation: Katsumi Asaba Exhibition	Jan.-Mar.	206	Asaba's Assimilation: Katsumi Asaba Exhibition
Sep.-Oct.	133	The Work of Barnbrook Design: Friendly Fire	Oct.-Dec.	171	Kijuro Yahagi: Magnetic Vision 60 / 100 New Works	Oct.-Dec.	171	Kijuro Yahagi: Magnetic Vision 60 / 100 New Works						

1995		Sep.-Dec.	27	3rd Exhibition of DNP Archives of Graphic Design: The Age of Individuality	2010		Sep.-Dec.	70	Frank Stella's Imaginary Places: 29th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection		
Apr.-Jul.	1	Graphic Vision Kenneth Tyler Retrospective Exhibition: Thirty Years of Contemporary American Prints			Mar.-Jun.	50	DNP Graphic Design Archives Collection II Ikko Tanaka Posters 1953-1979				
Aug.-Oct.	2	Roy Lichtenstein: Entablature → Nudes	2003		Jun.-Sep.	51	Roy Lichtenstein: 22nd Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection	2017			
Nov.-Jan.	3	The Prints of Robert Motherwell	Mar.-Apr.	28	Richard Gorman: Paintings and Paper Works	Sep.-Dec.	52	DNP Graphic Design Archives Collection III Shigeo Fukuda's Visual Jumping	Feb.	The 28th Denzen Print Award Exhibition	
1996			Apr.-Jun.	29	Paper as Color: 10th Exhibition of Prints from Tyler Graphics Archive Collection				Mar.-Jun.	71	DNP Graphic Design Archives Collection VI Shin Matsunaga Posters
Mar.-Apr.	4	American Prints Today: 1st Exhibition of Prints from Tyler Graphics Archive Collection	Jun.-Sep.	30	Frankenthaler: The Woodcuts	2011			Jun.-Sep.	72	Kano Mitsuo: On the Tips of Quivering Hues
Apr.-Jul.	5	The Prints of David Hockney	Sep.-Dec.	31	11th Exhibition of Prints from Tyler Graphics Archive Collection	Mar.	53	The World of Geometric Abstraction: 23rd Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection (Suspended because of The Great East Japan Earthquake)	Sep.-Dec.	73	The Two Abstractions of Josef and Anni Albers: 30th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Jul.-Oct.	6	Autonomous Color: Josef Albers	2004			Jun.-Sep.	54	Shueitai 100	2018		
Oct.-Jan.	7	Transcending Style: 2nd Exhibition of Prints from Tyler Graphics Archive Collection	Mar.-Jun.	32	The Golden Age of Illustration	Sep.-Dec.	55	The World of Geometric Abstraction: 23rd Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection	Feb.	The 29th Denzen Print Award Exhibition	
1997			Jun.-Sep.	33	Password: A Danish / Japanese Dialogue				Mar.-Jun.	74	A Select Few Colors: From the DNP Graphic Design Archives
Mar.-Jun.	8	The Graphics of James Rosenquist	Sep.-Dec.	34	Print Art of Today in Fukushima	Jun.-Sep.	56	The Artists Who Express through Prints: after 3.11	Jun.-Sep.	75	Kenji Kitagawa: Devices in Black – The Distance of Memory
Jun.-Sep.	9	Printed Abstraction: 3rd Exhibition of Prints from Tyler Graphics Archive Collection	2005			Mar.-Jun.	57	DNP Graphic Design Archives Collection IV Ikko Tanaka Posters 1980-2002	Sep.-Dec.	76	Helen Frankenthaler's Experimental Impressions: 31st Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Oct.-Nov.	10	Shinro Ohtake: Printing / Painting	Mar.-Jun.	35	The World of Contemporary American Woodcuts: 12th Exhibition of Prints from Tyler Graphics Archive Collection	Jun.-Sep.	58	The Expressive Appeal of Copperplate Prints: 24th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection	2019		
Dec.-Jan.	11	Line-Color-Image: 4th Exhibition of Prints from Tyler Graphics Archive Collection	Jun.-Sep.	36	Breathing Light: Shigenobu Yoshida	Mar.-Jun.	59	THE POSTERS 1983-2012 The Prize – Winning Works from The International Poster Triennial in Toyama –	Mar.-Jun.	77	Heisei Graphics
1998			Oct.-Dec.	37	decade – CCGA and Six artists	Jun.-Sep.	60	Lithographs As Contemporary Prints: 25th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection	Jun.-Sep.	78	DNP Graphic Design Archives Collection VIII Masayoshi Nakajo Posters Freshly Picked from the Archives
Mar.-May	12	Frank Stella and Kenneth Tyler: A Unique 30-Year Collaboration	2006			Sep.-Dec.	61	DNP Graphic Design Archives Collection V LIFE – Kazumasa Nagai Poster Exhibition	Sep.-Dec.	79	Printing through Cloth: 32nd Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
May-Sep.	13	Statements in Black: 5th Exhibition of Prints from Tyler Graphics Archive Collection	Mar.-Jun.	38	Painting on Stone: 13th Exhibition of Prints from Tyler Graphics Archive Collection	2013			2020		
Sep.-Dec.	14	Alan Shields: Images in Paper	Jun.-Sep.	39	Masaki Fujihata: The Conquest of Imperfection – New Realities Created with Images and Media	Feb.		The 24th Denzen Print Award Exhibition	Mar.-Jun.	80	Graphic Design of Food
1999			Sep.-Dec.	40	Tetsuya Noda: Diary	Mar.-Jun.	62	Prints in Blue: 26th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection	Jul.-Sep.	81	Marks in Resonance: Wood Engraving Today
Mar.-May	15	Miran Fukuda New Works: Prints	2007			Jun.-Sep.	63	The Birth of Modern Design – Osaka City Museum of Modern Art Collection	Sep.-Dec.	82	Words and Prints: 33rd Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep.	16	Forms That Speak: 6th Exhibition of Prints from Tyler Graphics Archive Collection	Mar.-Jun.	41	The Wonder of Intaglio: 14th Exhibition of Prints from Tyler Graphics Archive Collection	Sep.-Dec.	64	Relief Prints: 27th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection	2021		
Sep.-Dec.	17	The Story of Prints	Jun.-Sep.	42	Prints Given New Life: 15th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection	Mar.-Jun.	65	CCGA 20th Anniversary 21st Century Graphic Vision	Jun.-Sep.	84	Wanderlust in Graphics
2000			Sep.-Dec.	43	Unique Impressions: 16th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection	Jun.-Sep.	66	DNP Graphic Design Archives Collection VI Katsumi Asaba Poster Archives	Sep.-Dec.	85	Drawing Lines: 34th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Mar.-Jun.	18	New Works 1998-1999: 7th Exhibition of Prints from Tyler Graphics Archive Collection	2008			Jul.-Sep.	67	Robert Motherwell's Lithographs: 28th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection			
Jun.-Sep.	19	Saburo Ota: Existence and Everyday	Mar.-Jun.	44	Thick with Color: 17th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection	2014					
Sep.-Dec.	20	DNP Archives of Graphic Design Inaugural Exhibition: Poster Graphics 1950-2000	Jun.-Sep.	45	Big Prints, Small Prints: 18th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection	Feb.		The 25th Denzen Print Award Exhibition	Mar.-Jun.	83	Ties and Bonds in Graphic Design: DNP Graphic Design Archives Collection
2001			Sep.-Nov.	46	Monologues in Black: 19th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection	Mar.-Jun.	68	Graphics and Music	Jun.-Sep.	86	Unknown Voyage
Mar.-May	21	Invitation to Print Portfolios: 8th Exhibition of Prints from Tyler Graphics Archive Collection	2009			Jun.-Sep.	69	Tadayoshi Nakabayashi: Unknown Voyage			
May-Jul.	22	Tatsumi Orimoto: 1972-2000	Feb.-Jun.	47	Prints and Titles: 20th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection						
Aug.-Oct.	23	Yukio Fujimoto: Reading to Another Dimension	Jun.-Sep.	48	Brilliant Rivalry: Works by Outstanding Designers in the DNP Archives of Graphic Design						
Oct.-Dec.	24	2nd Exhibition of DNP Archives of Graphic Design: The Era of Graphic Design	Sep.-Dec.	49	The Power of Red: 21st Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection						
2002											
Mar.-Jun.	25	Prints Leaping Into Space: 9th Exhibition of Prints from Tyler Graphics Archive Collection									
Jun.-Sep.	26	Kijuro Yahagi: Touching, Piercing, and Tracing with Vision									

ギンザ・グラフィック・ギャラリー

開設 1986年3月4日
名称 ギンザ・グラフィック・ギャラリー(略称/ggg)
所在地 〒104-0061
東京都中央区銀座7丁目7番2号 DNP銀座ビル
Phone:03-3571-5206
Fax:03-3289-1389
開館時間 午前11時～午後7時
休館 日曜日、祝日
監修 永井一正

ginza graphic gallery

Establishment: March 4, 1986
Name: ginza graphic gallery (ggg)
Location: DNP Ginza Building, 7-2 Ginza 7-chome,
Chuo-ku, Tokyo 104-0061
Phone: +81 3 3571 5206
Fax: +81 3 3289 1389
Opening Hours: 11:00am to 7:00pm
Closed on Sundays and Holidays
Adviser: Kazumasa Nagai

京都dddギャラリー

開設 1991年11月5日(大阪・堂島)
2007年5月24日 大阪・南堀江に移転
2014年10月9日 京都・太秦に移転
名称 京都dddギャラリー
所在地 〒616-8533
京都府京都市右京区太秦上刑部町10
Phone:075-871-1480
Fax:075-871-1267
(2022年7月23日より、下記に移転)
〒600-8411
京都府京都市下京区烏丸通四条下ル水銀屋町620 COCON烏丸3F
開館時間 午前11時～午後7時(土曜・日曜特別開館午後6時まで)
休館 日曜日、祝日
監修 永井一正

kyoto ddd gallery

Establishment: November 5, 1991 in Dojima, Osaka
Moved May 24, 2007 to Minami Horie, Osaka
Relocated October 9, 2014 to Uzumasa, Kyoto
Name: kyoto ddd gallery
Location: 10, Kamikeibucho, Uzumasa,
Ukyo-ku, Kyoto City, Kyoto 616-8533
Phone: +81 75 871 1480
Fax: +81 75 871 1267
(Moved to the following from July 23, 2022)
3F COCON KARASUMA, 620 Suiginya-cho, Karasuma-dori Shijo-sagaru,
Shimogyo-ku, Kyoto City, Kyoto 600-8411
Opening Hours: 11:00am to 7:00pm (Until 6:00pm on Saturdays, irregularly open on Sundays)
Closed on Sundays and Holidays
Adviser: Kazumasa Nagai

CCGA 現代グラフィックアートセンター

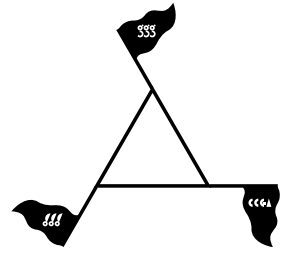
開設 1995年4月20日
名称 CCGA 現代グラフィックアートセンター
所在地 〒962-0711
福島県須賀川市塩田宮田1
Phone:0248-79-4811
Fax:0248-79-4816
開館時間 午前10時～午後5時(入館は午後4時45分まで)
休館 月曜日(祝日・振替休日の場合はその翌日)、
祝日の翌日(土・日にあたる場合は開館)、
展示替え期間中、冬期(12月下旬～2月末)
入場料 一般=300円、学生=200円、
小学生以下と65歳以上および障がい者手帳をお持ちの方は無料。
サロン
利用料 200円

Center for Contemporary Graphic Art

Establishment: April 20, 1995
Name: Center for Contemporary Graphic Art (CCGA)
Location: Miyata 1, Shiota, Sukagawa-shi,
Fukushima 962-0711
Phone: +81 248 79 4811
Fax: +81 248 79 4816
Opening Hours: 10:00am to 5:00pm (Admission until 4:45pm)
Closed on Mondays (Tuesday if Monday is a public holiday),
the day immediately after a public holiday (except Saturday and Sunday),
between exhibitions and during winter (late December through February)
Admission: Adults=¥300, Students=¥200,
Free for young children (through elementary school), senior citizens (65 and over) and the disabled.
Salon Utilization Fee: ¥200

企画・運営 公益財団法人 DNP 文化振興財団
<https://www.dnppcp.jp/foundation>

Planning and Operation: DNP Foundation for Cultural Promotion
<https://www.dnppcp.jp/foundation>



Graphic Art & Design Annual 2021 ggg ddd CCGA

発行	公益財団法人DNP文化振興財団 〒104-0061 東京都中央区銀座7-7-2 DNP銀座ビル Phone: 03-5568-8224
企画・編集	公益財団法人DNP文化振興財団
アートディレクション	松永 真
デザイン	松永 真次郎、清川 萌未
表紙デザイン	葛西 薫
撮影	藤塚 光政 (ggg会場写真)、吉田 亮人 (ddd会場写真)
翻訳	室生寺 玲
印刷・製本	大日本印刷株式会社

